ISSN-2186-8794

明治学院歴史資料館資料集

第13集

『明治学院の外国人宣教師』
―瀬川和雄遺稿集―

明治学院歴史資料館

明治学院歴史資料館資料集

第13集

『明治学院の外国人宣教師』
－瀬川和雄遺稿集－

明治学院歴史資料館

刊行のことば

明治学院歴史資料館館長
播本　秀史
（明治学院大学文学部教授）

故瀬川和雄先生の遺稿集が、本歴史資料館の松岡研究調査員の編纂によって、ようやく出版されることになりました。改めて瀬川先生のご冥福をお祈り申し上げます。また、松岡さんの労苦に感謝いたします。弔辞を述べられた小暮学院長もご遺族との約束を果たすことができて、感慨ひとしおのことと推察いたします。

瀬川先生とは、本学キリスト教研究所ではじめてお会いしました。2004年度のことでした。この年から「明治学院卒業生献身者調査」というプロジェクトでご一緒することになったのです。瀬川先生の精力的な調査によって、戦後だけでも180名位の牧師がリストアップされていました。昭和の初期に神学部は今の東京神学大学に併合されていますので、この数に驚き「えっそんなにいらっしゃるのですか」と申し上げたことを思い出します。ところが、その調査を深めようとした矢先に「個人情報保護法」が施行（2005年４月）されたのです。プロジェクトは余儀なく頓挫することとなりました。

しかし、2008年度以降、歴史資料館では瀬川先生も加わり新たなプロジェクトがはじまりました。瀬川先生の研究成果とその資料を資料集として出版しようというものです。途中、先生の入院による、執筆活動中断時期もありましたが、その後無事回復され、ようやく完成というとき、瀬川先生は2015年６月に天に召されました。その年の夏、ご遺族のご厚意で、キリスト教研究所と歴史資料館に、瀬川家に残されていた資料をご寄贈いただけることになりました。歴史資料館では、先生が資料集執筆に使用されていたワープロのデータをパソコンで読み取れるよう変換し、また、キリスト教研究所の協力も得て、それまで探究されてきた成果を、遺稿集という形でこのたび発刊することにしました。

瀬川先生のご研究の一端、先生の生きる姿勢も伺うことができました。敬服いたします。先生ありがとうございました。本資料集が後学のお役に立てることを願います。

凡例

一．本書は故瀬川和雄先生が生前ご執筆された、明治学院に関連する外国人宣教師についての未完の資料集である。編集にあたってはオリジナルの原稿を尊重し、以下の原則を定めた。

1．漢字の旧字体や異体字は、基本的に新字体に改めた。但し、氏名や地名などの固有名詞については、旧字体や異体字をそのまま残した。
2．かな遣い、ひらがな・カタカナ、送りがなの表記や用法はオリジナル原稿通りとし、ヰ(イ)、子(ネ) などの表記もそのまま残した。
3．表体裁の資料については、掲載情報が整合しない部分もあると思われるが、原則として原表記のままとした。
4．句読点は原則としてオリジナル原稿のままとした。
5．明らかな誤字・脱字・当て字は訂正した。

『明治学院の外国人宣教師』目次

はじめに

・刊行のことば
・瀬川和雄氏略歴…… 1
・瀬川先生葬儀弔辞　明治学院長小暮修也…… 2
・「明治学院の外国人宣教師」の利用について …… 4

第一章　「宣教師論」

来日宣教師　その実態と活動についての一考察　瀬川和雄…… 6

第二章　明治学院教師及び関連校教師

第一部　北米長老教会（PM）宣教師の部 …… 31
第二部　アメリカ・オランダ改革教会（RCA）宣教師の部…… 65
第三部　スコットランド一致長老教会（UP）宣教師の部 …… 85
第四部　北米南長老教会（PMS）宣教師の部…… 90

第三章　明治学院と宣教師

・明治学院神学部　理事教授他教員名簿…… 95
・外国人宣教師の明治学院理事一覧…… 110
・明治学院史に記載された外国人宣教師索引…… 113

瀬川 和雄 氏略歴

＜瀬川和雄牧師略歴＞

1920年生まれ、日本神学校（明治学院神学部が独立）卒、村田四郎氏（明治学院学院長・指路教会牧師・聖書翻訳委員長）と協力し、興望館セツルメント、厚生省児童局、指路教会副牧師、東中野新生教会牧師を経て明治学院常勤理事を11年間勤める。2015年 6 月召天。

著書　『興望館セツルメントと吉見静江：その実践活動と時代背景』興望館 2000

※日本図書館センター刊『社会福祉施設史資料集成　第23巻』2012としても刊行

『吉見静江』大空社　2001

『婦人宣教師達の足跡：1935-1940：北米・カナダ諸教会派遣：付戦前期児童保護関係資料』興望館　2004

（研究調査員　松岡　良樹）

瀬川 和雄先生への弔辞

学校法人明治学院 学院長
小暮　修也

瀬川和雄先生は、1920年12月16日生まれで、明治学院神学部が独立した日本神学校の卒業と聞いております。興望館セツルメント、厚生省児童局、横浜指路教会副牧師、東中野新生教会牧師を歴任し、この間に明治学院評議員を1975～79年、明治学院理事を1978年～98年までの20年間、そのうち常任理事を10年間勤められました。この間に、当時、私ども若手の教員と交流してくださいました。瀬川先生は、気さくな方で、若い人とも議論をするのが好きでした。

瀬川先生は粘り強い人でした。『ヘボン書簡集』を書いた高谷道男先生がアメリカからマイクロフィルムを持って帰りましたが、拡大して映し出す装置がなく、瀬川先生が指路教会から幻灯機を借りて、部屋にシーツを張って写し出し、原稿にしたというエピソードがあります。

その『ヘボン書簡集』は岩波書店から発行されていましたが、この本の増し刷りを高谷先生が岩波書店に頼んでも、刷り部数が足りないとのことで断られたところ、瀬川先生が交渉に行き、OBに売りつける部数を提示して、最後の増刷が行われたという話もあります。

また、瀬川先生は、社会福祉に生きた人でした。吉見静江さんという社会福祉事業家と約24年間苦楽を共にし、吉見さんが興望館というセツルメント事業（セツルメントとは、宿泊所・授産所・託児所など、住民の生活向上のために助力する社会事業）に取り組めば一緒に仕事をし、吉見さんが戦後1947年に厚生省児童局保育課長に就任し、母子福祉の現場である保育所の改善に努めようとした時も、瀬川先生も厚生省児童局に入り、さらには社会福祉施設茅ケ崎学園でも主事として吉見静江さんを支えました。

当時のことを瀬川先生はこのように伝えています。「1947年に厚生省児童局に保育課が作られ、開設されたばかりの保育課で保育所関係の全ての業務を担当していました。保育所担当は７～８人しかおらず、その人数で全国を扱うため、毎日夜遅くまで働いたうえに徹夜が週に一回は必ずある状態でした。」

当時は、敗戦後の物資の面でも栄養の面でも不足していた時代で、家に粉ミルクを配給しても売りとばされてしまうので、「給食」という形で栄養が確実に子どもたちに届くようにしたとのことです。こうして、乳幼児の栄養が上がってき

て、日本の乳児死亡率は確実に減ったということです。このようなことに瀬川先生は、一生懸命取り組んでくださいました。なぜ、このようなことに取り組んだかと言うと、父上である瀬川八十雄氏が救世軍の社会事業の責任者であり、「常に社会福祉が身近なものであった。三つ子の魂八十までである」と瀬川先生は記しています。

瀬川先生は、2000年に、『興望館セツルメントと吉見静江―その実践活動と時代背景』という本を編集されました。これが、2012年に『社会福祉施設史資料集成 第Ⅲ期 第23巻』に収められて刊行されましたが、社会福祉関係者の間で、「最近、本をまとめた新進気鋭の瀬川和雄とは何者か?」と話題になったようで、そのことを瀬川先生は「新進気鋭ねえ?結構年を取っているんだけど」と面白がっておられたそうです。

瀬川先生が最近まで取り組んでおられたのが、宣教師に関係することです。青山墓地にあるミッションスクール関係者の墓地を整備するために、各学校と交渉し明治学院、青山学院などのプレートを貼り、分かりやすくしたことです。また、明治学院を中心とする宣教師の記録を残すことでした。これは、明治学院歴史資料館の資料集第10集として、2012年に発行する予定でした。しかし、瀬川先生がご病気で入院され、陽の目を見ていませんが、原稿はそろっているといわれており、ご遺族のお許しがあれば、私たちは瀬川先生の著作として資料集を発行したいと考えています。

瀬川先生の功績はあまりにも多く、ここに全てをのべることはできませんが、私どもはその志を少しでも受け継いでゆけたらと思っております。

イエス・キリストに愛され、忍耐を持って取り組んで来られた瀬川和雄先生に感謝し、主の許で憩われて安らかであることを信じています。また、ご遺族の皆様に主の慰めと平安が豊かにありますようお祈り申し上げます。

2015年 6 月 4 日

「明治学院の外国人宣教師」の利用について

瀬川和雄氏はこの資料を作るにあたって、日本基督教会の外国人宣教師を以下の様に調査した。

①　JAPAN Directory による調査

立脇和夫監修『幕末明治在日外国人・機関名鑑：ジャパン・ディレクトリー』復刻版　ゆまに書房より、各年度の掲載からその名前と住所を抜出し在日の状況を調べた。

このDirectory は在日外国人を居留地別に所属組織名・肩書・住所を記載した一種の紳士録で1861年から1912年までの掲載がある。

こうして各宣教師について、初載年と最後の掲載年はその西暦年を記し、各年毎の版に存在すれば〇印を、休暇や一時帰国とされ、日本にいない年はAと記載した表を作成した。

②　『日本キリスト教歴史大事典』教文館 1988年 との参照

この事典を参照し、掲載がある場合はそのページを追加記載した。

③　『基督教年鑑』『日本基督教会年鑑』掲載の調査

JAPAN Directoryとの間に空白期間があるが、補完資料として用いた。

④　各学校史・各教会の参照

①に記載された住所地により勤務先学校や教会のあたりをつけ主な学校史と教会史を参照した。→本資料集第二章「明治学院教師及び関連校教師」に利用

⑤　独自に各学院年史の宣教師人物索引を制作

→本資料集第三章「明治学院と宣教師」に利用

＜成果物＞

⑴　明治学院教師及び関連校教師

⑵　在日宣教師駐日期間一覧

⑶　各教会宣教師名簿

⑷　明治学院年史掲載外国人宣教師索引

この成果物は明治学院歴史資料館と打ち合わせを重ねて作成してきたが、瀬川氏は完成直前に召天され、ワープロ原稿が残された。これを歴史資料館がMS-DOS変換し、成形して発行にこぎつけたものである。

このため、以下の様な欠陥を持つ

・JAPAN Directory は１年一回の刊行であり、最大で１年の誤差が含まれている可能性がある。各ミッションからの派遣記録との照合はない。

・原稿は類似原稿が多数あり、最も新しいと思えるものを採用した。

・ワープロからMS-DOSファイルへの変換時に、半角文字・ワープロ専用文字・記号・タブなどに変換エラーが残された。これらを極力修正したが、誤変換などの内容が残った可能性は避けきれない。

しかし、現在までこのような資料は全くなかったので、あえて資料集として刊行するので、この点を理解の上利用されたい。

＜注＞

▽この資料集にある外国人宣教師の日本語表記は以下の様に様々な形がある。

例：フルベッキ・ヴァーベック／ミラー・ミロル／ブラウン・ブラオン／ライシャワー・ライシャワル／ピアソン・ピヤソン／マクネア・マク子ヤ

これは時代によって英語の日本語表記が各種でたからである。これらの表記の中で最も親しまれたと思われる形を瀬川和雄氏が選択したものによる。

▽遺稿はワープロで作られ同一原稿に多くのバージョンがあり、分割されてもいた。MS-DOS形式への変換作業を通じてタイムスタンプは失われ、ファイルエラーで変換できずに終わった原稿もあった。このため、変換できた原稿から最終原稿と思われるものを採用した。

▽この資料集で＊のついた部分の追記は松岡による。

▽参照資料は以下の略号を用いている。

JD － Japan Directory

CYB － Christian Year Book

明治学院歴史資料館　研究調査員　松岡　良樹

来日宣教師　その実態と活動についての一考察

目　　次

一　序　　説…… 8
二　宣教師とは……10
三　宣教師の来日……13
(1)　鎖国から開港へ……13
(2)　日本の状況……14
(3)　宣教師来日時の状況……17
(4)　宣教師の組織……18
四　宣教師の活動（第一期）……22
(1)　第一期に於ける宣教活動……22
Ⅰ　アメリカ監督教会……24
Ⅱ　アメリカ長老教会……24
Ⅲ　アメリカ改革教会……25
Ⅳ　アメリカ・バプテスト自由教会……25
(2)　宣教師のはたらき……26
Ⅰ　日本語学習……27
Ⅱ　書籍の輸入、頒布……28
Ⅲ　聖書の日本語訳……28
Ⅳ　教育……29
Ⅴ　医療奉仕……30

資料
(1)　初期（1859-83）滞日宣教師名簿
付　『伝道史』本文未記載宣教師名簿
(2)　滞日宣教師（教派・団体別、来日年度別）一覧
付　『伝道史』人名（宣教師）索引

駐日宣教師
PM・RCA

付表
PM派遣宣教師名簿・PM派遣宣教師駐日期間図表・RCA

一　序　　説

大正・昭和初期における日本の社会事業の活動を歴史的に考察するとき、そこにキリスト教社会事業の残した功績が歴然として示され、その一の要件として宣教師の参加・活動を軽視することはできない。そのため本研究は、近代日本の社会事業研究の先行研究として、まづ宣教師についての研究を行うものである。

19世紀の後期より20世紀前半、即ち昭和戦前期に至るまでの期間における日本の社会事業は、一方において法規に基づく運営がなされたが、他方これと全く対照的と言えるものとして、その基底が宗教心に基づく民間社会事業が根深くその使命達成のため、弛まぬ歩みを持続してきた。その流れの中にあって基督教社会事業は一般概念として欧米各国の基督教会に負うところが多大であったと考えられている。しかし、具体的に「どのような組織により、如何なる方法で、どの方面に影響力をもたらしたか」という設問、また、その結果として「当時の社会事業施設は何を得たか。また、終戦より今日に至る60余年にわたる日本の社会情勢の変化に対してどのような貢献がなされたか」との問掛けに対して、いずれの設問にも明確で基本的な回答がなされているとは言えないのではなかろうか。

勿論、早急に明解な回答が得られるとは思わない。今回は海外の諸教会から日本に派遣され、日本の各地で活動をした「宣教師」の諸状況を当時の記録・統計を通して解明して行くことにより「日本における宣教師活動の実態」の一端を解明したいと思う。

しかし、宣教師の来日より既に約150年を経過している。その間、宣教師活動の実態についても種々の変化がある。そのすべての期間について検討を重ねることは困難なので本研究においては、日本に於ける活動の初期について限定して検討することとする。すなわち、1859年にウイリアムス（Williams, Rt. Rev. C. M.）、ヘボン（Hepburn, J. C.）等が来日し、1883年４月に大阪に於いて宣教師会議が開催された時期までの約20余年間について分析・解明を行うこととする。

その理由として、この会議において、宣教師自身が約20余年にわたる自己並びに同職の活動を反省し、将来への展望について協議しているからである。

この会議の内容、成果について多少記述するとすれば、この会議の準備時期より会議の実施、取纏めに至るまで全ての段階に関与した委員の一人ヘール（Hail, Rev. J. B.）自身の日記の中に、『この会議の準備段階において、日本人の参加問題につき、「日本人の主にある兄弟達を招いて、大会のはじめに論文を読んでもらうか」』という基本的かつ具体的な問題について議論が白熱したと記述している。

又、日記に記載された大会に於ける議題の重要な問題の一として「外国基金を

伝道に用いること」があり、賛否両論が戦わされ、次のような見解に達したと記録されている。

「日本における日本の教会は、完全な自立を教えられねばならない。宣教師は派遣された母国の教会によって支援されるのだから、日本の教会にとっては負担にならない。しかしできるだけ早く、日本人によって教会が建てられ、牧師を雇い、書籍代を支払い、自分たちの学校を支えるようにならなければいけない。余り外国基金を潤沢に導入することはよい影響をもたらさない」との意見が発表されると共に、他方において次のような意見もあった。

「宣教師派遣などに基金を用いるならば、教会を建て、自分たちのお金で日本人牧師を雇うよりはるかに迅速、かつ、完全に、日本をキリスト教化できる」というものであった。

この会議に於いてこれら当時の教会の組織・運営に関する案件とともに、幾つかの論文の発表がなされた。

特にフルベッキ（Verbeck, Rev. G. F.）がこの会議の中心ともいえる『HISTORY OF PROTESTANT MISSIONS IN JAPAN』と題する講演を行っている。この講演を注目し、本研究の基盤として取り上げる事とする。フルベッキは宣教師会議の準備委員会より講演依頼を受け、その準備をするに当たり、宣教師を日本に派遣している各教派・団体の日本ミッションの主事宛に講演原稿作成について協力依頼の文書を送付している。フルベッキはこの書面に於いて会議開催の意義を次のように述べている。

⑴ 日本に於ける最初の宣教師会議であるので、将来の参考のために各ミッションについて一般に関心がある事項を記録し、保存するのに最も適当な機会である。

⑵ 各ミッションに関心を有するすべての人々に、とくにこの方面の後継者に絶好の機会である。

なお、各ミッション主事に依頼した内容は次のとおりである。

⑴ 歴史的調査

a．ミッションの起源

b．伝道事業の開始、成長、発展

c．宣教している地域、その地域の人口

d．事業計画

e．邦人教会の自給独立・邦人牧師および伝道師

⑵　教育的調査

a．男子および女子の学校、通学生と寮生、

b．専門学校と神学校、

c．教授、学生、卒業生の数

d．英語の使用程度

e．日曜学校およびその生徒

f．欧亜混血児の有無

⑶　医学的調査

a．病院、施療所、その他医療施設

b．診療した患者数

c．この事業における成功度

⑷　文書的調査

a．図書館および読書室、ミッションの印刷事業

b．ミッション関係者の編集刊行した図書、小冊子ならびにそのページ数

c．書籍代理店、書庫、および聖書頒布人

d．定期刊行物状況

これらの資料に基づき各派・団体の宣教師団が各時期に当面した諸問題、それに対応しての各教派の活動、活動実施にあたっての宣教師の任務等につき分析を行ったものである。この論文により、当時の教会の実態を知るための手掛かりを得ることが出来る。

二　宣教師とは

宣教師活動の実態研究に先立ち、その本論より逸れるものであるが、まづ、その宣教師の定義について考察してゆくこととする。

「宣教師」の定義

「宣教師」という名称はいつ頃から用いられた言葉であるのか。また、如何なる役職を持つ人のことを名指して言うのであろうか。

「宣教師」という言葉は、英語の“Missionary”の日本語訳である。この翻訳語について宣教師ヘボンによって編纂された『和英語林集成』（英和辞書も付載）（以

下本項において「本書」という。）において検索することとする。

ヘボンの来日（1859［安政６］年）目的は伝道であり、そのための活動は当時いまだ日本がキリシタン禁制下であった関係もあり、直接に宣教活動が許されていなかったので、まづ聖書の翻訳から手掛けられたのであった。そのため本人は来日当初より日本語の研究及び辞典の編纂に努め、1867（慶応３）年に上海で日本最初の和英辞典として『和英語林集成』の初版を発行するに至った。次いで、再版（1872［明治５］年）、第三版（1886［明治19］年）とその都度改訂を行いつゝ発行されている。この第三版の版権を丸善商社に譲って得た2000ドルを明治学院に寄付し、これにより同学院はヘボン館を建設した。同社は更に版を重ね九版に及んでいる。

本書に掲載されている用語は、ヘボンが日常彼に接する各階層の日本人の言葉を採取したものを主とし、初版において和英の部２万語余、英和の部１万語余であった。用語採取は初版発行後も続けられ再版、第三版発行のため準備がなされたものである。

さて、「宣教師」なる語は何時頃から用いられていたであろうか。本書和英の部には初版、再版のいずれにも該当項目がなく、第三版に初めて収録されている。また、本書英和の部に於いては、初版に該当項目がなく、再版に「Missionary」としての項目があり、第三版ではその説明文が改訂されている。

因みに、本書の再版、第三版を見ると「missionary」の共通の説明文として「Kiyoshi」があるが対象人物が宗教者に限って用いられる用語と見ることができる。

即ち、宣教師が来日した当初は日本人にとって彼等は「先生」でなく「教師」であった。そこにはヘボン自身の意思があったのではないかと推察される。それは、本書の「先生」の項目に「A polite title used in addressing an elderly man, a physicianor a scholar.」とあり、両者をはっきりと区別しているところからも推察できる。

ヘボンの伝記に「ヘボン先生」と記されている場合があるが、果たしてヘボン自身日本在任中に「先生」と呼ばれたか、否か興味ある問題である。

・Senkyoshi センケウシ　宣教師　n. A missionary.（＊第三版・和英の部）
・Missionary, n. Yaso no michi wo hiromeruhito, kiyoshi（＊再版・英和の部）
・Missionary, n. Kyoshi, senkyoshi, dendosha.（＊第三版・英和の部）
・Kiyoshi キヤウシ、教師. n A teacher of religion, a priest, clergyman, missionary
（＊再版・和英の部 第三版はKyoshi）

「宣教師」の語意

「宣教」は中国の古典には見出だせない熟語であると思われる。「宗教をのべひろむること」の意であるが、日本人による造語であるのではなかろうか。「師」は神明の敬称、（周禮）、僧侶の敬称（法華經）である。この二つの独立した用語を併せ用いることによってMissionaryの訳語としたのではなかろうかと思考される。Missionary の来日以来、特に教会が組織され、Missionaryと日本人信徒との日常の交流が緻密になってきた時、呼称の必要から生まれた用語であると思考するとき、『和英語林集成』の再版1872（明治５）年に収録されなかったのも不自然でなくなる。

しかし、ここに興味ある問題として次のような一つの事例がある。

明治政府によって「宣教使」なる職制が1869（明治２）年に制定されている事である。この職制は､「使」となっており､Missionaryの「師」と区別されている。この「使」は「命を奉じ出でて或事に當る人」（史記）をいう。特に日本基督教会はある時期同教会と協力関係にあったMissionaryを宣教使と呼称している事実があることに注目する必要がある。

> 明治初年、神祇官ニ附屬シテ大教宣布ヲ掌ツタ官。明治維新即チ王政復古ナルコトカラ五月政府大官公卿諸侯ヲ朝召シテ皇道興隆ニ関スル意見ヲ上申セシメタガ、七月従前ヨリ存セル教導取調局ヲ宣教使ト改稱シ、祭政一致惟神ノ大道宣布ノ機關トシ、長官・次官・判官以下ノ事務官ト大・中・少ノ宣教使（後ニ博士）及講義生ヨリ成ル説教官ヲ置イテ、神祇官ニ屬セシメタ。而モ政府ハ教化機關ノヨリ充實ヲ必要トシ、三月教部省ヲ設置。

日本基督教会創立四十年

一　四十年記念時代の教勢概要

大正元年十月十二日宮城縣仙臺市仙台教會堂に於て日本基督教會創立滿四十年記念會を開催す、蓋し此の時日本基督教會第二十六回大會は仙台市に於て開會中なりしを以てなり。　（以下略）

四　二十五年以上在留宣教師に対する決議

惟ふに日本基督教會は米國に於けるプレスビテリアン教會及リフオームド教會並に婦人協同傳道會社より派遣せられたる宣教使諸氏に負ふ所少なからず。諸氏は種々の方法に依りて我國に於ける教會の建設並に基督教の擴張に貢献せられたり。諸氏は我教會創立に當りてその業に參與せるを始めとして、

或は地方に於ける教會の創立者となり、或は直接傳道に従事し或は基督教主義の教育事業に努力し、或は教役者養成の為めに盡瘁せられ、又せられつゝあり。（以下略）

三　宣教師の来日

(1)　鎖国から開港へ

宣教師が日本に初めて来航したのは1549年であった。当時マレー半島のマラッカで布教活動をしていたイエズス会極東宣教師フランシスコ・ザビエルである。彼は国外逃亡中の殺人犯「パウロ彌次郎」を改宗させたが、同人を伴い鹿児島に到着した。そして、僅か二年余の間にカトリック・キリスト教発展の基礎を築いた。しかし、時を経て切支丹迫害が始まり、長崎における二十六聖人の処刑が行われ、1614年、家康により「切支丹禁制」が発布されるに至った。

本研究に於いては、このキリシタン時代、その後の二世紀余にわたる鎖国時代については、特に触れることなく、1858年「日米修好通商条約」締結により、居留地内の外国人に対し信仰の自由が許され、翌1859年に同条約の批准とともに宣教師が来日するに至った時点以降を取り上げることゝする。

確かに、この時期以前において、前述のごとく早い時期に於けるカトリック教会の組織的な日本への布教活動による活動はあったが、米国の教会から組織として正式に宣教師・牧師が派遣された時点をもってキリスト教の渡来の時期として考えるのである。

しかし、この時点に於いても、外国人の入国は許されたが、居留地として定められた地域に居住しなければならない制限があると共に、宣教師にとって致命的な制約は自己の信仰のための礼拝は許されたが、切支丹禁制高札が撤去された1873年２月24日までは、公然として日本人への宣教活動が出来なかったことである。

当時の来日外国人にとって規制される諸規定には、次のようなものがあった。

> 日本に在る亜米利加人自らその宗教を念じ礼拝堂を居留地に置き障りなし並に其の建物を破壊し亜米利加人宗法を自ら念ずるを妨る事無し。亜米利加人日本人の堂宮を毀傷する事なく又決して日本神仏の礼拝を妨げ神体仏像を毀る事あるべからず。雙方の人民互いに宗旨につきこの論争あるべからず。日本長崎役所に於て踏絵の始末は既に廃せり。
>
> （日米修好通商条約第八条）

安政五年（一八五八）六月十日調印
安政六年（一八五九）批准　　踏絵廃止
日蘭和親条約　安政二年十二月二十三日調印

切支丹邪宗門ノ儀ハ堅ク御禁制タリ。若シ不審ナル者有之ハ其筋之役所へ可申出、御　褒美可被下事。　　（慶応四年三月　太政官布告）

先般御布令有之候切支丹宗門ハ年来固ク御禁制ニ有之候。其外邪宗門之儀モ総テ固ク被制禁ニ付テハ混淆イタシ心得違有之候テハ不宜候に付之候（中略）相候様早ク制札調替可有掲示候事。
一、切支丹宗門之儀ハ是迄御禁止通固ク可相守事
一、邪宗門之儀ハ固ク禁止候事
（『日本外交文書』第一冊、六四四頁）

⑵　日本の状況

宣教師来日より大阪会議に至る期間についての宣教師の活動について、フルベッキは宣教師会議において講演をおこなっている。その講演は、宣教面の叙景に重点が注がれ、宣教師たちがとらえた幕末・維新という社会的・政治的大改革に関する日本の当時の状況については言及されていない。そのため宣教師が来日して如何なる社会情勢のもとで宣教し、生活したかを直接的にこの講演のなかから把握することはできない。そこでその間の情勢を推量するためこの時期の日本の状況を年表を記述することによって解明することにする。

1844　フランス船琉球に来航。薩摩藩に限り琉球対仏貿易を許す。
1847　島津氏、琉球に英・仏に開港。
1849　イギリス船、下田来航。
1850　朝廷、国難を七寺、七社に祈願、再び海防の勅諭幕府に下る。
1852　ロシア船、下田来航。
1853　幕府、開国の可否を諸候有司に問う。
　　米使ペリー浦賀来航。
　　日米和親条約、日英・日露和親条約
1855　幕府、長崎海軍伝習所開設。幕府改革の布告。
　　江戸大地震。
1856　米総領事ハリス下田駐在。

1857　幕府、講武所内に軍艦教授所開設。
1858　６月、日米修好通商条約調印。次いで７月日蘭・日露・日英、９月日仏とそれぞれ調印。
　　コレラ（ころり）流行、死者３万人。
1859　安政の大獄。
　　神奈川、長崎、箱館３港を開き貿易開始。
1860　桜田門外の変。
　　公武合体を策し、和宮降嫁を奏請（翌年10月東下、明後年 ２月婚礼）。
　　横浜村開港。
　　以後数年間にわたり米価暴騰による農民一揆頻発。
　　ヒュースケン殺害。外国人殺傷事件相次ぐ。
1861　長洲藩士長井雅楽、公武合体論の議を建白。
　　ロシア軍艦、対島停泊事件。
　　英公使館（東禅寺）襲撃。
1862　坂下門外の変　生麦事件。
　　英公使館（御殿山）焼討。
1863　賀茂・石清水に行幸、攘夷祈願、攘夷論最高潮。
　　攘夷論者暴行頻発。
　　５月長州藩、外国船砲撃、７月薩英戦争。
1864　蛤御門の変、長州征討
　　四国艦隊下関砲撃。
1866　薩長連合の盟約成る。
1867　討幕の密勅、薩長に下る。徳川慶喜、大政奉還を乞う。
　　翌日勅許、王政復古の大号令。
　　兵庫開港勅許。
　　浦上信徒各藩配流開始。
1868　明治維新。
1869　東京奠都。
1871　廃藩置縣。
1872　太陽暦採用。人身売買を禁じ年期奉公人を解放。
1873　征韓論破れ西郷隆盛下野。
　　切支丹禁制高札撤去。浦上信徒帰村。
1874　佐賀の乱。
1875　立憲政体漸立の詔。

1876　熊本神風連の乱、萩の乱、秋月の乱。
1877　西南の役。西郷隆盛自殺。
1878　郡区町村制編制法・府県会規則・地方税規則（三新法）公布。
1879　東京府会開く。民法起草に着手。
1880　片岡健吉他、国会開設の請願。大日本国会期成有志公会成立。
1881　国会開設の詔。
1882　伊藤博文、憲法取調のため渡欧。
1883　伊藤博文帰朝。

以上は宣教師の来日の初期の時代の日本の状況を『標準日本史年表』より抜粋したものである。攘夷論、開港論が喧しく叫ばれ、政治面では幕藩体制の崩壊がせまっていることを身近に感じとられる。又、社会一般においては物価高騰があり、早い時期から頻発している農民一揆は終わることを知らないという状況であった。このように社会的に全ての時点で混乱を極め、同時に社会情勢が非常に早い速度で変化していったのである。

宣教師が母国への書簡のなかに、当時の日本の日常生活の中で日本在留の欧米人が日本人によって街頭で刺殺された模様を知らせる記事がある。又、通訳として採用した人物が政府のスパイであったとの報告も見受けられる。

このような時期にあって時の政府が宣教師による基督教布教を受け入れることが不可能であったことは無理からぬことであった。フルベッキは前記会議における講演において次のように言及している。

「宣教師たちは、非常な猜疑の眼を持ってみられ、油断なく警戒されており、宣教師とどのような接触も厳重な監視のもとに行われているということは、すぐ気付いた」

「宣教師たちの努力は、数年間、政府の厳重な監視のためほとんど語学の習得にかぎられていた」

又、宣教師たちの眼から日本人を観察したとき、宗教的状況に関して、日本人の精神がもっぱら仏教と儒教に支配され、神道はほとんど宗教的な感化力を持っていないことを知った。一方道徳的な面で国民の甚だしい不道徳、無神経と蒙昧さに驚かされている。国民の全般にわたる道徳的堕落として特に次の二つがあげられている。

一、正直さの欠落、全く不愉快な不正直さの横行
二、性的関係に関するごく普通の倫理性に欠けていること

日本に於けるキリスト教受容と宣布に障害となっている偶像崇拝と不道徳とを

見ると、これら二点のうち、後者の方が執拗で根強いといって差支えないであろうと言われている。

しかし、宣教師たちは、これらの憂慮すべき道徳的廃頽のなかに多くの快い事柄にも遭遇している。即ち、一般社会のなかに「温かい家庭の愛情、心からの親切、真実の同情、誠実、忠実、庶民の平和を愛する心、人々の礼儀正しさ、丁寧さなどが、最下層の人々におよんで存在している」事実であった。

⑶ 宣教師来日時の状況

条約の批准を待って宣教師の来日が始まる。このことについては、中国上海で伝道していたアメリカ監督教会宣教師 サイル（Syle, E. W.）が1858年病気静養のため長崎に来たとき、同行した中国のアメリカ公使館書記官 ウイリアムズ（Williams, S. W.）、元アメリカン・ボード入華宣教師およびアメリカ巡洋艦ポーハタン号付牧師 ウッド（Wood, H.）と共に、連名で日本伝道のために宣教師を派遣するように文書をもって各自が所属する伝道会本部に訴え、日本伝道の端緒となったのである。なお、サイル自身1870年頃来日、横浜のイギリス領事館付仮牧師、開成学校の教師を務めている。ウッドについては、履歴が判明していない。一説には、上記三氏の所属教派について、サイルは長老派教会、ウイリアムズはアメリカ監督教会、ウッドは改革派教会と言われ、この説をとると1859年に来日した各宣教師の所属教派と合致することになる。

欧米の諸教会、教派のあいだには海外宣教の思いが高まっていた時であり、この要請が直接的動機となり宣教師の来日が実現している。

この三者の配慮に関連する事情として次のような一件があったとウイリアムズに関する書物に記載されている。即ち、オランダ公使が日本の当局者に語ったと伝えられている言葉としての一文である。ウイリアムズはこの一文を知り、サイル、ウッドと協議したとのことである。

「この国に阿片とキリスト教とをば入れない方策が考慮されるならば他の諸外国人とも全て貿易通商の権利を許可する準備がある」

ちなみに、日本は「日米修好通商条約」調印一ヶ月後に「日蘭通商航海条約」を調印している。

フルベッキは1859年に第一陣としてアメリカ監督教会のリギンス師が長崎に到着して以来、1883年に大阪で宣教師会議が開催された24年間を基督教宣教にとっては一つの時期としている。本研究においてもそれに倣うことにする。しかし、記述の便宜上として本研究では1873年に切支丹禁制に関する高札が撤去された時

点前後を分岐点として、それ以前を第一期以後を第二期と呼称することゝする。各々の時期の状況を次のように表現することが出来る。

⑴　第一期　伝道準備と待望の時期

⑵　第二期　進歩的な実現と達成の時期

さて、この24年間に来日した宣教師は、第一期として1859年にアメリカ監督教会、アメリカ長老派教会及びアメリカ改革派教会より派遣された者として既婚者４組、８名、単身者２名計10名があった。引続き1860年にアメリカ監督教会及びアメリカ・バプテスト自由伝道協会より既婚者１組、２名、単身者１名、計３名、1863年に監督教会及び長老派教会より既婚者１組、２名、単身者１名計３名が加わり、合計13名が来日した。しかし、これらの宣教師のうち、単身者３名がそれぞれの理由で短期間の滞日の後に帰国している。以後1869年にアメリカン・ボード及び教会伝道協会派遣の宣教師が来日するまで宣教師の来日は無かった。切支丹禁制高札が撤去されたのは前述のごとく1873年である。従って第一期の滞日宣教師は10名に止どまったのである。しかし、禁教下での宣教師の準備と待望による宣教開始の良き準備となったのである。この準備については後述することとする。

⑷　宣教師団の組織

1859年に最初の宣教師が来日した。各教派は所属する宣教師が日本国内に於いて活動を開始するにあたって日本ミッションを組織し、各宣教師はその組織のもとで活動を開始している。ただ、来日宣教師の人数が僅少の教派の場合、日本ミッションを組織したか否か組織化についての記録が見出だせない場合がある。

これらミッションを列記すると次の如くなる。宣教師来日順に列記することとする。

注　⑴　正式名称　末尾の（　　）書きは教派名の略号を示す

⑵　日本における呼名

⑶　日本の関係教派名（教派名は1941年のプロテスタント各教派合同以前の各教派の名称を原則として用いた）

1. 1859年　アメリカ監督教会

⑴　Protestant Episcopal Church in the United States of America, (PE)

⑵　米国監督教会、米国エピスコパル教会。

(3) 日本聖公會

2. 1859年 アメリカ長老教会
(1) Presbyterian Church in the United States of America, (PS)
(2) 米国（北）長老教会、米国プレスビテリアン教会。
(3) 日本基督教會

3. 1859年 アメリカ改革教会
(1) Reformed Church in America (Dutch) , (RCA)
(2) 米国和蘭改革派教会、ダッチ・リフオームド、米国リフォームド教会
(3) 日本基督教會

4. 1860年 アメリカ・バプテスト教会
(1) American Baptist Missionary Union, (ABM)
(American Baptist Free Mission Society (ABF) から日本宣教地をゆずり受け、その宣教師を２名迎え入れた)
(2) 米国（北）バプテスト伝道会社。(米国浸礼自由伝道会社)
(3) 日本バプテスト教會

5. 1869年 アメリカン・ボード
(1) American Board of Commissioners for Foreign Missions, (AB)
(2) 米国伝道会社, アメリカン・ボード・ミッション, アメリカン・ボード
(3) 日本組合基督教會

6. 1869年 教会伝道協会
(1) Church Missionary Society (CMS)
(2) 英国協会伝道会社
(3) 日本聖公會：

7. 1871年 アメリカ・ミッション・ホーム
(1) American Mission Home ←Woman's Union Missionart Society of America for Heathen Lands

(2)　米国婦人一致異邦伝道会社ミッション・ホーム、亜米利加婦人教授
(3)　日本基督教會

8. 1873年　アメリカ・メソジスト監督教会
(1)　Methodist Episcopal Church,U.S.A.（MEC）
(2)　米国美以教会
(3)　日本メソヂスト教會（美以教会又は美以美教会→）

9. 1873年　カナダ・メソジスト教会
(1)　Methodist Church of Canada（MC）
(2)　カナダ・メソジスト教会
(3)　日本メソヂスト教會

10. 1973年　福音伝播協会
(1)　Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts.（SPG）（国外福音伝播協会）
(2)　英国福音伝播協会
(3)　日本聖公會

11. 1874年　エディンバラ医療伝道会
(1)　Edinburgh Medical Mission
(2)　エヂンバラ・メデカル・ミッション
(3)　日本組合教會

12. 1874年　スコットランド一致長老教会
(1)　United Presbyterian Church of Scottland,（UP）
(2)　スコットランド一致長老教会
(3)　日本基督教會

13. 1876年　北アメリカ福音教会
(1)　Evangelical Association of North America,（EA）
(2)　米国福音教会
(3)　日本福音教會

14. 1877年　カンバーランド長老教会
　　(1)　Cunberland Presbyterian Church（CP）
　　(2)　米国カンバーランド長老教会
　　(3)　日本基督教会

15. 1877年　東洋女子教育振興協会

16. 1879年　イギリス・バプテスト教会
　　(1)　Baptist Missionary Society（English）（BMS）
　　(2)　イギリス・バプテスト伝道会
　　(3)　日本バプテスト教會
　　（1890に教区をアメリカ・バプテスト宣教連合に委譲）

17. 1879年　合衆国改革教会
　　(1)　Reformed Church of the United States（RCUS）
　　(2)　合衆国改革教会
　　(3)　日本基督教會

18. 1880年　メソジスト・プロテスタント教会（MP）
　　(1)　Methodist Protestant Church
　　(2)　メソジスト・プロテスタント教会
　　(3)　日本メソヂスト教会

以上は1859年以来1883年に至る24年間に米国の各教会が設置した日本ミッションの一覧であるが、この各ミッションに属する宣教師数は次の通りである。

注　①　既婚宣教師（宣教師が結婚した時、配偶者は原則として宣教師となる。組で表示）

②　独身男子宣教師（滞日中に結婚した場合の記録が不備のため全期間独身として表示）

③　独身婦人宣教師（未婚婦人宣教師と配偶者死亡後の婦人宣教師の合計数）但し、男子宣教師が婦人宣教師と結婚した場合、その結婚記録が正確に保存されていないため同一婦人が、③と①の双方に計上されている場合がある。

④　①を２人として計算しての合計人数

日本ミッション名	設立年	1859～1883実数				1883現在数			
		①	②	③	④	①	②	③	④
1 アメリカ監督教会	1859	7	9	6	29	6	2	2	16
2 アメリカ長老教会	1859	11	4	16	42	9	1	12	31
3 アメリカ改革教会	1859	11	1	8	31	7	−	3	17
4 アメリカ・バプテスト教会	1860	8	1	3	20	5	−	3	13
5 アメリカン・ボード	1869	18	3	17	56	15	1	11	42
6 教会伝道協会	1869	9	4	2	24	9	1	1	20
7 アメリカ・ミッション・ホーム	1871	−	−	13	13	−	−	4	4
8 アメリカ・メソジスト監督教会	1873	10	5	14	39	11	2	10	34
9 カナダ・メソジスト教会	1873	4	−	1	9	3	−	1	7
10 福音伝播協会	1873	1	6	1	9	4	1	2	11
11 エデインバラ医療伝道会	1874	1	−	−	2	1	−	1	3
12 スコットランド一致長老教会	1874	5	1	1	12	5	−	−	10
13 北アメリカ福音教会	1876	3	−	1	7	2	−	1	3
14 カンバーランド長老教会	1877	2	−	2	6	2	−	2	6
15 東洋女子教育振興教会	1877					−	−	1	1
16 イギリス・バプテスト教会	1879	−	1	−	1	1	−	−	2
17 合衆国改革教会	1879	1	1	−	3	1	−	−	2
18 メソジスト・プロテスタント教会	1880	−	−	1	1	−	−	2	2
		91	36	86	304	81	8	56	226

四　宣教師の活動（第一期）

⑴　第一期に於ける宣教活動

第一期に来日した宣教師は最初の二年間に限られ次の人々であった。これらの宣教師が来日した以後、即ち、1861年より1868年までの７年間にわたり、わずかに監督教会のコノーヴァー姉が1863年に教育宣教師として来日（神奈川）したが、その土地の不安定な状況のため、日本ミッションで活動せず、以前の任地上海に帰らざるを得なかったこと。又、同年同時期に長老教会にタムソン師が来日したこと。この二例を除き各教派とも幾多の事情があったであろうが宣教師の来日は無かった。

1854年に和親条約が締結され、開港されて欧米の人々の来日が始まり、ついで

1858年に日米修好通商条約締結、次年に批准されたとはいえ、福音伝道は居留地内に限り許され、外国人は居留地以外に居住することさえ許されなかった。宣教師も例外ではなかった。この時期に来日した宣教師を教派別、年度別に列記すると以下の通りである。

アメリカ監督教会　1859　J.リギンス師（長崎）（Rev. J. Liggins）
　　C. M. ウイリアムズ師（長崎）（Rev. C. M. Williams）
　　1860　E. シュミット博士　（E. Schmidt, M. D.）
　　1863　J. R. コノーヴァー姉（神奈川）（J. R. Conover）
アメリカ長老教会　1859　J. C. ヘボン博士（医学博士、法学博士）と夫人（神奈川）（J. C. Hepburn, M. D., LL. D., and wife）（＊当時はM. A., M. D.）
　　1863　D. タムソン師と夫人（横浜）（Rev. D. Thompson and wife）
アメリカ改革教会　1859　S. R. ブラウン師と夫人（神奈川）（Rev. S. R. Brown and wife）
　　D. B. シモンズ博士と夫人（医学博士）（神奈川）（Rev. D. B. Simmons and wife）
　　G. F. フルベッキ師と夫人（長崎）（Rev. G. F. Verbeck and wife）（以上三人夫人と家族は十二月に、それぞれの配偶者のもとに到着）
　　C. アドリアンス姉（神奈川）（Miss C.Adriance）
　　1861　J. H. バラと夫人（神奈川）（Rev. J. H. Ballagh and wife）
アメリカ・バプテスト自由伝道教会
　　1860　J. ゴーブルと夫人（神奈川）（Rev. J. Goble and wife）

これら来日第一陣とも言うべき宣教師の一群は既婚者５組10名と単身者５名、計16名ほどの少数の者であった。しかし、これら来日者のなかにごく短期間のうちに帰国せざるを得なかった者が既婚者１組２名、単身者１名計３名ほどあった。

各人は所属教派を異にしているが、一つの共通点として来日以前に中国での経験をもった者が４名も居ることは注目すべきことである。宣教師を日本に派遣した米国の各派教会・団体の海外伝道局の深い配慮を推察できる。又医師が宣教医として既婚者２組４名を数える。

宣教師はそれぞれ母国においての教派・団体を異にているので、宣教方針・実践方法について特色があり、必ずしも同一歩調をとっていたとは考えられない。しかし、布教の新天地に遣わされた者としてある時はそれぞれ異なった部門において母教会の特色を生かしつつ責任を持ち、ある場合は同一問題に協同歩調を取ることによって将来に向かっての宣教活動の準備を進捗することを計っている。日本に於ては教派制度を取らないということも試みられた。

これら第一期に来日した宣教師について各自の略歴を記すことにすることによって個々人の活動を紹介することとする。なお、判明している範囲で生没年と日本在留期間を挿入することにした。

Ⅰ　アメリカ監督教会

リギンス　(1829-1912　1859-1860)　英国出身、1841年米国に移住。神学校卒業後同窓のウイリアムスと共に中国への宣教師として任命され、1856年に上海に赴任。まもなくマラリヤに冒され、病気療養のため1859年５月長崎に渡来。修好通商条約発効後、日本宣教師に任じられた。滞日中、将来の伝道開始に備えて在華宣教師が出版した聖書をはじめ漢文教書や歴史、地理、科学関係書などを1000部以上頒布した。60年２月マラリヤ再発のため帰国。

ウイリアムズ　(1827-1910　1859-1908)　郷里の神学校を1855年卒業。翌年、清国に遣わされ三年間働いた後、1859年日本に移った。1865年「シナ及び江戸監督(伝道主教)」となり中国に戻り、1869年、主教座を武昌から大阪に移し、日本布教に主力を注いだ。シュミット（生没年不詳1860-1861）米国聖公会伝道局の日本伝道の方針により、宣教医として来日。長崎に於て医療事業を開始したが、最初は住民の外国人に対する恐怖心があったが半月後には病者に対する親切と優れた医療技術のため患者が激増した。しかし､過労で健康を損ない1861年11月帰国。

コノーヴァー　(生年不詳-1889　1863-1863)　1853年来上海で伝道していたが日本伝道の命を受け来日した。しかし、攘夷熱がその頂点に達していた時代で、国内騒然としており、神奈川奉行より至急田舎に避難せよとの布告が出され、本人もやむなく日本伝道を諦め、同月上海に渡り、同地で伝道に従事した。

Ⅱ　アメリカ長老教会

ヘボン　(1815-1911　1895-1892）及び夫人　プリンストン大学、ペンシルヴェニア大学医学部卒。1941年宣教医として中国に派遣された。この時、S. Rブラウ

ンと出会っている。妻の病気のため1845年に帰国、ニューヨークで開業。1859年10月来日。神奈川において医学、聖書翻訳に和英辞書の製作に努め、開教後は布教活動に基督教教育に尽力、指路教会、明治学院の創設に関わった。1892年帰国。

タムソン （1835-1915　1863-1915）及び夫人　和漢の学を学び、ヘボンと共にマタイ福音書の和訳に従事。運上所教師、大学南校、和歌山藩政治・法律顧問、欧米視察団引率等に従事。1873年に東京基督公会設立、仮牧師就任。新約聖書翻訳とともに創世記の訳業に当り東京翻訳委員会の中心となった。東京で逝去。

Ⅲ　アメリカ改革教会

ブラウン （1810-1880　1859-1879）及び夫人　イェール大学、ユニオン神学校を卒業。1839年、中国のモリソン記念学校長となり、マカオ、香港等で８年間におよび中国青年の指導を行った。1847年、妻の病気のため帰国。1859年来日。ヘボンと協力し、日本語研究、伝道、聖書翻訳に従事。新潟英学校教師の後、自宅に学塾を開設、ブラウン塾である。

シモンズ （1834-1889　1859-1860）Mr. D. B. M. D. 及び夫人　1859年秋ブラウンと共に宣教医として神奈川に来着。しかし、翌年ミッションから離脱して帰国。原因は妻の派手な生活にあったとされている。再来日後横浜で居留民の医師として開業。1871年より1880年まで横浜病院（十全病院の前身）の委任医師。回虫駆除剤セメンエンの創始者である。

フルベッキ （1830-1898　1859-1898）及び夫人　オランダで生まれる。工業学校卒業後米国に渡り技師として架橋工事に従事。病回復後神学校に学ぶ。ブラウンと共に来日。長崎の済美館の英語教師、同校校長。佐賀藩の致遠館等を経て、開成学校の設立を助け大学南校教頭を辞任後太政官顧問となった。お雇い外国人の生活を終えて本来の宣教師としての任務につき、伝道、旧約聖書の翻訳又明治学院理事、後に理事長に就任すると共に同学院神学部教授となった。

アドリアンス （ 不詳-1863　1859-1859） 来日の最初の婦人宣教師。日本の女性に伝道を始めようという希望を抱いて、自費で来日。かなり働いたが日本の女性は反応を示さず、失望し中国のアモイで改革派ミッションに参加した。

Ⅳ　アメリカ・バプテスト自由教会

ゴーブル　(1827-1896　1860-1883) 及び夫人　かねてより東洋伝道を志していたゴーブルは1851年のM. C. ペリーの日本遠征に、ミシシッピー号乗員として参加。帰国後、神学教育を受け1860年に宣教師として来日。英語塾開設とともに社会の一般業務にも参加したが、1863年より聖書翻訳に専心、1871年秋『摩太福音書』刊行。日本バプテスト伝道の方向を定めるのに功績があった。

第二期の期間に来日した宣教師については人数的にも個々人の活動を記述することが困難なため別表により氏名、滞日期間及び生没年を記することとする。

⑵　宣教師のはたらき

宣教師来日第一期における各宣教師個々の働きについては簡略に記述したところであるが、直接に宣教活動を許されなかった期間に宣教師に許された活動は何であったか。どのように活動を進めたか。米国の教派のなかには、宣教師派遣の時期が尚早ではなかったかとの危惧を持つ場合があった。この疑問に対してすでに帰国していたリギンスは次のように答えている。

「リギンス氏の書簡」といわれているものである。その内容は、宣教師の働きを阻害している事情にとらわれるのでなく、現在何をすることが出来るかという現状を積極的な面から説明している。原文の一部を転記することにする。

リギンス氏の書簡

ある人々は、日本が期待されたほどには宣教の働きに対して解放されていないために、その働きが何ら始められていないのかのごとくに吹聴している。であるから、宣教師達が現在かの国で何をすることが出来るかを述べることが必要であると思われる。

一、宣教師たちは、日本語を習得するために、日本語の書籍と日本人の教師を得ることが出来る。勿論、日本語の習得は最初の数年間にわたり、宣教師がしなければならない基本的なことである。

二、宣教師たちは、後続の宣教師その他の者が、自分たちよりもはるかに少ない労力と時間で日本語を習得できるようにするために、可能な限りの語学上の著作を準備することができる。そうすれば後続の者たちが、わずかな年月で、日本語聖書の完全なものをあらわすことができるようになる。

三、宣教師たちは、英語を学ぼうとする日本人に適当な英語の書物を提

供することができる。そうすることによって両国民の間の社会的かつ友好的関係は大いに促進するのである。

四、宣教師たちは、中国でプロテスタントの宣教師が用意した歴史、地理、科学のおびただしい著作を売るために、準備することができる。

キリスト教国の信頼できる歴史書は、聖書の宗教に対する偏見を取り除き、かつその宗教を推奨することとなる。一方では、正しい科学に関する著作は、星占いや土砂占い、また科学的な事柄に関する全般的な誤った教えが、その宗教的確信と結びついているその国では、非常に有益である。

五、宣教師たちは、漢語の聖書、宗教書、小冊子を頒布して、『直接』伝道事業に従事することができる。漢語の書籍は、教養ある日本人には理解できるものであり、またそれらの販売は条約の項目に規定されているので、日本人の精神に宗教上の真理を直ちに伝えるのに有効な手段であると我々は考える。

六、宣教師たちは、そのキリスト者としての働きや会話により、また、貧しい人々や悩んでいる人に善意を示すことにより、かつ、すべての人々に親切と礼儀をもって接することによって、宣教師に対する偏見をとり除くことができると同時に、真のキリスト教は、かつて陰謀を企てたイエズス会や、今日の無節操な貿易商人や俗っぽい船員たちが印象づけてしまったものとは非常に違ったものであるということを、観察力のある日本人に確信させることができる。キリスト教の『生きた手紙』は、日本では、書かれた手紙以上に必要なのである。日本が『宣教の働きには解放されていない』という誤った観念によって、その働きが差し控えられるとすれば、実に悲しむべきことである。』

（以下略）

リギンスの書簡に記載されている各種の事項にあるように年月の経過とともに日本人の偏見や恐怖が次第に和らいでいった。そのため宣教師の働きの範囲はかなり広がっていった。宣教師が日本人の信頼と尊敬を得、日本人の心が全般に解放されるに至ったのは宣教師が忍耐をもって労した結果ということである。

第一期に於ける宣教師の働きを種類別に記載すると次のようになる。

Ⅰ　日本語学習

来日した宣教師にとって最初の仕事は日本語の学習であった。ブラウン、シモ

ンズ及びフルベッキは同船で来日しているが、日本への航海中に早くも日本語の学習を始めたといわれている。初期の宣教師たちによって日本語学習の図書が発行されている。主たるものは次のとおりである。

『英和千字文』　リギンス編　1860年上海で印刷、刊行され、日本最初の英和会話書で日本語を学ぶ外国人の間に好評を得た。再版はニューヨークで1867年に、三版は東京で1870年に刊行されている。1873年に大阪で刊行されたときに、『英和対訳通弁書』の題名が用いられた。

『日英会話篇』　ブラウン著　1863年上海で印刷、上海美華書館で刊行。

『マスタリー・システム』　ブラウン著　ブラウン著のこの二書は外国ならびに日本人の初学者に広く用いられた。

『和英語林集成』　ヘボン編　1866年に上海で印刷された。日本最初の和英辞書である。ヘボンは聖書和訳、宣教活動のため日本語の辞書編纂を企画した。『節用集』（室町中期に刊行された。国語より漢字を求めるに便じた通俗辞書）なども参考にしたが、専ら彼の接した各階層の日本人のことばを採取したものである。

Ⅱ　書籍の輸入、頒布

中国は1807年に宣教師モリソン（Morrison, Robert E. 1782-1834）によってプロテスタント教会の宣教が開始された。日本より約50年ほど早かったのである。この50年間に入華宣教師によって中国語の基督教書籍が翻訳書、著書として刊行されている。これらの書籍が来日宣教師のうち主としてかつての中国在留宣教師によって日本に紹介され、頒布された。当時の素養ある青年たちにとって基督教を知るためのよき絆であった。

Ⅲ　聖書の日本語訳

聖書を自国の言葉で読むということは、何時の時代でも必要欠くべからざることであった。第一期の来日宣教師はそのほとんどが聖書の和訳に関係したことは当然のことと言えよう。日本語訳聖書は早くはK. F. A. ギュツラフ（Gutzlaff 1803-1851）訳『約翰福音之伝』及び『約翰上中下書』が共に1837年シンガポールにて刊行された。同時期にS. W. ウィリアムズ（Williams 1812-1884 入華宣教師）訳による『約翰之福音伝』『馬太福音伝』（1837年前後刊行）、B. J. ベッテルハイム（Bettelheim 1811-1870）訳『四福音書』『使徒行伝』および　『ロマ書』が出版年代により、「安政二年（1855）版琉球語訳」、「安政五年（1858）版琉球語訳」、「ウィーン版」がある。1859年日本への最初の来日アメリカ・オランダ改革派宣教師S. R. ブラウンはウイリアムズからその訳稿本を委託されて持参している。

しかし、聖書が日本国内で翻訳されたのはJ. ゴーブルの『摩太福音書』であり、禁教下のため出版が困難であったが、東京で版木を彫り出版した。明治四年であった。

J. C. ヘボンとS. R. ブラウンはそれぞれ1859年に来日したが、はやくも1861年春より共同で聖書の翻訳を開始した。『マルコ福音書』をはじめ1867年頃には新約聖書のほとんど、旧約聖書の一部に及んでいる。ブラウンの邸宅の火災により翻訳原稿のうちマタイとマルコの両福音書を除き全部消失している。しかし、ヘボンを中心として翻訳事業は継続された。

これらの個人訳の時代を経て1872年に開催された横浜宣教師会議において聖書の共同訳委員会が組織され、訳業が進み、1880年に新約聖書、1888年に旧約聖書が完訳されている。この委員会による翻訳事業の業績は第二期の活動に譲ることにする。

Ⅳ　教育

禁教下において宣教師は日々の活動として教育に力を注いでいる。その方法は幾つかの方法がとられていた。日本の男子青年への対応を見ると次の全く異なった二つの方法がある。

ここに具体的な事例として同一種目に該当する者のなかから特定個人を引用して説明することとする。

1．官学部門への参加

フルベッキに例を取ると、彼は御雇外国人として長崎において済美館、致遠館の教師として日本人の教育に参加した。その後、政府の招請により、文部省雇いとして開成学校で語学及び学術の教師となり、大学南校の後身、第一大学区第一番中学の教頭となっている。

2．一般私学への参加

カラゾルス（Carrothers, Rev. C.）は1869年に来日し、家塾（後 の築地大学校）により宣教活動を開始した。1872年より慶応義塾の英語並びに文学教師に なった。同時に学制改革により学科を米国のカレッジ風に改めた。1876年教会問題でミッションから離脱している。同年文部省の御雇教師となり、広島英語学校、大阪英語学校その他の学校に1896年まで勤務した。

3．私学の設立

複数の宣教師自身は来日当初において数人の青年を教育するために小さな私塾を開始している。ヘボンのヘボン塾、ブラウンのブラウン塾などの設立である。これらの塾は日本の青年達にとって全く新しい文化に接し知識を得る機会

であった。それと同時に信仰と近代精神を合わせ持った宣教師との直接的な接触の時を持ち得た。そのことによって封建社会、前近代的日本から脱却することを得たのである。

4．女子教育

日本は女子教育において極端に立ち遅れていたと言える。教育は、日本の男性から言えば女性の素質向上のためには教育はこれを阻害するものとさえ考えられ、宣教師の目から見ると婦人の地位向上・婦人解放の大きな障害であったと言える。婦人宣教師のなかには、日本の女子教育について、自己が受けた教育と同等のものを日本の女性に与えたいとの願いを表明している者がある。婦人宣教師は来日して日本の女性に接した時に日本人女性の道徳観、女性観、教育観などを他人のこととしてないがしろに出来ない問題でり、広い意味での女子教員の必要性を痛感している。宣教師来日第一期においてヘボン夫人は1863年に開始された英語塾（ヘボン塾）において青年を教育したが、その塾生のなかに既に女性が在籍していたと伝えられている。

V　医療奉仕

医療宣教師（宣教医）として来日し、禁教下においてこの方面で活躍した著名な人々は、J. C. ヘボン、J. C. ベリー、D. B. シモンズ、E. シュミット等である。神奈川、横浜を中心として活躍したヘボンは、医師として極めてよく知られていた。D. C. シモンズは来日後間もなく令夫人と意見が合わず宣教師を辞任したが、横浜の十全病院の医師として知られ、また「セメンエン」という薬をつくった人として当時有名であった。J. C. ベリーは組合関係の人であり、主として関西地方におり、E. シュミットも同様である。これらの宣教医らは、医療奉仕をしながら、伝道その他に尽力した。この宣教医らは、先進国から近代西洋医学を日本に持ち込み、下層民にまで医療奉仕をしたのである。

注

氏　名	所　属　教　派	滞日期間	生　没　年
J. C. ヘボン	アメリカ長老教会	1859-1892	1815-1911
J. C. ベリー	アメリカン・ボード	1872-1893	1847-1936
D. B. シモンズ	アメリカ・オランダ改革派教会	1859-1889	1834-1889
E. シュミット	アメリカ聖公会	1859-1861	生没年不詳

旧新約聖書全巻の翻訳完成までには宣教師の来日以来約30年近くを経過しているが、当初禁教下において完訳への作業が殆どの来日宣教師の協力によって続けられていたことに注意したい。翻訳委員社中は翻訳完了次第、分冊出版している。その状況は次のとおりである。

『路加伝』ヘボン訳	1876年	米国聖書会社	
『希伯来書』ヘボン訳	1876年	米国聖書会社	北英国聖書会社
『馬太伝』ヘボン訳	1877年	米国聖書会社	北英国聖書会社
『馬可伝』ヘボン訳	1877年	米国聖書会社	北英国聖書会社
『約翰伝』ヘボン訳	1877年	米国聖書会社	
（改正）	1878年	米国聖書会社	北英国聖書会社
『使徒行伝』ブラウン訳	1877年	米国聖書会社	北英国聖書会社
『羅馬書』ヘボン訳	1877年	米国聖書会社	北英国聖書会社
『約翰書』グリーン訳	1877年	米国聖書会社	
『加拉太書』グリーン訳	1877年	米国聖書会社	
『哥林多前書』ヘボン訳	1878年	米国聖書会社	北英国聖書会社
『哥林多後書』ヘボン訳	1878年	米国聖書会社	
『以弗所腓立比書』			
ヘボン・ブラウン訳	1879年	米国聖書会社	北英国聖書会社
『帖徹羅尼迦前後書』ヘボン訳	1879年	米国聖書会社	
『哥羅西書』グリーン訳	1880年	米国聖書会社	
『提摩太前後書提多腓利門書』			
ヘボン・ブラウン訳	1880年	米国聖書会社	
『雅各彼得前後書猶太書』ヘボン訳	1880年	米国聖書会社	
『約翰黙示書』ブラウン訳	1880年	米国聖書会社	大英国聖書会社

＊明治訳の日本語聖書は、米国聖書会社・北英国聖書会社・大英国聖書会社の三社より発行されている。つまり、聖書本文の同じものが中扉の発行会社のみ変えて発行されており、上記の聖書会社は瀬川和雄氏が参照した聖書会社のものである。

明治学院教師及び関連校教師

■明治学院
□関連学校

第１部　北米長老教会（PM）宣教師の部

■Alexander, Miss Caroline Tuck　?－1927.7.16

アレクサンダー　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1880.7－1924.2

1880　来日以来1885年まで横浜に居住。ある時期より住吉町小学校に勤務
頌栄女学校の教務に関わることになり品川に転居

1892　明治学院教授マクネア（MacNair, Theodore Monroe）と結婚
音楽に優れ『讃美歌』（1903）、『讃美歌第二編』に合わせて８曲の讃美歌を作曲し、現行の『讃美歌』（1954）にも〈わがこころは〉（95番）の曲が採用されている。ブライアン夫人とともに“Fruit and Flower Mission”と称して有志共立東京病院の訪問を行った。

1924　引退後帰米し、ワシントンDCで余生を過ごす。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師：来日の背景とその影響』東京大学出版会　1902

■Alexander, Rev. Thomas Theron　1850.10.8－1902.11.14

アレクサンダー　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1877.10－1902

ユニオン神学校卒業

1877. 10　長老教会外国伝道局より派遣され来日。同時に来日した宣教師にノックス，G. W. 及びウイン，T. C. がある。1882年３月まで東京で伝道及び日本語学習

1880. 4　築地大学校の開校にあたり、教授となったが、長老教会在日ミッション総出の男子学校であった。

1882. 3　西日本布教の使命を帯びて大阪居留地14番に移る。西日本ミッションを担当。
1882年から1893年７月まで、1887年から1889年までの帰米２年間

を除き、活動の足跡は大阪にとどまらず、広く中国、四国、九州に及び、日本基督北・南の両教会設立に力を注ぎ、浪花、鎮西両中会の発展に尽した。

日本基督教会憲法改正（1890年）後は教籍を日本基督教会に移し、浪花中会の所属教師となり大会議員、伝道局理事等の職に付いている。

1893.　7　明治学院神学部教授に就任し、井深梶之助総理の下で書記の責を持つとともに、系統神学、聖書神学、旧約歴史、希伯来語等を担当。一方夏季休暇中には大阪に赴き無牧の教会を助けることもしばしばであった。

1902.　11.　14　離日　病のためハワイに転地し療養に努めたが、回復せず同地で召天、享年52歳。

1903.　3　大阪では東西南北の四教会合同、東京では３月31日に女子学院において追悼会が催された。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
山本秀煌編『日本基督教会史』日本基督教会事務所　1929
『紀要　第32号』 明治学院大学キリスト教研究所 2000
井上良吉著『日本基督大阪北教会五十年史』日本基督大阪北教会　1935

■Ballagh, Mr. John Craig & Mrs.　1842－1920.11.16

J. C. バラ　アメリカ長老教会宣教師　在日期間　1872－1920

1842　ニューゼルセイ州テナワリリ出身　J. H. バラの弟
ニュージャージー州に於て十五年間中学教師を勤務、担当は数学、星学、簿記学であった。1872年兄、J. H. バラに招かれ来日。

1872　兄に代わり高島学校藍謝堂で英学を教える。翌年学校火災のため廃校となりヘボン塾に移る。

1873　アメリカ長老教会ミッションに所属。

1875　リディアと再婚。ヘボン塾はバラ学校となる。

1880　ヘボン塾は築地に移り、築地大学校と呼称され、J. C. バラは校長となった。

1883　築地大学校と先志学校と合併し、東京一致英和学校となり数学を担当。英和予備校でも教鞭を取る。

1884　妻、リディア逝去

1886　北米長老派、リフォームド派及びスコットランド一致長老派の宣教師団と日本人とで理事員会を組織し、関係学校を統合して明治学院を設立した。J. C. バラは長老教会側の理事会員の一人として参加し，普通部教授として数学、天文学、簿記を担当した。

1907.　3　明治学院４教授勤続25年祝賀記念会に於いて、長年にわたる功労を表彰された。

1917.　11　明治学院創立40年記念式において、37年の勤続を表彰された。教育に生涯を用いた。

1920.　11　前年暮れよりの赤血球減退症を患い療養したが、1920年11月15日に鎌倉にて逝去、瑞聖寺墓地（＊白金）に埋葬。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
山本秀煌編『日本基督教会史』日本基督教会事務所　1929
明治学院編『明治学院百年史』明治学院　1977

■Ballagh, Miss Annie P.

バラ　アニー　P.　J. C. バラの妹　在日期間　1884－1907
アメリカ・オランダ改革教会宣教師

1871　ニューヨーク州女子師範学校卒業
上記学校卒業後10年間ニューヨーク州、ニュー・ジャージー州で女学校教師を経験

1884　来日

1885　英和予備校に教員として就任。同校が神田淡路町から麹町区富士見町へ移転の際、役所に提出した「転校願」に教員増加5名とあり、その一人はA.P.バラであった。

1886　９月28日開催の明治学院理事会で神学部、普通学部の教授、職員の選挙が行なわれ、普通学部の助教授に選出された。

1886　12月『基督教新聞』の掲載記事「基督教主義の小学校設置広告」に教員としてA. P. バラの名がある。しかし、この学校がどのような学校であるか判明しない。

資料　鷲山弟三郎著『明治学院五十年史』明治学院　1927
明治学院編『明治学院百年史』明治学院　1977

■Bryan, Rev. Arthur Vernon　1856.5.11－1931.9.28

ブライアン　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1882.12－1916.9

1856　ニューヨーク州ライで生まれる。
ニュージャージー州プレアスタウンのフィリップ・アンドーヴァー・アカデミーに学ぶ。
プリンストン大学及びウェスタン神学校卒業。
1882　来日、東京滞在
1884　明治学院神学部講師として英文学を担当
1888年度－1906年度 広島、松山で奉仕活動を続けた。この間、1891年に妻Mary M. 逝去。
1892年にMargaret P. と再婚
1907－1914年度まで中国東北部で定住伝道に従事。終了後、再来日休暇。
1916. 9　妻の健康が優れないためミッションの仕事を辞し帰国。
サウスダコタで伝道に従事。
1931　ペンシルヴェニア州モンロートンで逝去。
（フルベッキによると1882年にBryan E. D. 夫妻来日とあるが、駐日記録はない）

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
熊野雄七著『明治学院沿革略』明治学院　1917
『CYB』各年度版

■BovenKerk, Rev. Henry G.　1904.10.20－

ボーベンカーク　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1930－1940

1904　イリノイ州に生れ、幼児洗礼を受ける
ミシガン州ホーランドのホープ・カレッヂ、同地のWestern Theol Seminary、ニューヨーク州 Ithaca のコーネル大学を卒業
1930　按手礼を受け、同年9月15日来日、明治学院に勤務
1931　2 Meiji GaKuin, Shirokane, Shiba, Tokyo.
1932　Tokyo
1933　カンバーランド長老キリスト教会系統の宣教師により三重県下の伝道が各地で行われる中、ボーベンカークは阿漕教会（1927年伝

	道開始）を中心に伝道を応援した。この間、1935年に休暇で一時帰国
1933	1236 Besai Cho, Tsu, Ise.
1934	do.
1935	922 Spring ST, Muskegon, Mich.
1936	Tsu Shi, Mie Ken.
1941	大阪女学校、日米国交悪化にともない最後の交換船で帰国の途中、開戦にともない船は引き返し横浜で抑留された。

資料　明治学院編『明治学院九十年史』明治学院　1967
日本基督教会同盟年間委員編纂『基督教年鑑 昭和十四年版』 日本基督教会同盟　1939

□Ayres, Rev. James Barbour & Mrs.　1859.5.25－1940.6.12

エアレス（エーレスともいう）アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1888－1929
（14～17妻病気のため帰国）

1859	米国ヴァージニア州に生まれる。
1888	ノックスカレッジ卒業。受按。妻と共に来日。当初広島に駐在。
1890	日本基督教会山陽中会の設立と関連し、11月に山口に移転、服部章藏の山口英和女学校設立を助ける。
1891～14	同校開校後は妻と共に教鞭をとり、同校の充実に協力し、光城女学院と改称した同校を財政を配慮し、1896年にアメリカ長老教会婦人外国伝道局の運営とした。一方校舎、寄宿舎などの設計、工事監督に尽力している。 大工道具を持って働く姿に“西洋人の学校だから西洋人の大工が来ている”と言いはやされたと言われていた。 他方、日本基督教会内にあっては、山陽中会に於ける長老教会の代表者として部内教会、伝道所のため活躍。
1914	光城女学院と梅香崎女学校が合同し、下関に下関梅光女学院が開校された機会に妻の病気療養のため一時帰国。
1917	５月に再来日、日本基督教会浪花中会における長老教会の代表者として活躍
1929	定年により引退、帰国。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
黒木五郎編『梅光女学院史』 梅光女学院　1934

□Ballagh, Mrs. Lydia　生年不詳－1884

バラ　リディア　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1842－1884

1875	1870年代初めに婦人一致海外伝道局から日本に派遣され、1875年にJ. C. バラと再婚。アメリカ長老教会に移籍。
1883	病気療養のため夫妻で一時帰国。
1884	１月７日から12日までの祈祷週間に出席、最終日に日本に看護婦養成のための学校と病院を設立する件につき賛同を呼び掛けた。賛否両論が長期にわたり交わされている。この構想は一緒に来日し、横浜ミッション・ホーム時代から同僚ツルー（True, Maria T.）によって引き継がれている。

□Ballagh, Mrs. Rebecca Falls　1885－1917.8.28

バラ　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　－1917.8.29

□Bigelow, Miss Florence J.　1867.3.18－不詳

ビゲロー　フローレンス　J.　　アメリカ長老教会（教育）宣教師

1867.　3	ニューヨーク州ヴェテビヤに生まれる
1882.　5	ヴェテビヤ・ハイスクール入学。1886年６月同校卒業
1886.　7	ゲネセラ師範学校入学。89. 6同校卒業
1889.　9	スタンフォード・ハイスクール及びプレンフィールド・ハイスクール勤務、1896年6月両校退職
1896.　9	ニューヨーク盲学校勤務、1897年６月退職
1897.　10	宣教師として来日、山口の光城女学校勤務
1914.　3	文部省より無試験検定で英語科免許状を受ける
1914.　4	梅香崎、光城両校の合併に際し、姉、光城女学院長 Miss G. S. ビゲローを助け、梅光女学院設立に協力、同女学院教諭として三ヶ年勤務
1917.　6	女学院を退職、Rev. T. C. Winnと結婚し、1923年まで夫君の満州伝道に同行。
1923.	夫君隠退　夫妻帰米

1929.　9　　夫妻で再来日。夫と共に梅光女学院構内の宣教師館に住み、フローレンスは同女学院に勤務

1930.　9　　北陸学院に勤務

1931.　2　　夫 T. C. Winn 召天

帰国後、姉とパサディナで老後を送る。帰国時期、没年不詳

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
黒木五郎編『梅光女学院史』梅光女学院　1934

□Bigelow, Miss Gertrude Sala　1860.5.1－1941.11.

ビゲロー　ガーツリュード・サラ　　アメリカ長老教会（教育）宣教師

在日期間　1886－1930

1860　　ニューヨーク州ヴエテビヤに生まれる。

1878　　1878年ヴエテヴイヤ中学を、1883年にハモト町女学院を終え、1886年ニューヨーク州に於いて試験の上、中等学校教師の免許状を得る。

1886.　11　　来日　東京の新栄女学校教諭となる。一年後1887年11月に同校の校長に就任

1890.　11　　金沢の北陸女学校に教諭として赴任

1892.　11　　山口県私立光城女学院教諭の任につき、1899年４月創立者・初代学院長服部章蔵の後を継ぎ第二代学院長に就任。

1914～30　同女学院が梅香崎女学校と合同して下関梅光女学院が設立した後は、広津藤吉院長を助け、1930年10月に帰米するまで同学院で聖書と英語を担当。

1886年に来日し、1930年に帰国するまで44年間、各校を通し約二千人の中学生を教育し、一千余名の卒業生を社会に送り出している。その間ほぼ10年に一回帰国し、米国各地に遊説し日米親善の気風喚起に貢献。

1920.　10　　山口県知事より教育勅語渙發三十周年記念として、教育功労賞を受ける。以後数回にわたり各種の賞を受ける。

1930.　10　　帰国

1941.　11　　カリフォルニア州パサディナで逝去。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
黒木五郎編『梅光女学院史』梅光女学院　1934

□Carrothers Rev. Christopher　1839－1921

カラゾルス（カロゾルス）　アメリカ長老教会宣教師　在日期間　1869.7－1896

オハイオ州の農家の出身。15歳で地元の小学校の教師の資格を取得。

ペンシルヴァニア州ワシントン大学に入学。一学年上の後に宣教師として日本に駐在したエドワード・コーンズ（E. Cornes）が在籍していた。カラゾルスが日本伝道を志したのは彼の影響であるといわれている。

カナダのキングストンのクィーンズ大学に移り、一年学んだ後、シカゴ大学の最高学年に転入、1867年に卒業。その後シカゴのマコーミック長老派神学校に入学、1869年に卒業。

1869年５月に長老教会牧師R. V. ドッジ牧師の娘ジュリアと結婚。

弟子原胤昭はC. カラゾルスを「極めて野卑な且つ無骨な人物、面貌、猿に似てモンキイのあざなを博していた」と評している。

1869.　7　　来日　９月東京・築地居留地に英語私塾を開設。後日発展して築地大学校（明治学院の前身校とは別組織）となる。しかし、三年の後に廃校となった。

1872.　6　　英語ならびに文学の教師として慶応義塾に出向。32歳であった。学科の仕組みを米国の「カレッジ」風に改めた。従来義塾の教授法は、原書を訳読し其意味をとることを専らとしたが、英語によって学科を授くるの端を開き、且つ、世界的な大学を期し教科中にラテン、クリーキーの語学を入れ、教師連中にそれを教えたとの逸話が残されている。

1874.　10　　東京第一長老教会の設立にあたり、仮牧師に就任。カラゾルスがミッションとの関係を断ったので教会も二つに別れ、長老教会の露月町（芝）教会とミッションから離れた日本独立長老教会銀座となった。この退会の理由として、ヤソ、イエスの論争が動機であったと言われている。当時、日本人基督者、宣教師の間に耶蘇をヤソと唱えるか、イエスと云うべきかについて議論があり、カラゾルスは多くの宣教師に反しヤソ説を堅く主張し、これが取り入れられなかったためと言われている。

1874.　12　　日本人主催のクリスマスが初めて銀座の原胤昭経営の女学校で行われ、カラゾルスが指導に当る。

1876-96　　文部省の御雇教師として、広島英語学校（1876-1877年）、大阪英語学校（1877-1878年）に勤務。一時帰国の後、1879年に再来日し、

静岡県中学校、秋田県師範学校を経て仙台の第二高等学校勤務したが、1896年の紀元節の式典で「陛下の御尊影に対し」敬礼をしなかったことにより解雇されている。

1896-　帰国。ワシントン州ポートスタンレーに購入してあった農場で孤独の生活を送ったと言われている。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
『明治学院各年史』
植村正久著　『植村正久と其の時代』教文館　1966
小檜山ルイ著　『アメリカ婦人宣教師：来日の背景とその影響』東京大学出版　1992

□Carrothers, Mrs. Julia

カラゾルス（Carrothers C.）の妻　宣教師、教育家　在日期間　1869.7－1877

1870.　5　築地居留地が開設されたのは1870年６月であるが、その直前にA六番女学校と称する塾を設立。1869年に夫が開設した私塾に男装して通学する女性の姿を見て女性の塾を開設したのである。

1871.　3　ジュリアは、前年８月に蒸気船の爆破事故で死亡したコーンズ宣教師夫妻の遺児をアメリカの遺族に引き渡すために帰国。

1873　隣接地はB六番女学校が開設されたので、生徒の一部はB六番女学校に移ったが、本人は大半の生徒を伴い、原胤昭が1875年に開設した原女学校に転じた。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988

■Chapin, Miss Louise

チェピン　アメリカ長老教会宣教師　在日期間　1919－

1920.　5　北陸女学校に勤務、1924年３月辞任。この間1922年頃一時的に明治学院に一年間の在籍記録がある。辞任後休暇を取り帰国した。その時期は不明であるが、帰国後カリフォルニア州アクランドに居住。

資料　北陸学院100年史編集委員会編『北陸学院百年史』北陸学院　1990
『CYB』各年度版

■Chapman, Rev. Earmest & Mrs.　1888.11.18－1972.5.1

チャップマン　　アメリカ長老教会宣教師

在日期間　1917.10－1941.7, 1947.12－1960.6

1888	カリフォルニア州オークランドに生まれる。 カリフォルニア大学、サンフランシスコ神学校卒業
1917	10月に来日。明治学院に奉職
1919	協力宣教師として和歌山県に派遣され、新宮教会河村斎美牧師と協力。
1920	３月より新宮に定住、以後20数年にわたり新宮を中心に串本から熊野に至る紀南地区、熊野川上流の十津川までの地区を伝道した。
1921?	アーベリー, K（Arbury, Katherrine）と結婚。
1941. 7	日米関係の悪化に伴い帰国。 戦時中は米国にあって日本人収容所の牧師として尽力。
1947. 12	再来日、日本基督教団津教会小島嘉兵衛牧師の協力のもとに三重県下を広く伝道を行う。
1952	再び河村牧師と協力。阿槽教会の再建、幼稚園を開設。夫婦で地域の伝道と教育に奉仕。戦後再来日後、病人のためのスプレプトマイシンなどを取り寄せて奉仕した。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988

■Clark, Rev. Edward M.

クラーク　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1920－

1920	来日。山口及び大阪で約７年間奉仕の後、1927年度に神戸を本拠地とし、1940年まで定住した
1928. 1－1929. 12	明治学院理事
1930	北長老教会議長を務めた
1941	帰国

■Fulton Rev. George W. D. D.　生年不詳－1947.2.28

フルトン　アメリカ長老教会宣教師　在日期間　1889－1927

1889　来日　福井で伝道
1898　休暇で帰国
1900　再来日し、金沢に移り金沢殿町教会を中心に市内の伝道に尽力
1903　北陸女学校の設立者のひとりとして責任を担う
1909　大阪に移り、マレーネ, D. A. の後を継ぎ大阪神学院長となる。
1922. 10　日本本基督教会創立五十年記念講演会に於て、「伝道機関としての日本基督教会」と題して講演を行なう
一時期、明治学院の理事であった
1902. 9－1905.12　夫人は、英和幼稚園の園長を務めた

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
山本秀煌編『日本基督教会史』日本基督教会事務所　1929
植村正久著『植村正久と其の時代　第２巻』教文館　1966

■Greene Rev. Oliver M.　生年不詳－1881

グリーン　アメリカ長老教会宣教師　在日期間　1873.12－1880.8

1873.　12来日。当初、横浜のヘボン塾で教鞭をとり、また横浜長老公会の建設に盡瘁した東京、築地に移りカラゾルス Cとともに働く。カラゾルス氏辞任後、東京第一長老教会、品川教会の仮牧師を兼任。千葉県下の農村地域に伝道につく
1874.　アメリカ長老教会ミッションはタムソン、ルーミス及びO. M. グリーンの三宣教師を委員に任命して、改革派と組合派のミッションと伝道事業において三者が合同することに関して協議遷都したが、明確な結論に至り得なかった
1880. 8　病気のため帰米、ヴェシラハティで逝去

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
毛利官治編『指路教会六十年史』指路基督教会　1934
明治学院編『明治学院百年史』明治学院　1977

■Hannaford, Rev. Howard Dunlop　1887.1－1973.6.27

ハナフォード　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1915－194? 1946－？

1887.　1　　米国オハイオ州に生まれる。
　　オーバン大学卒業　シリア・プロテスタント大学教授
1915　　来日。京都、三重地方で伝道。
1918.　1　　明治学院理事に就任。
1924　　オルトマンス、都留高等学部長と共に理事会より付託された、「各教派の神学校統合案」を検討し、「之レ以上協議進行余地ナキニ到リタリ」の報告書を提出。
1928　　オルトマンス, Aの紹介で好善社に入社。オルトマンス逝去に伴い理事就任。慰廃園の伝道に当たる。
1935　　明治学院教授に就任。
　　太平洋戦争で強制送還。日本人抑留所で奉仕。
1946　　戦後いち早く再来日、かつての宣教師館に矢野学院長が一階に、ハナフォード夫妻が二階と共同生活開始。妻と共に明治学院の教壇に立つ。且つ、好善社理事に就任。
　　日本基督教団讃美歌改訂委員（1928-1931、1951-1954）を務む。
　　オルガン奏者であった。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
　　明治学院編『明治学院年百年史』明治学院　1977

■Haworth, Rev. B. C.

ハワース（ハウォース、ハヲルス）　　アメリカ長老教会宣教師

在日期間　1887－1906

1887　　来日、最初に金沢に赴任、中間に二年間ほど大阪、神戸に移動しているが1895年頃まで金沢に在任し、金沢教会を応援している。
　　金沢教会が高木信吉教師を牧師として招聘した際には、就職委員の一人に選出されている。
1890　　マカルピン, R. E.（McAlpine）との協力により、現在の神戸再度筋教会を設立。
1896.　4　　再度の大阪在任にあたり、大阪福島教会を助ける。
1904　　東京に移転後は明治学院との繋がりを持ち、神学部において系統

神学及び讃美歌音楽を担当。

1905　明治学院が財団法人として認可されたときの理事の一人である。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
熊野雄七著『明治学院沿革略』明治学院　1917
鷲山弟三郎著『明治学院五十年史』明治学院　1927
明治学院編『明治学院九十年史』明治学院　1967

■Helm, Mr. N.T. & Mrs.

ヘルム　アメリカ長老教会宣教師　在日期間　1927－1939

1927　来日、1932年に休暇で一年帰国したが1939年頃帰国するまで終始明治学院に勤務。
（明治学院28-29 東京30-31 A32-33明治学院34東京35-36 明治学院37-38）

資料　明治学院編『明治学院九十年史』明治学院　1967

■Hepburn, James Curtis M. D. (*M. A., L. L. D.)　1815.3.13－1911.9.21

ヘボン　アメリカ長老教会宣教医

1815.　3.　13　米国ペンシルヴァニア州ミルトンに生まれる。
1831.　春　プリンストン大学三年に編入。
1832.　秋　プリンストン大学卒業、B. A. の学位を受く。
同年　ペンシルヴァニア大学医科に入学。
1834.　冬　ミルトンの長老教会に入会。
1835.　プリンストン大学よりM. A. の学位を受く。
1836.　ペンシルヴァニア大学医科を卒業。M. D. の学位を受く。
1838.　ペンシルヴァニア州ノリスタウンにて開業
1840.　10.　27　クララ・メリー・リートと結婚
1841.　宣教医として中国に派遣される。
1843.　アモイで医療伝道に従事。
1845　妻の病気のため帰国。
1846　ニューヨークで病院を開業。経営十三年間に及ぶ。

1858　　７月の日米通商条約締結に伴い、日本伝道の道が開かれ、10月にヘボンは神奈川に到着。
1861　　春、神奈川宗興寺に施療所を開設。７月に夫人帰米。
1862　　横浜居留地39番に転居
1863.　3　　夫人米国より帰る。英学塾を開く。
1864　　春、運上所の一室に横浜英学所を開設、一年後閉鎖。
1866　　『和英語林集成』の原稿完成。９月、上海、美華書院で印刷に着手。
1867　　５月、『和英語林集成』上海にて出版さる。『真理易知』も五千部印刷。
　　８月、バラ、タムソン、とともにヘボン施療所に集合、マタイ伝の翻訳を始め、９ヶ月で完成。
1874.　3　　ブラウン邸で開かれた翻訳委員会に参加し、その大部分の訳出に務める。
1882　　旧約聖書翻訳委員長としてフルベッキ, G. H、ファイソン, P. K.と共に全力を傾注し、その大部分を訳出。翌年に完成。
　　『和英語林集成』第３版の版権を丸善商社に譲って得た2000ドルを明治学院に寄附。此によりヘボン館が建設された。
1889　　明治学院総理となる。
1892　　指路教会々堂を建築。山本秀煌と共著で『聖書辞典』を出版
　　10月22日　妻と共に帰国。ニュージャージー州イーストオレンジに居住。
1906.　3.　4　妻、88歳で逝去。
1911.　9.　21　逝去。同日、明治学院のヘボン館が焼失。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988

■Imbrie, Rev. William　1845.1.1－1928.8.4

インブリー　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1875.9－1922

1845.　1　　ニュージャージー州ラウウエ町に生まれる。
1865.　　プリンストン大学卒業　約２年間土木技師として鉄道会社に勤務。
1870.　　プリンストン神学校卒業。ニュージャージー州の教会で牧会。
1875.　9　　駐日の宣教師が有志の青年信徒を集めて聖書の研究、講義等がなされていたが、専門的に伝道者養成の任に当たる宣教師の派遣の

必要に直面しインブリーを派遣する事とし、1875年９月にインブリー来日。

1876　東京一致神学校の創設にあたり専任教師（Permanent Instructor）に専任さる。同校の教授として新約釈義、キリスト伝を担当。

1877. 10　在日長老教会宣教師の間にみられた教派主義と無教派主義を巡る不一致の改称に努め、日本基督一致教会の成立をなしとぐ。

1886. 4　明治学院設立にあたり、教授・理事に就任。神学校の充実を目指す改革を推進。

1890. 5　本郷の一高（＊第一高等学校）運動場に於ける一高対明治学院の野球を観戦中、一高生の暴行を受けて負傷。国際問題になることを憂慮し、負傷は軽微であると自ら強調。

1890. 12　日本基督教会大会に於いて信仰告白制定につき議場が紛糾した際、使徒信条に簡単な前文を附したものが提出され成立した。この前文執筆者はインブリーである。

1899.　文部省訓令第12号問題については、最も強硬に訓令の趣旨に反対した宣教師のひとり、明治学院理事会をしていち早くキリスト教教育堅持を表明させた。
日露戦争の際、桂首相と対談しその内容を英文にし、日本の立場を諸外国に宣伝するのに協力。

1922 秋　難治の病を得、婦人も病のため身体不自由となり、医師の勧めにより帰国。

1928. 8　シカゴ市郊外エバンストンで逝去。享年84歳

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
井深梶之助とその時代刊行委員会編『井深梶之助とその時代　第一巻』明治学院　1969
W. M. Imbrie著『The Church of Christ in Japan』Westminster Press　1906.
（※日本語訳W. M. インブリー著『日本伝道事始め：日本キリスト教会史話』日本基督教会歴史編纂委員会　1982）

□Halsey, Miss Lila S.　1872－1964.12.22

ホルシー（ホルセー）　アメリカ長老教会婦人宣教師　在日期間　1904－1940

ノースフィールドの学校に勤務。留学中の三谷民子（後の女子学院長）が教えを受ける。

1904　　来日、女子学院に勤務。休暇帰国、
1914-　　再来日後学院長に就任(1914-1920年)。退任後も教教師として勤務。
1940.　6　　定年を迎え、退任帰国。
1964.　12　　フロリダ州ゲインズヴィルで逝去。
（『女子学院の歴史』606pに手紙あり）

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
大濱徹也著『女子学院の歴史』女子学院　1985

□Hesser, Miss Mary K.　1853.7.22－1894.9.1

ヘッサー（ヘッセル）　アメリカ長老教会宣教師　在日期間　1882.11－

1853.　7　　ペンシルヴェニア州エリー市のドイツ人家庭に生まれる。
1882　　オハイオ州オックスフォード市ウェスタン女子大学卒業。
1882.　11　　来日、任地大阪居留地に着任。
ウイン, T. C.（Winn）夫妻の勧めで金沢に女子教育のための学校開設を志す。
1884.　10　　里見鉞子を招聘し、その助けをかりて私塾を開始。
1885.　3　　私塾の運営と同時に女学校設立の準備が進み、1885年３月に（＊金沢中学校が）設立が認可された。里見が校長で、ヘッセルは英語教員となっているが、ヘッセルとウインが中心であり、J. B. ポーターも関与していた。
1890.　　健康を害し、二か月にわたり療養。
1891.　9　　校舎改築工事半ばであったが、療養のため帰国、冬季に向かい南カリフォルニアの暖かいところで過ごすためである。
1893.　5　　医師の再発懸念にかかわらず、金沢に来任。一年を待たず病状悪化で再度帰国。手術を受ける。
1894.　9　　帰国後再度日本行きを志すが、ついに回復せずバサディナで逝去。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
北陸学院100年史編集委員会編『北陸学院百年史』北陸学院　1990

■King, Mr. A. V.

キング　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1927－1928

1927　　来日、明治学院に赴任。
1928　　離日したものと思われる。

資料　Japan Mission year book『THE CHRISTIAN MOVMENT IN JAPAN ＆ Formosa 26 issue』1928

■Knox, Rev. George William & Mrs.　1853.8.11－1912.4.25

ノックス（ナックス）　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1877－1893

1853　　ニューヨーク州ロームに生まれる。
　　ハミルトン・カレッヂ卒業。
1877　　オーバン神学校セオロジカル・セミナリ卒業。
1877. 10. 20　夫妻で来日。ルーミスが1876年春帰国したため牧師不在であった住吉町教会の仮牧師となる。近隣地区への伝道を展開、木更津に及んでいる。東京移住のため辞任。この間、バラ, J. C. の英語学校で英語を教える。
　　東京一致神学校で神学と説教学を担当。
1885　　日本基督一致教会による高知伝道に参加、高知教会の設立に貢献。
1886　　神学校が明治学院となった後、神学部の教授として弁証論、説教学、牧会学を担当。同時に東京帝国大学哲学科講師として哲学と倫理学を担当。
1890　　植村正久が『福音新報』を発行するに当たり、ノックスは経営者、執筆者として協力
1893　　帰国、ニューヨーク郊外のライ教会の牧師となる。
　　明治学院時代の同僚インブリーは、ノックスの日本基督教会への貢献として、神学教師としての活動、伝道局の創設に尽力したこと、土佐の伝道につくしたことの三点を挙げている。
　　土佐伝道の折、片岡健吉（後の衆議院議長）の洗礼志願のことがあり、ノックスが試問し授洗を躊躇したが、今日受け入れないと、再び機会があるか否か気遣い懇切に基督の神性を説き聞かせ再度試問のうえ、翌日洗礼を行なったという逸話が残っている

1897　　ユニオン神学校講師、1899年同校教授となり、哲学と宗教史を担当。
1911.　6　　世界遊説の旅行で、インド、中国で講演。
1912.　4.　25　遊説旅行で朝鮮・京城に至ったとき肺炎に罹り逝去。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
植村正久著『植村正久と其の時代　第三巻』教文館　1966
高谷道男他編『指路教会八十年史』日本基督教団指路教会　1955
横浜指路教会一二五年史編纂委員会編集『横浜指路教会百二十五年史』日本基督教団横浜指路教会　2004

■Lamott, Rev. W. C.　1893－

ラマート　アメリカ長老教会宣教師　在日期間　1919－1938

1893.　10　　オハイオ州ランキャスターで生まれる
オクシデンタルカレッヂ及び桑港神学校卒業
1910.　　受洗、1919年受按
1919.　3　　来日、当初福井に赴任したが1922頃明治学院に移り帰国するまで在任した。神学部予科で聖書、英文学、哲学等を担当。
1923.　1－　　明治学院理事に選出され、年度によっては会計を務めている
1923　　神学部講師に就任。本科一年の新約釈義を担当
1926.　3　　明治学院では創立五十年記念行事の計画遂行のため中央委員会が組織され、委員の一人に選出された。委員会の任務は、『明治学院五十年史』発行と「学院拡張に関する調査」であった。
1929.　4　　「明治学院高等学部社会科セッツルメント」設立の議があり、発起人の一人となった。
1935.　12　　11日、12日の両日にわたり高輪警察署に出頭を求められ取調べを受けた。その内容については夫人にすら語っていない。
　ラマート教授には、*Suzuki Looks at Japan*（フレンドシップ・プレス・ニューヨーク、1934）と題する著書がある。この本は、日本の教育、宗教、思想等についての詳細な調査と資料収集に基づいた著作である。同教授は、本書のためかなり立ち入った調査を実施したため、警察から疑惑の眼でみられたのではなかろうか。
1938.　夏　　帰米、夫人によれば、帰米の理由は、長老教会出版部に転出するためであったというが、明治学院内部には、その原因が筆禍事件にあったとの噂が流れた。

資料　鷲山弟三郎著『明治学院五十年史』明治学院　1927
明治学院編『明治学院九十年史』明治学院　1967
明治学院編『明治学院百年史』明治学院　1977
『明治学院神学部一覧』

■Landis, Rev. Henry Mohr　1857.3.9－1921.9.7

ランディス　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1888.9－1921.7

1857.　3　　ペンシルヴェニア州バークス郡コレブルックスデールに生れる。

1875.　　ポッツタウンのキーストン師範学校卒業。５年間公立学校で教鞭をとる。

1881.　　プリンストン大学に入学、哲学を専攻。卒業と同時にベルリン大学に一年間遊学。
帰国してプリンストン大学神学部に進み、1887年にM. AK称号を受ける。1888年卒業。

1881.　7　　エンマ・スティフラと結婚
ノックス（Knox, George W.）は88年に休暇で帰国した時、ニューヨークのプレスビテリアン伝道局に、将来第一流の学者となるべき青年の神学者一名、哲学者一名を明治学院に派遣するよう懇請した。プリンストン大学より哲学者としてランデスが推薦された。

1888.　9　　来日、明治学院神学部で嘱託教師として希臘語、倫理学、教授となり新約釈義、福音史等を教授。講義にラテン語、ギリシャ語、フランス語、ドイツ語等を自由に用いた。

1890－　　神学部教室兼図書館その他の建築にあたっては設計等に関わった。

1916.　12　　12月９日にランデス教授勤続廿五年祝賀会が挙行され、明治学院出身者、在学生が募金して記念品を贈呈した。氏は中学部に鉱物学の標本、高等学部にエマーソン全集その他の書物を寄贈した。
学院敷地内に教授館が多数あったが、学生達がしばしば訪問していた。
日本に対し三つの忠言をしている。
第一、「徴兵制度を止めよ、それは日本を軍国主義に導き国を破滅させるから」
第二、「漢字を止めよ、それは世界の進運に遅れるから」
第三、「米飯をやめよ、それは主婦を愚鈍ならしめるから」

1918　　秋、健康を損ね米国に静養に赴く。静養一年再び日本に来たが、依然として回復しなかった。

1921.　9.　7　軽井沢の別荘で逝去。9日学院講堂で葬儀が営まれ、明治学院近隣の瑞聖寺墓地に埋葬された。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
『明治学院各年史』
秋山繁雄著『明治人物拾遺物語：キリスト教の一系譜』新教出版社　1982

■Landis, Mrs. Emma M.　生没年不詳

ランディス　　アメリカ長老教会婦人宣教師　　在日期間　1888－1924

ドイツ語、フランス語が堪能で、明治学院高等学部でドイツ語を教える傍ら聖心女学院でも教鞭を取っていた。

1923.　9　　関東大震災で築地の自宅が焼失し、軽井沢でほんの夏物衣類を残したまま一切の衣類と思い出の品々を失った。

1924.　5　　夫君の没後も明治学院に止まりドイツ語を教授し、学生を遇する事は、全く実子を待つようであった。しかし、令息の呼び寄せにより帰国。“My heart is in Meiji Gakuin”の言葉を残している。
逝去後、遺骨は瑞聖寺墓地（＊白金）に埋葬された。

資料　鷲山弟三郎著『明治学院五十年史』明治学院　1927

□Johnstone, Miss Janet M.　1873.4.13－1930.5.14

ジョンストン　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1901.9－1930

1873.　3　　カナダのオリリアの裕福な農家に生まれる。
師範学校卒業後6年間同地の教育に従事。

1905.　12　　外国伝道を志し来日（1901年の説あり）。金沢女学校の教師となる。

1906.　1　　英和幼稚園々長に就任。女学校で英語、聖書を担当のまま兼任であったが幼稚園の充実発展に精力的に働く。

1909.　春　　女学校の校長代理となり、9月より正式に校長を兼務。

1911　　富山に幼稚園を開園、1913年には高岡にも開園。園長として当時の法令に基づき週1回各園を巡回。一時は居を高岡に移している。

1913.　7　　規定に基づき休暇を得てカナダに帰国。この間、1914年８月に校長辞任。ルーサー（Miss Luther, Ida R.）後任の校長になる。

1914.　11　　休暇を終え帰沢。園長、女学校での授業及び伝道に勤しむ。

1918.　11　　突然、英、米赤十字社から選ばれ、第一次世界大戦の戦火を逃れたシベリア難民の救済のため同地に出発。壮行会の席で「義のためには、血が凍るまでも」と挨拶をした。

1921.　　幼稚園長を辞し、休暇を得て帰国。

1922.　9　　休暇を終え再来日。下関梅光学院の教頭に就任。

1929.　7　　休暇、帰途聖地パレスチナを巡歴の後カナダに帰着。

1930.　4　　休暇中に病に侵され、バッファローの病院で検査の結果、癌の手術を行なったが、５月15日に逝去。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
北陸学院100年史編集委員会編『北陸学院百年史』北陸学院　1990

■Kidder, Miss Mary Eddy　1834.1.3－1916.6.25

キダー　　アメリカ・オランダ改革宣教師

1834.　1.　3　ヴァーモント州山間の寒村ウォーズポロに居住する自営農民クリスチャンの家庭に生まれる。
バプテスト派の中等教育機関であるタウシェンド・アカデミー在学中に出席していた教会にリヴァイヴァルが起こり改心し受洗した、年齢16歳。

1855.　　マサチューセッツ州モンソン・アカデミーの女子古典部で勉学の後、S. R.ブラウンが開設した男子校に２年勤務し、同時にブラウンの教会に所属した。
実母の死亡（1856年）、父親の再婚（1857年）、病弱な妹との共同生活など個人的事情のもとで教師として自活し、かつ、会衆派系の慈善事業ワレン・ストリート・ミッション（1853年設立）に深く関わり奉仕活動の経験を重ねた。しかし、日本での伝道について真剣に考えていた。

1867　　一時帰国中のブラウンから日本での女子教育開始についての誘いを受けた。

1869.　9　　熟慮の結果同師一家と共に来日。日本における最初の独身婦人宣

教師である。

1870.　9　新潟に於ける１ヶ年の生活を終えたキダーはヘボン塾を引継ぎ（男子４名、女子３名）ヘボンの住む居留地39番の敷地内に建つ施療所を午後使用して授業を継続した。

1871.　9　キダーは当初から女子への教育を抱いていたので、女子のみを分離独立させた。

1872.　神奈川県令の後援により、塾を伊勢山に日本家屋を得て移転。改革派の事業としての性格を明瞭に持つに至った。

1873.　４月、キダーはE. R.ミラーと同僚の宣教師に内密で婚約、同年７月結婚、山手に居を定める。当時、他教派間の宣教師が結婚した場合は、女性は男性の所属する教派に移籍していたが、今回は全く例外としてミラーが長老派から改革派に移籍している。キダーは自分か育てた学校から離れることは出来なかった。

1875.　6.　山手178番の借地権が認められ（1874年９月）、同地に校舎建築完成。日本語により献堂式挙行（６月１日）フェリス・セミナリー開校。改革教会伝道局が5,000ドル負担。不足金500ドルはミラーが個人負担。ミラー夫妻はここに寄宿生と共に住み、生徒の生活指導に当たった。

1879－81　休暇帰国。再来日とともにフエリス女学校を辞任。夫と共に伝道に従事。

1916.　6.　25　病に倒れ（1900年）、いったんは再起したが東京で永眠。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
G.F.フルベッキ著『日本プロテスタント伝道史：明治初期諸教派の歩み 上・下』日本基督教会歴史編纂委員会　1984
フェリス女学院資料整備委員会編訳『キダー書簡集：明治初期女子教育と宣教の記録』フェリス女学院　1975
小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師：来日の背景とその影響』東京大学出版会　1992

□Luther, Miss Ida R.　生没年不詳

ルーサー　アメリカ長老教会宣教師

1898.　１月来日とともに北陸女学校に着任、英語と聖書を担当。同時に Miss F. E. ポーターが責任を負っていた英和学校（英和小学校）及び幼稚園を手伝う。

1901　ポーターが病気療養のため1901年５月に帰国、翌年４月、小学校及び幼稚園の仕事を辞任したため、任務を引継いだ。

1902.　9　Miss K. ショー帰国にともない、北陸女学校長に就任。小学校及び幼稚園の責任者は継続した。

1906.　4
－1907.10　規程である休暇を得て帰国するにあたり、ヨーロッパを経由し、各地の学校を視察した。再来日後､その経験談を「卒業生諸子へ」と題し、同窓会報に公にした。その要旨は､「日本現今の教育制度並びに教授の方法が､他の諸国のそれに比して敢て遜色なき事」「米国有数の某学校の卒業式で深く感動させられたのは、卒業生諸子の母校に対する忠実、同情及びその熱心であった」と論じ、結論として､「私がこの度再び教師諸君と力を協せて、我が北陸道教育事業発展のために、クリスチャンたる人格を養成せんために、女子を最高の位置に上らしめんために、全力をそそいで働かんとする」決意を語っている。

1908.　3　校長就任当時は金沢には北陸女学校と石川県立高等女学校と女学校は二校のみであった。しかし、20世紀に入り女子教育に社会の期待が盛り上がり、金沢市内においても1904年に私立遊学館、1905年に私立金沢女学校、1906年に金沢市立女子職業学校と女学校の設立が続いた。同時に女子教育論が盛んに論ぜられた。
ルーサーは、長文にわたる自己の教育論を公にした。即ち、女子教育に考えが「家に従属した女性を越えて、広い世界の中に理想を高くもって生きる人間を目指す」ものであることを示した。

1909.　前年より病気療養中で11月には上京している。1909年８月校長を辞任。

1910.　病気回復後、規定の休暇を得て朝鮮に滞在している。その間の活動については1910年７月に北陸女学校の終了式に出席し朝鮮の風俗、教育、宗教等について語っているが、朝鮮に於ける活動については詳らかでない。

1913.　7　ルーサーの後任者J. M. ジョンストンの休暇帰国の一年間、休暇を終えたルーサーは校長事務を取り扱っている

1914.　8　ジョンストンの校長辞任し､幼稚園のみ担当することに伴い､ルーサーが校長に再任された。

■MacNair, Rev. Theodore Monroe　1858－1915.11.21

マクネア　アメリカ長老教会宣教師　在日期間　1884－1915

1879　テンプル・ヒル・アカデミーを経て、ニユージャージー州プリンストン大学卒業
1882　プリンストン神学校卒業
1883　日本旅行を試みる
1884.　1　宣教師として来日。東京一致英和学校教授となり、論理学、理財学を担当。同校に野球部を創設。
1886　明治学院設立に伴い理事会を設立する事になり、北米長老教会の総会において、明治学院理事会員に選出された。また、普通学部教授として論理学、心理学、理財学を担当。
1905　明治学院財団法人制定の件が文部大臣より認可された。最初の理事18名の一人であった。
その後、アメリカ長老教会宣教師ウエストが開設した婦人伝道師養成機関「聖書学館」に転じた。
各学校で教員として教育に関わるとともに各地で伝道を行った。
他方、讃美歌編纂、日曜学校協会、平和協会、亜細亜協会、禁酒会等のために尽くした。
1915.　11　逝去。
夫人キャロラインについては「Alexander, Caroline Tuck」を見よ。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
『明治学院各年史』

■McCartee, Rev. Divie Bethune　1820.1.13－1900.7.17

マッカーティ　アメリカ長老教会宣教師　在日期間　1888－1900

1820.　1　フィラデルフィアに生まれる。
1834　コロンビア大学入学したが古典を嫌い、中途退学のうえペンシルヴァニア大学で医学を　学び、1840年に卒業、さらに研究科に在学。
1844　フィラデルフィアで医業を営なんだが、ミッションよりの求めで医療宣教師として寧波に至り、医療活動と同時に、説教、トラクト配付等により伝道をも推進。一方米国外交官の要請により、通

訳を受持つ。又チーフーの米国代理領事を勤める。マッカーティは1853年に寧波に於いて伝道用トラクトとして漢文で『真理易知』を著した。「キリストの十字架の死によって救われる」というキリスト教の真理がわかりやすく説かれている。この書は1864年にヘボンが和訳して横浜で刊行している。

1853.　2　Miss ナイト（Knight, Joanna M.）と結婚。

1861.　12　健康を損ね休暇を得て日本へ来航。横浜、長崎に居住した。

1872　宣教師達との意見相違のため上海に移転。ミッションを辞職し、上海のアメリカ領事館に勤務。通弁官および混合裁判所の陪席判事となる。

1872. 9－77. 4　フルベッキ, G. H. Fの推薦により、日本政府の招聘を受け開成学校御雇教師として英語、医学、博物学、ラテン語を教える。
当時、進化論が広く論ぜられていた。マッカーティは学生に対し“そのような説を聞いても信じてはいけない”と厳しく戒めた。しかし、学生を納得させることはできなかった。

1877　駐支米国総領事館よりの招聘があり、東京開成学校を辞任し、清朝政府に奉職。
外交面で活躍。

1888　宣教師として来日。明治学院に勤務。

1899　帰国、サンフランシスコで逝去。

■McCauley, Rev. James Mitchell　1847.8.29－1897.2.10

マコウリー　アメリカ長老教会宣教師　在日期間　1880－1897

1847.　8　ペンシルヴァニア州ブリッチウォーターに生れる。
フックスタウンの一学院で小学課程を卒える

1870　ペンシルヴァニア州のウェストミンスター大学卒業。
卒業後、ジェームスタウンの大学進学を目的とする学院に迎えられ経営の任に当たる。

1874.　アレガニーのウェスタン神学校卒業。ミネソタ州オワタナ教会を牧会。

1877　アメリカ長老教会宣教師としてタイに派遣され、バンコックの英学校の教頭として教育と経営に専念。この時期にジェーン（Kooser

Jane C.）と結婚.
E. P. ダンロップの後任としてペッチャプに赴任。
1880　健康を害しタイを引上げ、日本に立ち寄り静養し健康回復。
日本ミッションに転属を願い出で認められ、東京一致英和学の教授となり、心理学と史学を担当。妻も同校助教授となる。
1886　夏コレラに感染し一時帰国。この期間、米国各地の学校を視察、歴史の教授を研究。明治学院の教育向上を図る。
1887　東京一致英和学校が明治学院となると、普通学部の教授となり、史学、倫理学を担当。妻も助教授に就任。
1897　再度の発病により逝去。青山霊園に埋葬。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
明治学院編『明治学院百年史』明治学院　1977
手塚竜麿著『日本近代化の先駆者たち』吾妻書房　1975
秋山繁雄著『明治人物拾遺物語：キリスト教の一系譜』新教出版社　1982

■Miller, Rev. Edward Rothesay　1843.10.29－1915.8.7.

ミラー（ミロル）　アメリカ長老教会宣教師
73年アメリカ・オランダ改革教会に移籍

1843. 10. 29　ペンシルヴァニア州フィラデルフィアに生れる。
1867.　ニュージャージー州セントラル・カレッヂ卒業
1871.　プリンストン神学校専攻科卒
1872. 6.　按手礼を受け、アメリカ長老教会宣教師として来日、日本名、美露生
1872. 9.　横浜宣教師会議（議題、聖書の共同訳委員の選出他）に長老派委員５名中の１名として出席
1873. 7.　アメリカ・オランダ改革派宣教師キダー, M. E.と結婚。
1874. 10　当月以降、長老派より一切給料を受けず自給の宣教師として妻の学校の建設を手伝う。
1877. 10　日本基督一致教会の創立に尽力
東京一致神学校（1877年設立）で教鞭をとり、のちに明治学院神学部で新約を講じた。
1881.　休暇終了後、横浜、東京を本拠として信州上田、高知、北海道など各地に伝道。
1883.　大阪宣教師会議の記録編集委員の一人

1888　　住居を盛岡に移し、以後14年間にわたり、該地で伝道
1915.　8.　7　米国に休暇帰省中に死去　71歳
　　夫人についてはKidder, Mary Eddyの項を見よ

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
G.F.フルベッキ著『日本プロテスタント伝道史：明治初期諸教派の歩み　上・下』日本基督教会歴史編纂委員会　1984, 1985
『明治学院各年史』

■Murray, Rev. David Ambrose　1861.3.23－1949.9.29

マレー　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1888－1925

1861　　ニューヨーク州モントゴメリー郡に生れる。
1879　　コオ・コレジェート学院（コオ大学）卒業
1885　　イリノイ州モンマウス大学卒業
1888　　プリンストン神学校卒業、長老教会牧師に任職のうえ来日。
　　京都、大阪の官立学校の教授を５年間務める。
1892　　帰国
1893　　シカゴ、アイオワ州のペリ、オタワなどで牧会。
1902　　アメリカ長老教会遣宣教師として再来日。
1904　　Kawaguchi-cho, Osaka.
1905－1906　　Kyohori-dori, Sanchome, Osaka.
1907－1909　　Kawaguchi, Osaka.
1910　　Fukui.
1903－10　　大阪に伝道同志館を設立して神学研究のかたわら実地伝道の教育を施し、のち大阪神学　院と改め1910年まで院長を務めた。この間、伊勢地方の伝道に当った。
1912－14　　Tsu, Ise.
1915－17　　Tsu.
1918　　Tsu, Ise.
1919　　1236 Shimo Bezai Cho, Tsu, Ise.
1911－19　　明治学院神学部教授を務める
1920　　16 Tsukiji Tokyo.
1921　　Meiji Gakuin, Shirokane Imazato-cho, Shiba-ku, Tokyo.
1914－1922?　　明治学院理事就任、この間、1920年には井深総理の理事長宛に提

出された辞表の取扱のため設置された委員会の委員を務めている。
1921－25　日本文書伝道協会の主事
1925　帰国、モンマウス大学教授
1922　(A), Presb. Board For. Missions, 156, Fifth Avenue, New York City.
1923　(A), 934 Second St, Santa Monica, Cal, U.S.A.
1934　カリフォルニア州サンタモニカYMCA会長に就任
1949. 9　サンタモニカで逝去

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
『明治学院各年史』

■Nunn, Miss Evelyn

1920　来日
1922　Meiji Gakuin, 1Imazato-cho, Shiba, Tokyo-shi.

■Oltman, Mr. P.V.

■■■■■（＊不明）

■Pierson, Rev. George Peck　1861.1.14－1937.7.31

ピアソン　アメリカ長老教会宣教師　在日期間　1888－?

ニュージャージー州出身　プリンストン大学、プリンストン神学校卒業
1888　Knox Rev. J. W.の要請により、ニューヨークのプレスビテリアン伝道局より派遣され来日。要請内容として「将来第一流の学者となるべき青年の神学者、哲学者各一名」とあり、神学者としてピアソンが来日。哲学者としてランヂス, H. Mが選任された。
明治学院中学校に勤務。国家主義思想の台頭のこともあり、自分の使命は直接伝道にあることを悟り同校を去り、千葉、盛岡等で

伝道。

1893　北海道に渡り、函館、伊達、室蘭で伝道。北海道内においてきわめて優れた伝道上の功績を残した。

1896　札幌スミス女学校を妻とともに助ける。

1902　旭川に伝道の拠点を移し、坂本直寛と協力して廃娼運動を起し、旭川師団軍人伝道、十勝監獄伝道を行なう。

1914　野付牛に拠点を移し、以後15年間にわたり道東、道北の伝道に当たる。

資料　日本基督教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
鷲山弟三郎著『明治学院五十年史』明治学院　1927
小池創造著『田舎伝道者　ピアソン宣教師夫妻』日本基督教北見教会ピアソン文庫　1967

■Reischauer, Rev. August Karl　1879.9.4－1971.7.10

ライシャワー　　アメリカ長老教会宣教師

イリノイ州南部ジョーンズバロー近郊に生れる　９歳で父を失う
ハノーヴァー大学からマコーミック神学校に進む。

1905　学校卒業後すぐに妻とともに来日
明治学院高等学部、神学部、のち日本神学校で教え、東京女子大学（1918年）、日本聾話学校（1920年）の創設に当り、また女子学院長（1920－1927年）をつとめる。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
エー・ケー・ライシャワー博士伝刊行会編『準縄は楽しき地に落ちたり：エー・ケー・ライシャワー博士伝』教文館　1961
『明治学院各年史』

■Parke, Miss M. C.

パーク　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1873－

1873　来日

1874.　1　同時に来日したミス・ヤングマンとともに年末に東京に第二の女子学校を開設、のちのグラハム・セミナリーである。

1874　Thompson R. D. と結婚

■Poter, Rev. J. B. & W.

ポーター　　アメリカ長老教会宣教師　Miss F. E. Poterの兄（大事典P1286参照）

資料　金沢教会　　日本基督教団金沢教会百十年史編纂委員会編『金沢教会百十年史』日本基督教団金沢教会長老会　1997 P29参照
Mrs. J. B.について　小檜山ルイ著『アメリカ婦人宣教師：来日の背景とその影響』東京大学出版会　1992　P227参照

■Poter, Miss Francina E.　1859.6.1－1939.3.17

ポーター　フランシナ E.　　アメリカ長老教会婦人宣教師　　在日期間　1888－1925

1859.　6　　米国テネシー州プライスヴィルで生まれる
同州のメルヴィル大学師範科卒業

1882.　12　　来日

1883.　11　　金沢の愛真学校に赴任、英語を教える。同校には兄ポーター，J. P.が既に勤務していた。一年後に同校は広坂通りに新校舎を建て、その名を北陸英和学校と改めた。
幼稚園設立の熱意に燃え、保母を求め横浜に赴き吉田鉞を紹介され、同姉を桜井女学校幼稚保育科に学ばせた。

1886.　10　　金沢広坂通に民家を借受け英和幼稚園を開設。吉田が就任している。次いで小学校を併設。

1889　　下本多町に幼稚園、小学校および職員住宅を兼ねた２階建て家屋を新築し移転。

1899　　８月に文部省訓令第12号が公布され学校に於ける宗教教育は禁止された。ポーターを初め関係者の深い祈りにより、英和小学校は各種学校に転換した。
因みに同校の目的は
「一　目的　基督教道徳ニ基キ普通教育ヲ授ケ智徳体ノ三育ヲ適當ニ發達セシメ敬神愛人ノ精神ヲ涵養シ自己ニ對シ同胞ニ對シ國家ニ對スル務ヲ完スルニアリ」とある。
ポーターは進取の気性に富み、横浜から馬を買求め、馬に乗って家庭訪問や伝道をした。又、豆腐屋がラッパを吹いて通るのをみて〈豆腐マン〉という楽しいリズム遊びを工夫するなどユーモアと独創性に富んだ保育を行った。

1901	長年にわたる心労から神経を病み、小学校と幼稚園をルーサー（Luther, Ida R.）にまかせ静養し、休暇を得て帰国。
1909. 10	再来日し、兄の赴任先京都に赴き、西陣幼稚園、室町幼稚園設立。
1918. 7	日本基督教会第三十二回大会は「二十五年以上在留宣教師に対する決議の件」を可決し、該当者ならびに該当者の米国における教会、外国伝道局に感謝状を贈ることを決議したがその一人にポーターは在留36年として加えられている。
1929.	満70歳で帰国。カリフォルニア州パサデナで過ごす
1939. 3. 17	召天　79歳10月　サンガブリエル墓地に埋葬。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
北陸学院100年史編集委員会編『北陸学院百年史』　北陸学院　1990
山本秀煌編『日本基督教会史』日本基督教会事務所　1929

■Smith, Rev. J.C.

スミス　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1929－

1929	来日
1930	明治学院
1931	札幌
1932	旭川
1933	明治学院
1934	和歌山
1935	absent
1936－1938	和歌山
1939－1941	明治学院
1941	最後の交換船で帰国途中で大戦勃発。交換船は引き返し船客は抑留。時を経て交換船で帰国。
1948	長老派教会代表として来日。この機会に明治学院大学設置委員と懇談。この懇談会で同委員会立案の「五カ年計画」を検討。内外協力会を通じミッションへの援助申請が決定した。

■Thompson, Rev. David　1835.9.21－1915.10.29

タムソン　アメリカ長老教会宣教師　在日期間　1863－1915

1835.	9. 21	オハイオ州カデスに生まれる。
1859.		フランクリン大学卒業
1862		ピッツバーグのウエスターン神学校卒業
1863.	5. 17	ヴァージニア州で伝道の後、アメリカ長老教会伝道局の派遣により来日。
1867－		ヘボン, J. C. やバラ, J. H. らと共にマタイ福音書の和訳に従事。また、運上所内横浜英学所教師のかたわら伝道に励み、ヘボン塾でも教える
1869		東京に移る。
1870		半年ほど大学南校で英語を教えたが、これは同ミッションのE. Cornesが任期中に不慮の死を遂げたので同僚として責任を果たすためであった。 和歌山藩に招かれ、政治・法律の諮問に応ず。
1871		江原素六、片岡健吉らを含む欧米視察団を率い、1873年１月帰国・片岡健吉は当時のタムソンを回想し「氏の懇篤なると謹直なると謙譲なるとに感服せり」と記している。
1873		東京基督公会設立に当たり、仮牧師に就任。
1874		B六番女学校の初代校長として来日したMary Parkeと結婚。
1874		以後７年間にわたり在日米国公使館の通訳官を務める。
1877		東京一致神学校の創立とともに旧約学を講ずる。 新約聖書翻訳に関わり、1873年頃から創世記の訳業に当り、1876年東京翻訳委員会の中心となり、1878年の聖書常置委員会の基を開いた。 “Japanese Fairy Tales” は1885年以来順次発行された。タムソンはこの資料のうち「桃太郎」「舌切雀」「猿蟹合戦」「花咲爺」「ねずみの嫁入り」の五篇を訳述している。 明治学院理事会員として明治学院の運営に努めた
1915.	10. 29	80歳で東京で逝去。東京染井霊園に葬られる。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
手塚竜麿著『日本近代化の先駆者たち』吾妻書房　1975
秋山繁雄著『明治人物拾遺物語：キリスト教の一系譜』新教出版社　1982

■Vaughn, Rev. A. P.

アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1904－1906

1904　　来日、明治学院に赴任
1906　　新潟、学校町
1907　　住所不詳

資料　Greene, D. C.『CHRISTIAN MOVEMENT IN JAPAN:fourth annual issue』1905, 1906

■Walser, Rev. Teodore Demarrest　1885.8.3－1949.8.14

ウォルサー　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1916.9－

1885　　ニューヨークに生まれる。
1913　　アルバニー陸軍学校を経てユニオン大学、更にユニオン神学校、コロンビア大学に学び卒業
1916.　9　　来日。慶応義塾、中央大学などの学生伝道を進め、また日本仏教研究を行なう。日本友和会の事実上の運営者として平和運動を展開、特高の注意人物となり拘禁される。明治学院神学部に於いてライシャワー教授が休暇帰国の間は同教授受持ちの一部を担当。
1927－28　　明治学院理事に選出。
1942　　米国に送還されたが、帰国後米国政府により留置された。
太平洋戦争下に日本を弁護、戦争の早期終結のため奔走。原爆投下に対して米国大統領を非難した。
終戦後、日本友和会常任幹事としてララ（LARA ; Licensed Agencies for Relief in Asia）による救援活動に努め、平和の使徒として献身。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
鷲山弟三郎著『明治学院五十年史』明治学院　1927
明治学院編『明治学院九十年史』明治学院　1967

■Winn, Rev. Merle C.

ウイン　Winn Thomas Clayの三男　　アメリカ長老教会宣教師　　在日期間　1915－

1916　　東京（P. C. U.S.A.）
1917－18　　和歌山

1919－27　　金沢
1921. 1－22.12　明治学院理事
1928　　absent

■Winn, Rev. Thomas Clay　1851.6.29－1931.2.8

ウイン　　アメリカ長老教会宣教師

1851. 6　　ジョージア州フラミントンに生まれる。
1877　　ユニオン神学校卒業、Eliza と結婚。12月来日
1878　　横浜で日本語を学びつつバラ, J. H. の私塾を助ける。
1879. 10　　石川県中学師範学校からの要請により金沢に赴任。10月５日（日）に北陸最初の礼拝を自宅で行なう。本務の傍ら３カ月の間に３講義所を開き、翌年には受洗者があった。９月に13名の信徒が金沢教会設立願を日本基督一致教会に提出。
妻と力を合せて七尾、高岡、富山、小松、大聖寺と伝道の範囲を広げた。
1883－　　愛真学校（北陸英和学校）を創設、妻はヘッサー, M. K. を助けて金沢女学校（北陸学院）設立に尽力。その他、1890年よりの細民救済運動、1892年に孤児院設立などに尽力。
1898　　大阪に移り、大阪南教会などの応援の傍ら堺に伝道している。
1906　　満州伝道の要請を受けて大連に渡り、大連教会の会堂建設、旅順、奉天、撫順等で伝道。
1912年10月７日　妻、脳溢血で倒れ、急死
1917　　フローレンスと再婚。引続き満州伝道継続。
1923　　隠退、帰国。
1929　　米国外国伝道会社は「日本に帰り、余生を捧げる」ことに同意。
1929年６月に再来日。下関に居住。30年に夫妻で日本基督教会満州中会の招待で満州旅行。
1930　　妻フローレンスが北陸女学校に招聘され、夫妻で金沢に移転。自らは金沢教会、金沢殿町教会で奉仕。
1931. 2. 8.　金沢教会に礼拝説教者として出席、説教の直前に突然逝去。

明治学院教師及び関連校教師

■明治学院
□関連学校

第２部　アメリカ・オランダ改革教会（RCA）宣教師の部

■Amermann, Rev. James Lansing　1843.8.13－1928.9.6

アメルマン　　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　在日期間　1876.07－92.2.12

1843.　8　　ニューヨーク州ロングアイランド出身
1862.　　ニューヨーク大学卒業
1868.　　ニューブランズウィック神学校卒業
　　ニュージャージー州ジャージーシテイのオールド・ベルガン改革教会を牧す。
1876.　7　　宣教師として来日　ブラウン塾の中心教師となり、横浜居留地ユニオン・チャーチの牧師兼日曜学校長を務める
1877　　東京一致神学校の創立に当り、ブラウン塾生徒と共に上京し同校教授となり、組織神学、教会史を担当。インブリー, W. M. 、マクラレン, S. G.と共に専任教師となり、学校の管理ならびに教育上の強い権限を与えられ、３者のうちの最年長者であったので、同校創立当初の事実上の校長であった。
1879　　同校予科の必要を本国伝道局に強く訴え、横浜に先志学校を開設させた。
1892.　2　　病気のため帰国。改革教会外国伝道局の会計業務を担当、また臨時牧師として牧会にも従事。
1928.　9　　ニューヨーク州スコハリーで逝去

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988

■Ballagh, Rev. James Hamilton　1832.9.7－1920.1.29

J. H. バラ　　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　在日期間　1861.11.11－1919.6

1861.　11　　日本伝道を志し、結婚後半月でニューヨークを出航、11月に神奈川に上陸。

東神奈川の山手廣尾臺に一本松という小丘がある。古墳で房総の山々から武蔵相模の平原が一眸のうちに見渡される。来日直後のバラは毎朝この小丘で日本の救いのために祈ったと言われている。

1865. 11. 5　日本語教師矢野元隆にバプテスマを授け、日本最初のプロテスタントの洗礼式となる。

1872. 3. 10　当日彼から洗礼を受けた９名を含む11名により日本最初のプロテスタント教会である横浜公会が設立され、その仮牧師となる。
伝道活動は関東一円、上田、新潟、静岡、名古屋の広範囲に及ぶ。

1883. 4　大阪宣教師会議での説教「宣教師としての我らの働きにおける聖霊の力の必要と約束」は、彼の伝道への情熱と理念をうかがわせる名説教として伝えられている。

1894　明治学院理事会員となり1917年まで務めた

1909　妻を失った後も日本にとどまる。

1919. 6　帰国、翌1920年１月ヴァージニア州リッチモンド市で逝去

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
鷲山弟三郎著『明治学院五十年史』明治学院　1967

■Booth, Rev. Eugene Samuel　1850.8.16－1931.2.9

ブース　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　在日期間　1879.10－1922

1850. 8　コネティカット州に生まれる。

1876.　ラトガース大学卒業。

1879.　ニューブランズウィック神学校卒業。
10月、妻と共に来日（横浜）。12月に任地長崎に到着。スタウトは同年春より休暇のため帰国し、後事は凡て日本人の伝道者に一任して居た。ブース氏夫妻が到着し、スタウト夫妻も翌年帰任し、教育事業も伝道事業も新しい勢を加えるに到った。しかし、ブース夫妻は1881年11月健康の関係で横浜に移った。

1881. 12　横浜のフェリス・セミナリー（後のフエリス女学院）の校長となり、爾来1922年まで41年間にわたり、ブース氏夫妻の監督の下、ミス・バラ、ミス・ウイント日本人教師に助けられ好調な歩みが続けられた。校務に励むと共に1898－1907年の間、横浜ユニオン・チャーチの牧師を兼ね、また、公共福祉、地域の文化向上にも協

力、横浜の文化・音楽協会、日本アジア協会等、各種社会・文化団体に関与。

1886　明治学院は創立にあたり理事会員制度を採用した。勿論、まだ財団法人が法制化される以前である。ブース氏は早い時期より理事会員として学院の運営に参画し、その在任期間は30年を越えるものであった。その間にあって1899年の文部省訓令12号に対する明治学院の態度を正式に決定する臨時理事会等があった。

1917　ブース夫人エミリーは長くフエリスの教師、副校長を務めたが17年に逝去。

1922　ブースは校長を辞任。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
G.F.フルベッキ著『日本プロテスタント伝道史：明治初期諸教派の歩み』日本基督教会歴史編纂委員会　1984
『明治学院各年史』
『明治学院神学部一覧』
黒木五郎著『梅光女学院史』梅光女学院　1934
井川直衛編『東山学院五十年史』東山学院　1933

■Brown, Rev. Samuel Robbins　1810.6.16－1880.6.20

S. R. ブラウン　　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　在日期間　1859－1879

1810. 6　米国コネティカット州イースト・ウインザーに生れる。母は子を外国伝道に献げると祈った。

1818　マサチューセッツ州モンソンに移り、モンソン・アカデミーに入学。

1828　アマスト大学に入学､学資がないため中退。イェール大学に転学、働きながら勉学。

1832　イェール大学卒業、ニューヨークの聾唖学校に就職

1835　健康を害し、南カロライナ州に転地。当地のコロンビア神学校に入学。

1836　ニューヨークのユニオン神学校に入学。

1838　10月、同校卒業。結婚、受按ののち同月17日中国へ出発。

1839　中国モリソン記念学校長となる。

1841　中国人向き英語教科書編集のためシンガポールに行く。ヘボンに会う。

	学校の香港移転にともない居を香港に移す
1847	妻の病気のため帰国。
1851－59	ニューヨーク州オーバン近郊のオワスコ・アウトレットの改革派教会の牧師として在任。
1859	フルベッキ, G. F. 、シモンズ, D. B.とともに来日。 神奈川の成仏寺に居住して、ヘボンと日本語研究、伝道、聖書翻訳に従事。
1863	横浜居留地に移り、居留民のための教会を設立。同年『日英会話篇』を上海で発行。
1864	横浜英学所で英学教授を始める
1867	自宅が火災に遭い、一時帰国。
1869	イギリス領事ラウダー氏の好意により新潟英学校教師の招聘を受け、再来日、同校の教師となる。
1870	横浜の修文館に任期３年の契約で英語教師として招かれる。
1873	横浜山手の自宅に学塾ブラウン塾を開設、日本基督公会の信徒を集め伝道者の養成に努める。同塾が明治学院の一源流となる。
1874－79	新約聖書翻訳委員会委員長として聖書の翻訳に携ったが、病を得て完成直前に帰国。
1880.　6	マサチューセッツ州モンソンで逝去

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
高谷道男編訳『S.R.ブラウン書簡集：幕末明治初期宣教記録』日本基督教団出版局　1965

■Bruns, Rev. Bruno　1899.4.14－

ブランス　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　在日期間　1930－1940

1899.　4	アイオワ州ベルモントに生まれる。 Pleasant Prairie Academy,　ホープ・カレッジ, Western Theol Seminary卒業
1930.　6.　30	按手礼を受ける
1930.　9	来日
1930.　9－1931年度	明治学院に勤務
1932年度	長崎市で伝道
1933－35年度	佐賀市で伝道

1936－37年度　休暇帰国
1938－40年度　佐賀市で伝道
1940　帰国

資料　『CYB』
日本基督教会同盟年鑑委員編纂『基督教年鑑』昭和10年版

■Buss, Miss Florence V.

ブス　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　在日期間　1922－1930

1922　来日、明治学院
1923年度　長崎・大浦
1924　フエリス
1930　帰国

資料　Japan Gazette『THE JAPAN DIRECTORY』1880
山本秀煌編『フエリス和英女学校六十年史』フェリス和英女学校他　1931

■Darrow, Miss Flora

ダロー　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　在日期間　1922－1941

1922　来日、明治学院第二中学部東山学院に赴任
1923　23年３月末をもって同校閉鎖に伴い、明治学院中学校に勤務
1941　帰国

資料　明治学院編『明治学院九十年史』明治学院　1967

■DeMaagd, Rev. John C.　1902.3.30－

デマアグド　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　在日期間　1928.8－

1902.　3　ミシガン州Grand Rapidsに生れる。
1924.　ホープ・カレッジ卒業
1927.　New Brunswick 神学校卒業　按手礼を受ける。
1928.　8－　来日、1929年度明治学院、

1930年度　　大分市、31-33年度 別府、
1934－35年度　休暇帰国、
1936－37年度　『CYB』記載なし、
1938年度　　明治学院
1939－40年度　久留米市　帰国日時不詳

資料　日本基督教会同盟年鑑委員編纂『基督教年鑑』昭和14年版

■Demarest, Miss May Baldwin

デマレスト　　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　在日期間　1912－

1912　　来日
1913.　9　　フエリス和英女学校に就任
1914.　7　　同校　辞職
1915－16年度　休暇帰国
1918　　明治学院に勤務（時期推定）
1919.　9　　フエリス和英女学校に再就職
1922.　3　　同校　辞職

資料　山本秀煌編『フエリス和英女学校六十年史』フェリス和英女学校他　1931
『CYB』該当年度版

■Duryee, Rev. Eugene C.　1901.9.1－

ダーイー　　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　在日期間　1926.6－1931.

1901.　9　　ニュージャージー州に生れる。
　　ルテジャス大学、ハートフォード神学校卒業
1926.　6　　来日、明治学院に勤務
1931年度　　休暇帰国

資料　日本基督教会同盟年鑑委員編纂『基督教年鑑』昭和 6 年版

■Dykhuizen, Mr. Cornelius A.

アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　在日期間　1925－1928

1925　　来日
1926－1927年度　明治学院
1928年度　　休暇帰国

資料　『CYB』

■Harris, Rev. Howard

ハリス　　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　在日期間　1883－1903

1883　　来日
1885　　長崎
1886　　東京
1891－98　　明治学院
1899　　一関陸中
1900　　青森
1901－02　　absent　青森
1903　　青森
1904　　U.S.A.

資料　『JD』,『CYB』各年度

■Hoekje, Rev. Willis Gilbert　1883.7.3－1949.1.10

ホキエ　　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　在日期間　1907－1941.4

1883.　7　　カンザス州コーカーシティに生まれる。
1907.　5　　ホープ・カレッジを経て、ウェスタン神学校卒業。６月按手礼を受ける。神学校卒業前３月に外国伝道局より日本駐在宣教師に任命されていた。
1907　　10月に来日、当初４年間は佐賀、長崎、唐津、大分の各地で開拓伝道に従事。
1911－1915　　東山学院で英語教師となる。当時のワルボールド院長とはホー

プ・カレッジに於いて同級生であった。同氏との信頼関係は深く、院長が学院拡張資金獲得のため帰米した間（1912.8-1914.2）は院長代理として経営にあたっている。

1915.4－16.12　休暇帰国、再来日後、1923年10月まで佐賀、盛岡、鹿児島の各地で伝道に従事。第２回目の休暇後1925年に長崎に赴任

1927. 11　東山学院第八代院長に就任。しかし、1935年６月に米国改革教会伝道局が主として財政的理由により学院閉鎖を決定し、1933年８月に明治学院に合併した。

1933　東山学院の明治学院合併に伴い、ホキエ氏自身明治学院理事に就任、1934年度には会計となり、明治学院の経営に直接参加することになる。

1936. 1　田川氏辞任に伴い、明治学院院長事務取扱に就任。軍国主義台頭の苦難を切抜けた。

1938. 10　明治学院に御真影が下付されるに際し、学院代表者として文部省に赴いたが、係官は外国人であるホキエ氏に授与せず、随行の加藤七郎幹事に手渡したという逸話がある。

1939. 8　院長事務取扱を辞任

1941. 4　横浜より帰米。

1949. 1　ニュージャージー州ワイコフで逝去。
妻はヘール, A. D. の娘、妹はステゲマン博士の夫人である。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
黒木五郎編『梅光女学院史』梅光所学院　1934
井川直衛編『東山学院五十年史』東山学院　1933
明治学院編『明治学院九十年史』明治学院　1967
明治学院編『明治学院百年史』明治学院　1977
秋山繁雄著『明治人物拾遺物語：キリスト教の一系譜』新教出版社　1982

■Hoffsommer, Rev. Walter E. (*Edward)

ホフソンマー（ホフソンマル）　アメリカ・オランダ改革教会宣教師
在日期間　1907－1920

1907　来日、1907年度－19年度まで明治学院教員として勤務。その間、15－17年度は休暇でペンシルヴァニアに滞在。

1914　各派キリスト教主義学校高等学部合同問題は、結局明治学院と東京学院の二校のみで発足したが、新組織は教室問題で困難があり、合同は継続不可能となった。この時期にホフソンマーは教壇

に立っている。

1919. 2　明治学院理事会は、熊野中学部長退任の後任としてホフソンマーを部長代理に任命した。同時に「中学部長後任選定委員会」を組織して後任の銓衡を図ったが、委員はホフソンマー氏他二名であった。

1920　明治学院を辞任、アメリカン・スクールに移る。以後消息不明（原文ママ）
（＊1922 召天。白金瑞聖寺に埋葬。）

資料　『明治学院各年史』
（＊『明治学院歴史資料館資料集 第14集 大正期の明治学院とその周辺』）

■Kuyper, Rev. Helen Ross　1888.12.4－

アメリカ・オランダ改革教会宣教師　在日期間　1905－1923

1888. 12　生誕

1905.　来日

1911－12　明治学院に講師として讃美歌音楽を担当

1930. 4　日本神学校設立に関する件を議する明治学院理事会に理事として出席

資料　日本基督教会同盟年鑑委員編『基督教年鑑』1940年版

■Laug, Mr. George. W.

アメリカ・オランダ改革教会宣教師　在日期間　1921－

1921　来日、明治学院勤務

1925　任地不明

1929　佐賀

資料　『CYB』該当年度

■Luben, Rev. Bamerd Maurice　1904.12.21

ルベン　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　在日期間　1929－41

1904. 12　インディアナ州ジャソンビルに生まれる。05年に幼児洗礼を受ける。
ホープ・カレッジ、ウエスタン神学校、プリンストン神学校、シカゴ大学に学ぶ。
1929. 6　按手礼を受け、来日。
1929－40　駐日中一時久留米に駐在したが、他は明治学院に勤務。
軽井沢でスパイ容疑の取調べを受ける
最後の交換船で帰国の途中、日米開戦のため横浜に逆行、横浜で抑留

資料　明治学院編『明治学院九十年史』明治学院　1967
日本基督教会同盟年鑑委員編『基督教年鑑』昭和六年版

■Miller, Rev. Edward. Rothesay　1842.10.29－1915.8.7

ミラー　アメリカ長老教会宣教師として来日、アメリカ・オランダ改革教会に移籍
在日期間　1872.6－1915

1842. 10　ペンシルヴェニア州フィラデルフィアに生れる
1867　ニュージャージー州セントラル・カレッジ卒業
1870.　プリンストン神学校卒業、更に１年専攻科に学ぶ
1872. 6　来日
1873. 7　アメリカ・オランダ改革教会宣教師キダーと結婚、同派に移籍
1877　日本基督一致教会の創立に尽力
東京一致神学校で教鞭をとる、後に明治学院神学部で新約聖書を講ずる
横浜、東京を本拠として信州上田、高知、北海道など各地に伝道
1882. 8. 9　植村正久と山内季野の結婚式の司式を行なう
1882　1876年より発行されていた児童用キリスト教雑誌『喜ばしき音』が、1882年３月より『喜の音』と改題されたが、ミラー夫人は1888年に盛岡に移るまで編集、発行人三浦徹に協力している
1888　14年間にわたり盛岡に伝道、出発にあたり住居とその敷地を東京一致神学校に寄付
1915. 8　米国に帰省、水泳中に逝去

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988

■Mokma, Mr. Gerald A.

マクマ　　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　在日期間　1922－1925

1925　　明治学院に勤務

資料　『CYB』（1925）

■Oltmans, Rev. Albert　1854.11.19－1939.6.12

オルトマンス　　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　在日期間　1886－1939

1854. 11　　オランダ・グロニンゲン県ザイドブルグに生まれ、幼児洗礼を受ける。
1869　　サイドブルグ小学校卒業
1873　　米国ミシガン州グランド・ラビッズに移住。
1877　　オラント高等学校に学び続いてホープ・カレッジに入学
1883.　　ホープ・カレッジ卒業。
1886.　　ニュー・ブランズウィック神学校卒業、按手礼を受ける。アリス・ヴォホーストと結婚。
1886.　9　　来日、長崎においてスタウトを助け男子校開校の準備を進めた。
1887　夏　　校舎完成、９月開校時に院長に就任し３年間要職にあった。
1890　　東山学院長を辞任、次いで佐賀に居住し九州伝道に従事。
1902　　明治学院より招聘され神学部教授に就任、旧約神学、旧約歴史、旧約釈義、新約神学、新約釈義、希臘語、希伯來語等を担当。1925年度末をもって定年退職した。
1911　　好善社初代理事長ワイコフ, M. N. の逝去により、二代目理事長に就任、1914年以降は毎月第四日曜日に第一区府県立全生病院の伝道に当たり、30年帰国するまで続いた。
1913　　明治学院理事となり、1920年１月－1922年12月まで理事長を務め、その間、1921年１月－1922年３月は井深総理辞任に伴い総理事務取扱に就任している。
1922　　植村正久が日本基督教会特使として米国に赴き彼の地の大中会に出席し、日本基督教会よりのメッセージを伝達したが、オルトマンスは同行し、通訳の労をとった。
1923　　関東大震災により、フエリス女学校校長カイパーが殉職した。オ

ルトマンは臨時校長に就任し、アメリカの改革教会と交渉し、震災後の復興資金の目処をつけ翌1924年３月に辞任した。

1926　明治学院を隠退。アメリカMTLの東洋主事となり、日本各地の療養所をはじめ台湾、朝鮮半島、中国を歴訪。

1930　宣教師の職を隠退し帰国。しかし、翌1931年、息子が明治学院中学部の教師として赴任するのを機会に再来日。明治学院内に居住

1939.　1　心臓の不調を訴え入院、６月12日逝去。明治学院大講堂で葬儀、瑞聖寺墓地（＊白金）に埋葬。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
中島耕二他著『長老・改革教会来日宣教師事典』新教出版社　2003
明治学院編『明治学院百年史』明治学院　1977
山本秀煌編『フエリス和英女学校六十年史』フェリス和英女学校他　1931

■Oltmans, Miss Cornelia Janet　1890.5－

オルトマンス　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　在日期間　1914－1955

1890年５月　長崎に生まれる。
ホープ・カレッジ卒業

1914　来日、明治学院に就職

1915.　9　フエリス和英女学校に就職

1922　同上校退職、休暇で帰国。

1923　鹿児島に赴任

1924.　9　フエリス和英女学校に再就職

1934　（帰国？）

1946.　11　再来日、フエリス女学院に就職

1955.　1　戦前、戦後にわたる教育への貢献により勲五等瑞宝章が授与された。

1955　帰国、カリフォルニア州ロサンゼルス市の郊外クレアモントで老後をおくる。

資料　山本秀煌編『フエリス和英女学校六十年史』フェリス和英女学校他　1931
フェリス女学院100年史編集委員会編『フエリス女学院 100年史』フェリス女学院 1970
『CYB』該当各年度版

■Oltmans, Miss F. Evelyn

オルトマンス　　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　在日期間　1914－1933

1914	来日、明治学院に就職
1916.　4	フエリス和英女学校に就職
1917.　9	梅光女学院就職
1919.　12	同校退職
1925－33	明治学院勤務
	帰国

資料　『CYB』該当年度

■Peeke, Rev. Hamman Van Slyck　1866.11.1－1929

ピーク　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　在日期間　1887－1890 1893－1929

1866.　11	ニューヨーク州オーワスコーにて生まれる。
1887	ホープカレッジ卒業、12月来日。
1888.　1	東山学院にて教鞭を執る。
1890.　7	同校の校長となり、在職１年で帰国。
	ニュー・ブランズウィック神学校、オーバン神学校で学ぶ。
1893	神学校卒業、按手礼を受け、結婚のうえ、秋に再来日。
1894－28	長崎、鹿児島で直接伝道の後、一時明治学院で教えたが再び大分、別府で伝道。
1920－	明治学院勤務開始時より帰国時に至るまで明治学院理事であり、会計、書記を担当している。
1929	帰国、逝去。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988

■Poppin, Rev. J. J.　Poppen Rev. J., Ph.D.の誤りではないか

アメリカ・オランダ改革教会宣教師

	来日、帰国時期ともに不詳
1896	明治学院神学部で旧約、新約、希臘語を担当

時期不詳　　明治学院理事

資料　熊野雄七著『明治学院沿革略』明治学院　1917

注　『J. D.』各年度版に次の記録がある。
資料と照合して“Poppen” AMERICAN REFORMED CHURCH MISSION TOKYO
1897　Rev. J. Poppen, Ph.D. Meiji Gakuin, Shirokane
　　Mrs. J. Poppen,　　〃　　〃
1898　Rev. J. Poppen, Ph.D. Meiji Gakuin, Shirokane absent

■Ruigh, Rev. David Comelius　1872－1962

ライク　　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　来日期間　1905－1927

1872	アイオワ州に生まれる
1896	ニュー・ブランズウィック神学校卒業 卒業後、米国各地で牧会の職にあった
1902	宣教師として支那福建省厦門に赴任
1905	来日、盛岡に赴任
1910－17年度	明治学院において英語、希臘語、哲学を担当
1911	明治学院理事に就任　会計、書記を担当
1913	明治学院高等学部長に就任 各ミッション・スクールの高等学部合同問題につき、種々役割を果たす
1918－19年度	明治学院を辞し、休暇帰国
1921.　9	東山学院長に就任　笑はざる院長として幾多の逸話をのこした 院長在任中に米排日法に対し甚深の憂慮を懐き、1924年６月24日に新聞紙を通して次の如き要領の声明書を発表している ・我等は米国々会の行動を遺憾とし、其の通過したる議案は基督教の主義精神に違反するものなる事を信ず ・此処に特に言明し置き度い事は、数十年間日本及び我東山学院に多大の興味を有し居る彼の地の教会は、米国々会が日本人の感情を害し、又米国人の友誼を疑はしむるに至る様な行動を取りたる事を深く悲しんで居ると云ふ一事である　（以下略）
1927.　3	学院長を辞職し、帰国

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
井川直衛編『東山五十年史』東山学院　1933
『明治学院年史』各巻

■Ryder, Rev. Stephen Willis

ライダー　　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　在日期間　1913－1930

1913	来日、日本到着以後久留米、鹿児島、久留米、佐賀、長崎に居を移しつつ、各地の教会に奉仕した。
1921	休暇を終えて再来日し、一年間明治学院に勤務している

資料　『CYB』各該当年度

■Shafer, Rev. Luman James　1887.11.21－1958.1.1

シェーファー　　アメリカ・オランダ改革教会宣教師

1887. 11	ニューヨーク州リッチモンドビルに生まれる
1901. 9	ニューヨーク州コブシケルのハイ・スクールに入学
1905. 9	ニュージャージ州ニューブランズウィックのラトガース大学に入学
1909	卒業
1909. 9	ニューブランズウィック神学校入学、1912年５月卒業
1912. 10	来日、東京日語学校に入学
1915. 3	青森に赴き伝道　９月、夫人の病気のため東京に戻り、明治学院神学部並に高等学部に勤務
1916	夫人病気のため夫妻で帰国
1918	再来日、長崎市で伝道
1919	長崎・東山学院院長代理となる
1922. 7	院長代理を辞任、伝道に従事
1923. 10	再度、院長代理となる
1924. 4	フエリス和英女学校仮校長として迎えられ、９月校長兼教授に就任　関東大震災後の同校復興に努力
1925－26	約一か年復興資金募金のため帰国

1931		ミッション本部の要務にて一年間帰国
1935		アメリカ・オランダ改革教会伝道局主事に任命され帰国
1946.	4	米国キリスト教会代表の４名のひとりとして来日　戦後のキリスト教界を視察
1949.	7	再度来日
1952.	4	フエリス女学院長に就任　６月に辞任帰国
1958.	1	心臓病のためフロリダ州ペニーファームの自宅で静養中、脳出血により逝去

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
山本秀煌編『フエリス和英女学校六十年史』フェリス和英女学校他　1931
フェリス女学院100年史編集委員会編『フェリス女学院 100年史』フェリス女学院 1970

■Stegeman, Rev. Henry Van Eyck

ステゲマン（ステグマン）　　アメリカ・オランダ改革教会宣教師

在日期間　1917－1941

1888.	3	南ダコタ州ハリストンに生まれる。 ホープ・カレッジ、ウエスタン神学校卒業
1917		来日、一旦明治学院に勤務の後、久留米に赴任。
1921		明治学院の講師となり、オルトマンス博士帰国中、主としてその課業を担当する。
1926.	1	明治学院理事となり、在任中任期が継続されている。30年の神学部分離、日本神学校設立時は、理事会常務委員として常務委員会報告を行なっている。
1927		明治学院神学部はオルトマンス教授の定年退職にともない、ステゲマン氏が後任の教授となり、新約聖書を担当した。1927年１月に就任式が行なわれた。同氏は就任に先立ちハートフォード神学校において新約を専攻している。
1929.	6	明治学院高等学部社会科がセッツルメントを設立するに際し、その発起人の一人としてW.C.Lamottとともに名を連ねている。
1930		日本神学校設立に伴い、ライシャワー氏と共に、同校講師に就任。
1933－34		休暇帰国
1935		再来日、フエリス女学校校長に就任

1940　　校長辞任
1941　　帰国

資料　鷲山弟三郎著『明治学院五十年史』明治学院　1927
フェリス女学校100年史編集委員会編『フエリス女学院 100年史』フェリス女学院 1970

■Terborg, Rev. John

タボーグ　　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　在日期間　1922－

1922　　来日、明治学院に勤務
1924－1934年度　鹿児島市内に居住し活動
日本基督教会関係ミッションとして、アメリカ・オランダ改革教会の議長を務めた
1935年度　　明治学院に移り、1937年度に休暇帰国。1938年に再び明治学院に勤務。日米交渉の破局に伴い矢野院長の配慮により、米人教師の教壇に立つことを遠慮してもらうとの措置と関連し比較的早期に帰国

資料　日本基督教会同盟年鑑委員編『日本基督教会年鑑』昭和５年
イヤーブック　各年度版
明治学院編『明治学院九十年史』明治学院　1967

■VanStrien, Rev. David

アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　在日期間　1912－1920

1912　　来日
1915　　明治学院講師、旧約釈義担当
1917－18　　明治学院理事
1913　　Morioka
1914　　500 Shimo Ochiai Mura, Tokyo Fu.
1915　　46 Hanasaki Cho, Nagano, Shinshu.
1916　　do
1917　　Kurume, Fukuoka Ken.
1918　　Sasayama Machi, Kurume, Fukuoka Ken.

1919　157 Sasaya Machi, Kurume, Fukuoka Ken.
1920　do

資料　熊野雄七著『明治学院沿革略』明治学院　1917
『CYB』各年版

■Verbeck, Guido. Herman Frindolin　1830.1.23－98.3.10

フルベッキ　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　在日期間　1859－1898

1830.　1　オランダのツァィストに生れる
モラヴィア教会で洗礼を受け、同派の学校で学び、学友を通して蘭、英、独、仏語を自由に話せるようになった。その後ユトレヒト工業学校で製図、機械工業のいったんを学び卒業
1852　ヨーロッパに於て北米に移住する者が多かったが、彼も義兄の呼び寄せにより渡米、技師としてウイスコンシンやアーカンソーのヘレナで架橋工事に従事
オランダと北米の気候の相違に適応し難く病を得た。快復の後は一切を捧げ神と人類とに仕えようと祈った。この誓いを生涯の終わりまで貫徹した。
1856　姉婿の勧めによりニューヨーク州オーバン神学校に入学、1859年卒業
1859.　9　来日
1862　長崎の済美館の英語教師となり、1864年校長となる。
1866　佐賀藩の致遠館で多くの俊秀を育成し、同年５月には家老職他に授洗、肥後藩、福井藩の若者を米国ラトガース大学への留学に尽力
1869　開成学校の設立を助け、のち大学南校教頭に就任し1874年同校を辞任。
1878　官職を辞し、東京一致神学校、学習院講師になり一時帰国。
1879　宣教師に復帰。各地の伝道に従事、又旧約聖書翻訳委員として「詩篇」を翻訳。
1883　大阪宣教師会議において*HISTORY OF PROTESTANT Mission in JAPAN*『日本プロテスタント伝道史』を発表。
1886　明治学院創立に際して理事、神学部教授に就任

1898.　3　　自宅で心臓麻痺のため逝去。芝教会で葬儀、棺は近衛儀仗兵の行列に守られ青山墓地に埋葬。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』新教出版社　1978
鷲山弟三郎著『明治学院五十年史』明治学院　1927

■Wyckoff, Rev. Martin Nevius　1850.4.10－1911.1.27

ワイコフ　　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　　在日期間　1872－1911

1850.　4　　ニュージャージー州ミドルブッシュに生まれる

1872.　6　　ラトガース大学で理学を学び1872年卒業
卒業し来日、同時に福井藩の招聘により、グリフィスの東京開成学校への転出に伴う後任として明新館に勤務　化学を教える筈であったが、実際は主として英語を担当。

1874.　9　　新潟の外国語学校教師に転任

1876　　東京大学予備門の教師となる

1877　　帰国、母校ラトガース大学の物理学の講師となり、翌年に同大学の予備校サマビル町のグラマー・スクールの校長を務める

1881.　9　　宣教師として来日、改革教会は神学校で学ぶ人物の育成するための学校として先志学校を創設し、且つ、運営の中心となる人物としてワイコフを日本に派遣することにした

1883　　先志学校と（＊J. C. バラの）築地大学校が合併し東京一致英和学校となるに当たり（＊教授となり）、以後30年近く同校教授として主に化学、物理を担当。一方理事を務めた。

1911.　1.　27　　学校にて逝去の前日まで一週間二十五時間担当していたが、突如として心臓マヒのため逝去　没年61歳　（＊白金）瑞聖寺に埋葬されている

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
明治学院編『明治学院百年史』明治学院　1977
手塚竜麿著『日本近代化の先駆者たち』吾妻書房　1975

■Zander, Miss Helen R.　1906.8.10－

ザンダー　アメリカ・オランダ改革教会宣教師　在日期間　1928－1934 1937－1974

1906.　8	ニューヨーク州Schenectady に生まれる　07年幼児洗礼を受ける
1928.　8	ホープ・カレッジを卒業後来日、梅光女学院に赴任、翌年明治学院に移る
1929.　6	フエリス和英女学校に英語教師として（ミス・オルトマンス休暇帰国中の代理）赴任
1930.　7	同上校に英語教師として正式に赴任
1941.　3	帰国
1947	再来日、戦後の物資不足の日本に赴任するに当たり、自分の荷物を減らし、アメリカ・リフォームド・ミッションよりフエリス女学院へ寄贈のタイプライター10台を持参している
1949.　11	学院創立八十周年記念式典の席上勤続20年として表彰される 女子学院教師に就任
1963	勲五等瑞宝章を受章
1968	「横浜市文化賞」受賞

資料　日本基督教会同盟年鑑委員会編『基督教年鑑』1921～41
フェリス女学院100年史編集委員会編『フエリス女学院 100年史』フェリス女学院 1970

明治学院教師及び関連校教師

■明治学院
□関連学校

第３部　スコットランド一致長老教会（UP）宣教師の部

■Davidson, Rev. Robert Young　1846.5.9－1909.3.11

デイヴィッドソン　　スコットランド一致長老教会宣教師　　在日期間　1874－1901

1846.　5　　エディンバラに生れる
　　エディンバラ大学に学び、次いで一致長老教会神学校卒業
1874.　3.　5　同派にとり最初の宣教師としてフォールズ, H.　夫妻と共に来日。
　　東京・築地に住み伝道活動を開始。
1876　　夏、三浦徹と共に千葉で路傍伝道を開始。僧侶と激しく対立、討論を行ない迫害を受ける。なお、宇都宮などでも宣教活動を行なっている。
1877　　両国橋教会を建設、仮牧師となる
　　カラゾルス, C. の築地大学校で教える。
1878　　聖書翻訳常置委員会委員となる
1879.　1.　18　両国橋教会は前年12月始めより従来の集会の家を毀ち、新会堂を建築。献堂式を行なう。
1880　　エルドレッド, C. E.（アメリカ長老教会宣教師、1877年来日）と結婚
1881.　12.　15　日本で約8年間働き休暇を得て帰国
1882　　帰任後、都市と郊外で手広く福音宣教の働きをする
1894　　明治学院理事会員となる。
1884　　ヘボン, J. C. と共に『列王記略　下』を翻訳、出版
1901　　壮年期からの中風のため、かつ、スコットランド・ミッションの日本に於ける活動停止のこともあり帰国隠退
1903.　3　　エディンバラで逝去

資料　G.F.フルベッキ著『History of Protestant Missions in Japan』R.Meiklejohn 1883
日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
植村正久著『植村正久と其の時代』教文館　1966
明治学院編『明治学院百年史』明治学院　1977
門脇清他著『門脇文庫日本語聖書翻訳史』新教出版社　1983

■Faulds, Dr. Henry. E　1843.6.1－1930.3.19

フォールズ　　スコットランド一致長老教会宣教医　　在日期間　1874－1886

最初の宣教医

1843　スコットランドのエイルシャイアに生れる

1871　アンダーソン大学で医学を学び、聖トマス病院でインターンを終了

1872　インドに渡り、ダァジイリングで宣教、医療に従事。帰国、結婚。

1874. 3. 5　R. デビットソンと共に来日、医学博士であり、同年５月に築地に施療所を開始。たちまち評判となる。又、自分のまわりに多くの医学生を集めた。

1875　築地南小田原四丁目に「築地ホスピタル」を開く。日本名は「健康社」であるが「築地病院」として知られる。多数の入院患者、外来患者を迎えた。帰国まで診療にあたる。築地病院の外来患者数は年間14,000人に達していたが、臨床と同時に医学生の養成にあたった。

1878　進化論の眞面目を論述し、『變遷論』を記述

1880　築地病院との関係で数年間冬期に宗教に関する科学上の諸問題について講演会が行われ、良い結果を得た

1880　秋上野公園において基督教各派合同の野外大演説会が開催されたが、フォールズは（＊この発起人の一人であった。）

1880. 10　日本で証文に手形（＊瓜印）を墨で押す習慣があったことを知り、多くの日本人の指紋を採集し、科学的研究により「手の隆線に就て（＊“*Skin Furrows of the Hand*”）」なる研究論文を英国の自然科学雑誌『ネーチュア』に発表

1880　築地病院に於ける眼科手術を通し、日本に盲人の多いことに注目し、盲人救済施設「楽善会」を組織。フォールズ博士自身、視力障害者のための書籍を印刷する特殊な活字を用意し、視力障害者のための図書館を設立（＊聖書凸字本を米国で印刷、図書館は不明）

築地の海軍用地に「訓盲院」を設立。同院は1885年に官立の「東京盲唖学校」となった。

1880. 6　J. バラの主宰する築地大学校に創立時より特別講師、英語教師として名を連ねた。

1882. 10. 20　休暇を得て帰国

1886　　妻の病気のために帰国　開業しながら指紋の研究を続けた
一致英和神学校で特別講義に出講

資料　G.F.フルベッキ著『History of Protestant Missions in Japan』R.Meiklejohn 1883
日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
手塚竜麿著『日本近代化の先駆者たち』吾妻書房　1975
植村正久著『植村正久と其の時代』第五巻教文館　1966

□Gamble, Miss A. M.　1873－

ギャンブル　　スコットランド一致長老教会宣教師　　アメリカ長老教会より移籍
在日期間　1873－1880

1873　　来日

1875　　アメリカ長老教会より移籍、女子教育に専念
三浦女学校で普通学を担当

1880　　ミッションとの関係が切れ、イギリスに帰った

資料　G.F.フルベッキ著『History of Protestant Missions in Japan』R.Meiklejohn 1883
手塚竜麿著『日本近代化の先駆者たち』吾妻書房　1975

□Lindsay, Rev. T. S.

リンゼー　　スコットランド一致長老教会宣教師　　在日期間　1882.12.9－

1882. 12.　9　来日、東京宣教地に加わる

1883－6　　18 Akashi-cho Tsukiji. Tokyo

1887－8　　41, Imai-cho, Tokyo

1889－90　　absent Tokyo

資料　G.F.フルベッキ著『History of Protestant Missions in Japan』R.Meiklejohn 1883
『CYB』各年度分

■McLaren, Rev. Samuel Glifillan

マクラレン　　スコットランド一致長老教会宣教師　　在日期間　1875.10.4－

1875. 10.　4　来日　東京に駐在

1877　一致神学校開設以来、旧約歴史、聖書地理、教会史および聖書緒論を担当
1879　神学教育のためにほとんどの時間を費やし、時折説教をなし文書活動を行なう
1881　一致神学校の正規の教師の一人として関係を持ち、又、文書伝道と随時説教とに仕えた。
1882　旧約聖書歴史に関する著書の出版を計画、批評的聖書緒論を執筆中である。

資料　G. F. フルベッキ著『History of Protestant Missions in Japan』R. Meiklejohn 1883
日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
熊野雄七編『明治学院沿革略』明治学院　1917

■Waddell, Rev. Hugh　1840－1901.6.20

ワデル　スコットランド一致長老教会宣教師　在日期間　1874－1901

1840　アイルランドに生まれる
1859　大覚醒運動の影響を受け牧師を志願
ベルファストのロイヤル・アカデミカル・インスティチュート及びクィーンズ大学、アッセンブリー・プレスビテリアン大学に学ぶ
1868　牧師の准允を受ける
1869－1871　アイルランド長老教会の援助のもとで、中国北部に駐在。
1871　健康をそこねて帰国を余儀なくされる
1872－1874　アイルランド長老教会の援助のもとで、スペインで宣教師活動を行なった
1874　スコットランド一致長老教会の日本伝道開始にあたり、妻ジェーンとともに来日
カラゾルス, Cの築地大学校で教え、その後芝西久保葺手町に私塾を開設
1879　私塾を中心にミッションにとって二番目の教会設立にあたる葺手町教会を発足
1881　ワデル氏の男子学校は同志の都合により一時中断したが、晩秋に再開

1886　マクラレン, S. G. の後任として東京一致神学校教授に就任、旧約歴史と聖経文学を担当。その後明治学院理事員及び神学部教授として、スコットランド一致長老教会を代表として同学院に関係した。旧約、聖地地理、宗教心理学、希伯來語を教える
旧約聖書翻訳常置委員として貢献

1892　帰国中の妻が子供を残して急死。ワデル氏急遽帰国

1895　アーサーと結婚し、再来日
聖書翻訳にあたり「Holy Spirit」を「聖霊」と訳すことに反対､「聖気」と訳すべしと強硬に主張。

1900　スコットランド一致長老教会ミッションが日本からの引揚げを決議した事と、自己の病気のこともあり７月に帰国

1901　ベルファルトのグランダー・ガーデンで逝去

資料　G. F. フルベッキ著『History of Protestant Missions in Japan』R.Meiklejohn 1883
日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
手塚竜麿著『日本近代化の先駆者たち』吾妻書房　1975
植村正久著『植村正久と其の時代』教文館　1976

■Welsh, Rev. R. E.

ウェルシュ　スコットランド一致長老教会宣教師　在日期間　1880.6.24－1881.1

1880.　6　来日、しかし翌年一月健康をそこねやむなく辞任、帰国

資料　『History of Protestant Mission in Japan』

＊■Palm, Theobald A　1848－1928

パーム　スコットランド一致長老教会宣教医　在日期間　1876.4－

新潟で病院を開院し、伝道

資料　明治学院編『明治学院百年史』明治学院　1977　P48-52

明治学院教師及び関連校教師

■明治学院
□関連学校

第４部　北米南長老教会（PMS）宣教師の部

■Cuming, Rev. Calvin Knpx　1854.7.1－1935.3.25

カミング　アメリカ南長老教会宣教師　在日期間　1892－1925

1890　徳島より冀望館に移りランドルフを補佐
1891　岐阜教会設立に尽力
1894　オナ・パタソンと結婚
1903　金城女学校理事に就任
1905　神戸定住宣教師プライスの休養帰国にともない、後任として神戸に移る
1905　明治学院の財団法人設立時理事
1907　神戸神学校創立時より学校のため尽力

資料　熊野雄七編『明治学院沿革略』明治学院　1917
J.A.カグスウェル著『夜が明けるまで：南長老派ミッションの宣教の歴史』新教出版社　1991
真山光弥著『愛知のキリスト教』新教出版社　1992
秋山繁雄著『続明治人物拾遺物語：キリスト教の一系譜』新教出版社　1987

■Buchanan, Rev. William Cumming　1865－1955

ブキァナン　アメリカ南長老教会宣教師　在日期間　1891－1935

1891　来日
1897　瀬戸永泉教会を応援し、自給独立のための資金獲得にあたっては、物品販売等に協力
1898　善通寺に兄弟で赴任、熱心に伝道、県の西端にまで伝道
1905　明治学院の財団法人設立認可時の理事、南長老教会が明治学院との協力関係を中止するにあたり、理事辞任
1907　神戸神学校が設立に尽力し、開校後同校教授に就任
？　中央神学校の校長に就任

1917　岐阜に定住して伝道に協力、岐阜教会の独立に尽力。
1922　夫人逝去
1938　帰国
1955　逝去

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
明治学院編『明治学院九十年史』明治学院　1967
J.A.カグスウェル著『夜が明けるまで：南長老派ミッションの宣教の歴史』新教出版社　1991
真山光弥著『愛知のキリスト教』新教出版社　1992
秋山繁雄著『続明治人物拾遺物語：キリスト教の一系譜』新教出版社　1987

■Price, Rev. Henry B.　1864－1906

プライス　アメリカ南長老教会宣教師　在日期間　1887－1906

1887. 10　マカルピンと共に冀望館の御雇教師として名古屋に赴任、活動の拠点とし、名古屋伝道を開始　後日、名古屋ステーションを設立、
1888. 9　ミッションの都合により高知に移動
1897－1903　神戸に於ける宣教活動の確立に尽力。独自の伝道方策を行ない、その一環として「街道建築協会」を設立。後日、同協会の積立金により「プライス基金」が発足した。
1898. 4　兵庫永沢町及び葺合に小講義所を設置。のちに兵庫教会及び布引教会となる。
1898　英語夜学校「フェースホーム」を設立、英語教育を通しキリスト教の信仰に導びこうとする学校を設立
1905　明治学院財団法人設立時の理事
1906　兵庫教会は１月に永沢町に土地付家屋を購入し、６月に増築、改修が竣工し、名称を「湊川教会」と改めたが、プライス、カミング、プカナン、マイヤス、ローガンの諸宣教師の協力があった
1905　休養のため帰国
1906　日本で逝去

資料　熊野雄七編『明治学院沿革略』明治学院　1917
真山光弥著『愛知のキリスト教』新教出版社　1992
J. A. カグスウェル著『夜が明けるまで：南長老派ミッションの宣教の歴史』新教出版社　1991
秋山繁雄著『続明治人物拾遺物語：キリスト教の一系譜』新教出版社　1987

■Fulton, Rev. Samuel Peter　1865.8.17－1938.9.15

フルトン　アメリカ南長老教会宣教師　在日期間　1888－1938

1865.　8	サウスカロライナ州ウイリアムスパークに生れる
1868	三歳にして相次いで両親が逝去、八歳よりソーンウエルの児童施設で育つ
1884	サウス・カロライナ州クリントンのプレスビテリアン大学卒業
1884－86	コロンビア神学校にて勉学
1886－87	ヴァージニア州のユニオン神学校にて勉学
1887－88	サウス・カロライナ州ローリスヴィルのシオン教会牧師
1888.　4.　13	エノール中会にて按手礼を受ける
1888	来日
1888	ラケル・ペックと結婚
1888－89	名古屋市のR. E. マカルピンの働きに加わり、主に日本語の研究に従事。後日、その日本語は新渡戸稲造より「日本語のすぐれた外国人三人のうちの一人」と高く評価された。
1890－01	岡崎市に駐在、応用英学会（のちに共同館と改称）にて英語教育に携わるとともに伝道に尽す
1901	南長老ミッションは自己の神学校がなかったため、当初東山学院神学部に依託していたが、同部の閉鎖に伴い明治学院神学部に依託することとした 住居を東京に移し、明治学院教授として新約聖書文学、釈義及び聖書神学を担当
1907	南長老ミッションは明治学院神学部との提携を中止し、神戸神学校を設立。フルトンは校長に就任
1927	神戸神学校と大阪神学院が合併して中央神学校設立された後は同校において校長及び教授として新約緒論及び組織神学を担当 一時期明治学院理事を務める
1938.　9.　15	夏になり軽井沢にて静養中に健康を害し軽井沢病院にて療養に務めたが全快せず逝去。（＊神戸市再度山修法ヶ原外人墓地に埋葬）

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
熊野雄七編『明治学院沿革略』明治学院　1917
『明治学院各年史』
中央神学校編集委員会編『エス・ピ・フルトンの生涯と神学思想』中央神学校同窓会　1976

■Logan, Rev. Charles Alexander　1874.11.14－1955.6.30

ローガン　アメリカ南長老教会宣教師　在日期間　1902－1941

1893	センター大学卒業
1899	ジャクソン・コレジェート（のちのリーズ・カレッジ）で3年間教える
	ケンタッキー州ルイヴィル神学校を経て、プリンストン神学校卒業
	来日宣教師マイアース, H. W. の姉パティと結婚
1902. 12. 22	来日、徳島市内に居住。徳島教会を本拠として四国伝道に当る。
1907	フルトン, S. P. が神戸神学校を設立すると、これを援助
1928	妻、急性肺炎で逝去
1936	上京、東京を中心に応援伝道に携わる
1940	南長老教会との協力関係の終結に伴い、明治学院理事を辞任
1941	帰国　ナシュビルの教会を牧す
	戦後、妻娘と共に来日、日本各地を巡回伝道を行なう。
	徳島在任中の聖書研究会を通じ少年時代の賀川豊彦に影響を与えた。

資料　日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館　1988
J. A. カグスウェル著『夜が明けるまで：南長老派ミッションの宣教の歴史』新教出版社　1991
真山光弥著『愛知のキリスト教』新教出版社　1992
秋山繁雄書『続明治人物拾遺物語：キリスト教の一系譜』新教出版社　1992

明治学院神学部　理事、教授他教員名簿

M26－S2（1893－1927）

J．M．McCauley	H．B．Price	D．A．Murray
M．N．Wyckoff	C．K．Cumming	D．VanStrien
D．Thompson	W．M．Buchanan	A．Pieters
J．H．Ballagh	W．C．Buchanan	W．E．Hoffsommer
G．F．Verbeck	S．P．Fulton	V．S．P．Peeke
E．S．Booth	S．R．Hope	H．V．Peeke
R．Y．Davidson	A．Oltmans	A．Walvoord
G．W．Knox	B．C．Haworth	H．D．Hannaford
W．Imbrie	R．E．McAlpine	W．G．Hoekje
H．M．Landis	H．B．スカルダ	J．G．Dunlop
H．Harris	C．A．Logan	M．C．Winn ?
J．C．Ballagh	T．M．MacNair	W．C．Lamott
T．T．Alexander	D．C．Ruigh	J．B．Ayres
R．E．Miller	A．K．Reischaue	L．J．Shafer
J．J．Poppin	H．Kuyper	

＊氏名前の英字は派遣ミッションの名称　PMはプレスビテリアンミッション・RCAはリフォームドチャーチ・UPはスコットランドユニオンプレスビテリアン・PMSは南プレスビテリアンミッションを表わす。氏名が片カナの宣教師は氏名綴りが不明であり、当時の表現を使用した。
また年号のMは明治、Tは大正、Sは昭和を表わす。

▽PM	J. M. McCauley	マコーレイ
M26.　5 より	理事会員	書記
M28.　4 より	同	

▽RCA	M. N. Wyckoff	ワイコフ
M26.　5 より	理事会員	会計　嘱託教師　英語
M28.　1 より	同	
M29.　11	嘱託教師	英語学
M31.　9 より	理事会員	書記
M33.　3 より	同	同
M35　現在	同	同
M36.　3	同	同
M37.　2	理事員	同
M38.　4	理事員	同
M39.　3－40.　1	理事員	同
M40.　2	理事	同
M42.　2	理事　会計	
M43.　10	理事　会計	

▽PM	D. Thompson	タムソン
M25.　1 より	理事会員	
M29.　1 より	理事会員	
M33.　3 より	理事会員	
M35.　5	理事会員	
M36.　3	理事員	
M37.　2	理事員	
M38.　4	理事員	

▽RCA　J. H. Ballagh　バラ

M27.　1 より	理事会員	
M29.　1 より	同	
M33.　3 より	同	
M35.　5 より	同	
M36.　3	理事員	
M37.　2	理事員	会計
M38.　4	理事員	
M40.　2	理事	会計
M39.　3－40.　3	理事	
M42.　2	理事	
M43.　10	理事	
M44, 45	理事	
T　3,　4	理事	
T　5.　1－　6.　12	理事	

▽RCA　G. F. Verbeck　フルベッキ

M25.　1 より	理事会員	
M26.　6	教授	旧約釈義　説教学
M29.　1 より	理事会員	

▽RCA　E. S. Booth　ブース

M25.　1 より	理事会員	
M27.　1 より	同	
M33.　3 より	同	
M35.　5 より	同	
M36.　3	理事員	
M37.　2	同	
M42.　2	理事	
M43.　10	理事	
M44, 45	理事	

T 2, 3		理事
T 3, 4		理事
T 4, 5		理事
T 8		理事
T 8. 1－ 9. 12		理事
T 10. 1－11. 12		理事

▽UP　R. Y. Davidson　デビソン

M27. 1 より		理事会員
M29. 1 より		同
M33. 3 より		同

▽PM　G. W. Knox　ノックス

M26. 6		役員　書記　教授　組織神学　心理学

▽PM　W. Imbrie　インブリー

M26. 6		教授　新約釈義　教会政治
M28. 10		教授　同　同
M30. 6 より		理事会員　教授　新約釈義　福音史　希臘語
M30. 12		職員　書記
M31. 11		同　教授　新約釈義　教会政治　希臘語
M33. 3 より		理事会員
M34. 2		職員　書記　教授　新約釈義　旧約史　旧約
M35. 5		理事会員　職員　書記　教授　旧約歴史並
M36. 3		理事員　同　同　系統神学
M37. 2		理事員　同　同　同
M38. 4		理事員　同　同　同
M39. 3－41. 3		理事員　同　同
M40. 2		理事　同　同
M40. 12		教授　同

M42.　2	理事		教授　系統神学		
M43. 10	理事	教授　系統神学	新約聖書神学	新約	
M44, 45	理事	教授　同	同	同	
T 2, 3	理事	教授　同	同	同	
T 3, 4	理事	教授　同	同	同	
T 4, 5	理事	教授　同	同	同	
T 6.　1－ 7. 12	理事	教授　同	同	同	
T 7		教授　同	基督教倫理		
T 8　－ 9	理事	理事会議長	教授　新約神学	新約釈義	
	教理史　基督論				
T 8.　1－ 9. 12	理事				
T 9－S 2	名誉教授				

▽PM　H. M. Landis　ランデス

M26.　6	嘱託教師	ギリシャ語　倫理学			
M27.　6 より	理事会員	教授			
M28. 10		新約釈義　福音史	希臘語		
M29. 11	教授	同	同	同	（帰国中）
M39.　3－40.　3	理事員				
M39.　3－40.　3	理事				
M40.　2	理事				
M42.　2	理事				
M43. 10	理事				
M44, 45	理事				
T 2, 3	理事				

▽RCA　H. Harris　ハリス

M26.　6	嘱託教師	音楽　讃美歌		
M28. 10	同	英語　史学		
M29. 11	同	音楽　讃美歌		
M30.　1 より	理事会員	書記　嘱託教師	音楽	讃美歌

▽PM	J. C. Ballagh	バラ
M28.　4 より	理事会員	
M29.　1 より	理事会員	会計
M33.　3 より	同	同
M35.　5	同	同
M36.　3	同	同
M37.　2	理事員	同
M38.　4	同	同
M39.　3－41.　3	同	同
M40.　2	理事	
M39.　3－41.　3	理事	会計
M42.　2	理事	
M43. 10	理事	
T 2, 3	理事	

▽PM	T. T. Alexander	アレキサンドル			
M28. 10	職員　書記	教授	系統神学	聖書神学	旧約歴史
M29. 11	職員　書記	教授	同	同	希伯來語
M30. 12		嘱託教師	同	同	
M31. 11		嘱託教師	同	同	

▽PM	R. E. Miller	ミロル		
M28. 10	嘱託教師	旧約釈義	旧約史	説教学
M29.　1 より	理事会員			
M37.　2	理事員			
M39.　3－41.　3	理事員			
M40.　2	理事			
M39.　3－41.　3	理事　書記			
M42. 12	講師	新約緒論	旧約歴史	
M42.　2	理事　書記	講師	新約釈義	
M43. 10	理事　書記			

M44, 45　　理事　書記
T 2, 3　　理事　書記

▽RCA　J. J. Poppin　ポピン（＊Poppen ?）

M29. 11	教授	旧約釈義	希臘語
M30. 12	同	同	希伯來語
M31. 11	同	同	同

▽PMS　H. B. Price　プライス

M35. 5 より　理事会員
M36. 3　理事員

▽PM　C. K. Cumming　カミング

M35. 5 より　理事会員
M36. 3　理事員
M37. 2　理事員

▽　W. M.

M35. 5 より　理事会員
M36. 3　理事員

▽PMS　W. C. Buchanan　ビウケナン

M37. 2　理事員
M39. 3－41. 3　理事員
M40. 2　理事

▽PMS	S. P. Fulton	フルトン		
M35.　5	教授	新約釈義並緒論	希臘語	
M36.　3	同	同	同	
M37.　2	同	同	同	
M38.　4	同	同	新約神学	
M39.　5	同	同	同	
M40.　2	同	同	同	
M44, 45	理事			

▽PMS	S. R. Hope	ホープ
M37.　2	理事員	

▽RCA	A. Oltmans	オルトマンス		
M37.　2	教授	旧約釈義並緒論	希伯來語	
M38.　4	同	同	旧約神学	
M39.　5	同	同	同	
M40.　2	同	同	同	
M42.　12	同	同	同	
M43.　10	同	同	新約釈義　緒論　希臘語	
M44, 45	教授　希伯來語　聖書解釈法			
T　2,　3	理事　教授　希伯來語　聖書解釈法			
T　3,　4	理事　教授　旧約釈義　緒論　新約釈義　緒論 希臘語　希伯來語　聖書解釈法			
T　4,　5	理事　教授　旧約釈義　緒論　新約釈義　緒論 希伯來語　聖書解釈法			
T　6.　1－　7.　12	教授　旧約釈義緒論　新約釈義緒論　希伯來語 聖書解釈法			
T　7	教授　新約聖書神学　新約釈義　教理史　基督論			
T　8	教授　新約釈義　新約緒論　聖書解釈法　希臘語			
T　9.　1－10.　12	理事　議長　教授　新約			
T10.　1－11.　12	理事　議長　総理事務取扱　教授　新約			

T 11　　教授　新約
T 12.　1－13.　12　理事
T 12　　教授　新約
T 14.　1－15.　12　理事
T 14.　11　　教授　新約
S　2.1.1　－　3.12.31　理事

▽PM　B. C. Haworth　ハヲルス

M　8.　4　　講師　系統神学　音楽

▽PMS　R. E. McAlpine　マカルピン

M39.　3－40.　3　理事員
M40.　2　　理事

▽　H. B　スカルダ（＊Scudder?）

M39.　3－40.　3　理事員
M40.　2　　理事
M39.　3－40.　3　理事

▽　C. A. Logan　ローガン

M40.　2　　理事

▽PM　T. M. MacNair　マク子ヤ

M40.　2　　講師　讃美歌音楽
M40.　12　　同　　同
M42.　2　　同　　同

▽RCA　D. C. Ruigh　ライク

M44, 45	理事	会計	講師	希臘語	
T 2, 3	理事	会会計	講師	同	
T 3, 4	理事	会会計	講師	同	基督伝
T 4, 5	同		講師	同	同
T 6	同		講師	同	同
T12. 1－13. 12	理事				
T14. 1－15. 12					

▽PM　A. K. Reischauer　ライシャワル

M44, 45	講師	希臘語			
T 2, 3	講師	同			
T 3, 4	理事	書記	講師	希臘語	哲学
T 4, 5	理事	書記	同	同	同
T 5. 1－ 6. 12	理事	書記			
T 6		講師	同	同	
T 7. 1－ 8. 12	理事	書記			
T 7	講師	宗教哲学	弁証学	有神論	系統神学
T 9. 1－10. 12	理事				
T 9	教授	系統神学			
T10. 1－11. 12	理事	書記	教授	系統神学	
T11. 1－12. 12	教授	同			
T13. 1－14. 12	理事				
T12	教授	系統神学			
T13	教授	宗教史			
T14. 1－15. 12	理事				
T14. 11	教授	宗教学	神学部予科講師	希臘語	哲学史
T15	同	同	同	同	同
S 2.1.1 － 3.12.31	理事				
S 2. 11	教授	宗教学	神学部予科講師	希臘語	哲学史

▽RCA	H. Kuyper	カイパー
M44, 45	講師	讃美歌音楽

▽PM	D. A. Murray	モリー
T 3, 4	理事	
T 4, 5	理事	
T 5. 1－ 6. 12	理事	
T 7. 1－ 8. 12	理事	
T 8	講師	系統神学　基督伝
T 9. 1－10. 12	理事	
T 9	講師	系統神学　基督伝
T 10. 1－11. 12	理事	

▽	D. VanStrien	ヴァンストリーン
T 6	理事	
T 6. 1－ 7. 12	理事	
T 8	理事	

▽RCA	A. Pieters	ピータルス
T 7. 1－ 8. 12	理事	
T 11. 1－12. 12	理事	

▽RCA	W. E. Hoffsommer	ホフソンマル
T 7. 9	理事会会計	

▽RCA	V. S. Peeke	ピーク
T 7	講師	希臘語　新約釈義及文学

▽RCA　H. V. Peeke　ピーク

T 9.	1－10. 12	理事　会計
T 9		理事会　会計
T 10.	1－11. 12	理事
T 11.	1－12. 12	理事　書記　会計
T 13.	1－14. 12	理事　書記　会計
T 14		会計
T 15.	1－16. 12	理事
T 14. 11		理事会　会計
S 3. 1.1－	4.12.31	理事

▽　A. Walvoord　ワルヴオールト

T 8		理事

▽PM　H. D. Hannaford　ハナフォード

T 8		理事
T 8.	1－ 9. 12	理事
T 10.	1－11. 12	理事　会計
T 12		講師　讃美歌音楽
T 13.	1－14. 12	理事　書記
T 13		講師　讃美歌音楽
T 15.	1－16. 12	理事
T 14. 11		理事会　書記　講師　讃美歌音楽
T 14. 11		神学部予科教授　聖書　英文学　教育学
T 15.	1－16. 12	理事　書記
T 15. 11		講師　讃美歌音楽　神学部予科　聖書　文学　教育学
S 2. 11	理事会	書記　同　同　同　同

▽RCA　W. G. Hoekje　ホキエ

T 8.　1－ 9. 12　理事
T 10.　1－11. 12　理事

▽PM　J. G. Dunlop　ダンロップ

T 9　理事会　書記
T 11.　1－12. 12　理事
T 15.　1－16, 12　理事

▽PM　M. C. Winn ?　ウイン

T 10.　1－11. 12　理事　在金沢

▽PM　W. C. Lamott　ラマット

T 12.　1－13. 12　理事
T 14.　1－15. 12　理事
T 15　理事会　会計
S 3. 1.1－ 4.12.31 理事
S 2. 11　理事会　会計　神学部予科　聖書　英文学哲学

▽PM　J. B. Ayres　エイレス

T 12.　1－13. 12　理事

▽　L. J. Shafer　シェーファー

T 13.　1－14. 12　理事

▽PM　G. P. Pierson　ピアソン

T 13.　1－14.　12　理事
T 14.　1－15.　12　理事

▽　G. A. Mokma　マクマ

T 13　講師　英文学

▽　S. W. Ryder　ライダー

T 15.　1－16.　12

▽　C. A. Dykhuizen　ダイクホイゼン

T 14.　11	神学部予科教授	聖書	英語	社会学
T 15.　11	同	同	同	同
S　2.　11	神学部予科	同	同	同

▽　P. S. Dykhuizen　ケート

T 14.　11　英語　英文学
会話

▽　H. V. E. Stegeman　ステゲマン

T 15.　1－16.　12　理事　教授　新約
S　3.　1.1－　4.12.31　理事

▽　T. D. Walser　ウオルサア

S　2.　1.1－　3.12.31　理事

▽　E. M. Clark　クラアク

S 3. 1.1－ 4.12.31 理事

▽　ダウキー

S 2. 11　神学部予科講師　社会学

明治学院大学創立以来ノ明治学院理事（外国人のみ記載・順不同）

			西暦	77787980	8182838485	8687888990	9192939495	9697989900	0102030405	0607080910	1112131415	1617181920	2122232425	2627282930	3132333435	363738
氏　名	教派	来日ー離日	明治	10111213	1415161718	1920212223	2425262728	2930313233	3435363738	3940414243	4445020304	0506070809	1011121314	1502030405	0607080910	111213
J.L. Amerman	(RCA)	1876-1892				◎										
S.G. McLaren	(UPS)	1875-1886														
G.W. Knox	(PM)	1887-1911				◎	o									
H. Harris	(RCA)	1883-						○								
J. McCauley	(PM)	1880-1897					○○○	○								
G.E. Verbeck	(RCA)	1859-1898				◎	o o	o o								
W. Imbrie	(PM)	1875-1922						o o　o	o o o o o	o o o o o	o o o o o	o o o ◎ o				
E.R. Miller	(RCA)	1872-1915						o o	o o	o o ○○○	○○○○					
M.N. Wyckoff	(RCA)	1881-1911					◇◇◇	◇A○　○	○○○○○	○○◇◇◇						
J.C. Ballagh	(PM)	1875-1920					o	◇◇◇　◇	◇◇◇◇◇	◇◇o o o	o o					
J.C. Hepburn	(PM)	1859-1892														
E.S. Booth	(RCA)	1879-1931					o o o o	o	o o o o o	A　o o	o o o o o	o　o o	o o			
H.M. Landis	(PM)	1888-1921					o ◇			o o o o o	o o o o					
R. Davitson	(UP)	1874-1901						o o	o o o　o	o						
J.J, Poppin																
W.M. Price									o o							
H. Waddell	(UPS)	1874-1900														
D. Thompson	(PM)	1863-1915					o o　A	o o o　o	o　o o o	o						
W.C. Buchaman	(PCUS)	1891-1935							o o o	o o						
B.C. Haworth	(PM)	1887-1905*														
G.W. Fulton	(PM)	1889-									o o					
I.T. Meyers																
R.E. McAlpine	(PCUS)	1885-1932								o o						
A. Oltmans	(RCA)	1886-1938									o o	o◎◎o o	o o			
A.K. Reischau	er (PM)	1905-1941									○○	○○○○o	○o　o o	o o o		
S.R. Hope	(PMS)	1892-1907							o o							
J.S. Scudder																
D.A. Murray	(PM)	1902-1921?									o o	o o o o o	o o			
D.VanStrien	(RCA)	1912-1919										o o o				
A. Pieters	(RCA)	1891-1925														

氏　名	教派	来日ー離日		77787980	8182838485	8687888990	9192939495	9697989900	0102030405	0607080910	1112131415	1617181920	2122232425	2627282930	3132333435	363738
H. Ballagh	(RCA)	1861-1919					○	○○○　○	○○○○○	○○○	○○　○○	○○				
H.B. Price	(PMS)	1887-1906														
C.K. Cumming	(PMS)	1889-1925							○○○○							
W. マク. ビウケナン																
S.R. Hope	(PMS)	1892-1907														
エチ. ビー. スカダル										○○○						
C.A. Logan	(PMS)	1902-1941								○						
A. Walvoord	(RCA)	1905-1919										○				
H.D. Hannafor	d(PM)	1915-1941											○○◇◇	○○○○	○○	
W. Hoekje	(RCA)	1907-1941										○	○○			
H.V.S.Peake	(RCA)	1893-1929										○	○○○○○	◇○○○		
M.C. Winn	(PM)	1916-1927											○○			
A. Pieters	(RCA)	1891-1925										○				
J.G. Dunlop	(PM)	1887-1932											○○	○○○○		
W.C. Lammott	(PM)	1919-1938											○	○○○○○	○	
D.C. Ruigh	(RCA)	1905-1927									◇◇◇	◇	○○○	○○		
J.B. Ayres	(PM)	1889-1929														
L.J. Shafer	(RCA)	1912-1936											○○	○○		
G.P. Pierson	(PM)	1868-1928												○○○○		
S.W. Ryder	(RCA)	1913-1931												○○		
T.D. Walser	(PM)	1916-1942												○○		
E.M. Clark	(PM)	1920-1941													○○	
A.B.タルス													○○			
H.V.E. Stegem	an(RCA)	1917-1941												○○	○○	

1886（明治学院設立）J.W.ノックス　M.N.ワイコフ　J.C.バラ　J.L.アメルマン　G.F.ヴァベック　T.M.マグネア　H.ワデル　以下日本人

1899（文部省訓令12号）　井深梶之助　山本秀煌　ワイコフ　J.C.バラ　稲垣信　石原保太郎　R.Y.デビソン　加藤勝弥　G.F.フルベッキ　巌本善治　D.タムソン　J.H.バラ　H.ハリス

1905（財団法人設立時）E.S.ブース　B.C.ハワルス　H.B.プライス　F.S.スカッダ　J.H.バラ　W.C.ブカナン　T.M.マグネヤ　J.C.バラ　C.K.カミング　以下日本人

1930（日本神学校設立時）E.M.クラーク　J.ダンロップ　H.カイパー　W.ラマート　L.J.シェーファー　H.V.E.ステゲマン　以下日本人

明治学院史に記載された外国人宣教師索引

明治学院の発行した『明治学院百年史』と『明治学院百五十年史』は人名索引がついているが、他の年史には索引がついていない。そこで瀬川和雄氏は以下の明治学院各年史に掲載されている外国人宣教師についての索引を独自に制作した。

原文はワープロフロッピーであり、変換を行い形を整えて掲載する。

＜ここに人名索引を掲載した年史＞

・熊野雄七編『明治学院沿革略』　1917年11月１日発行
・鷲山弟三郎著『明治学院五十年史』　1927年11月発行
・渡辺勇助編集・執筆『明治学院八十年史』　1957年11月発行
・明治学院編『明治学院九十年史』　1967年11月発行

＜他に人名索引のない年史＞

・A.Oltmans編集 *“MEIJI GAKUIN Semi Centennial 1877-1927”* 1927年発行

＜人名索引がついて発行された年史＞

・明治学院編『明治学院百年史』 1977年11月発行（執筆者代表 工藤英一）
・明治学院百五十年史編集委員会編『明治学院百五十年史』 2013年11月発行

＜注意＞

・宣教師名は各時代の代表的表記である。同一人物の名称が異なることがある。
・『明治学院沿革史略』の宣教師索引はワープロよりMS-DOS形式に十分な変換ができなかった。そのため、瀬川和雄氏の作成した「沿革史宣教師名簿メモ」をもとに、「各年史宣教師名出現比較表メモ」からヘボン以下の部分を抜き出して参照し、ア～フは松岡が『明治学院沿革略』にあたり作成するとともに、全員を『明治学院沿革略』と突き合わせた。

（研究調査員　松岡　良樹）

『明治学院沿革略』宣教師人名索引

アメルマンJ. L. 2 4 9 10 12 14 26 29 37
アレキサンダーT. 6 29
インブリーW. 4 7 9 10 19 26 29
ウインミスブラオン 1
オルトマンスA. 17 28 29
オルトマンスH. B. 47
カイパルH. 33
カミングC. K. 17 27
ガンブル 20
グリフィス 6
ジョンソンT. W. 33
スイフト 37
スカッダルF. A. 17
スカッダルJ. S. 28 47
スピーア 24
セベレンスH. L. 19 23
タムソンD. 27 30
チェンバレン 24
ナックスG. W. 9 10
ハウルスB. C. 17 27
バティ ブラオン 1
バラ J. H. 1 3 17 26
バラ夫人 23
バラ ミス アンネー 36
バラ J. C. 5 17 26 35
ハリス ハワルド 10 26 36
ハリス父子 12
ハウルスB. C. 32 47
バンストリン 28 33 47
ビヤソンG. P. 31 37
ビヤソン夫人 47
フォルヅH 36

ブカナンW. C.　17　27
ブースE. S.　17　26
ブライアンA. V.　30
プライスH. B.　17
プライスW. M.　27
ブラオンS. R.　1　2　3
フルトンG. W.　15　28
フルトンS. P.　29
フルベッキG. F.　4　12　26　30
ヘボンJ. C.　4　11　13　14　18　21　26　37
ヘボン夫人　4
ペントンO. N.　6　36
ホープS. R.　28
ボーンズA. B.　47
ポペンJ. J.　27　29
ホフソンマーW. E.　43
ノックスG. W.　5　6　7　9　26　29　35
マイヤースI. T.　28
マクネヤT. M.　10　17　26　36
マカルピンR. E.　28
マカルティーD. B.　31　36
マクラーレン　4　26　29
マコウレイJ. M.　5　6　10　26　35
マコウレイJ. C.　6　10
マコウレイ夫人　10　37
マレーD. A.　28
ミロル ロゼイE.　3　9　12　16　26　30
ミロル氏及び夫人　16
メーヤーズI. T.　28
ヤングマン
ライクD. C.　22　33　45
ライシャワルA. K.　25　28　33　43
ランヂスH. M.　24　27　31　37
ランヂス夫人　47

リンゼー 31
ローガンC. A. 28
ワイコフM. N. 6 9 10 11 17 18 21 26 36
ワイコフ夫人 47
ワデルH. 9 27 31 38

『明治学院五十年史』宣教師人名索引

・アメルマン　ジエイムス・エル　4　9　10　12　28　29　70　159　167　174　175　183　202　205　224　251　265

・アレキサンダー　トマス　57　64

・インブリー　ウイリアム　4　5　7　9　10　12　13　57　64　70　124　155　159　179　184　197　200　205　206　257　265　278　280　286　295　296　297　306　307　308　313　314　354　359　361　373　396-398　404　416-423　424　429　434　475　493　495　512

・ヴアーベツク　ギドー　エフ　5　6　7　9　13　14　17　18　23　95　97　106-128　162　167　176　179　197　205　224　291　385

・ヴアベツク夫人　112

・ウイン　28

・ウオルサー　480

・ヴオルベツキ　ジー・エフ　187　185　204　222　366　412　440

・エリス　238

・オルチン　429

・オルトマンス　125　313　394　429　474　476　477　481　485　486　487　495　496　497　498　499　500　512

・カミング　シー・ケー　318

・カラゾルス　7　8　105

・キダー　17　25　103

・グリーン　デー・シー　32　124

・クロスビー　441

・サムダム夫人（在米国）　200　202

・シモンズ　14　18　115

・シヨウ　124

・スカツダ　エフ・エス　318

・スタウト　122

・ステグマン　474　476　481　504

・ゼフレイ　200

・タムソン　6　7　8　9　123　124　125　127　291　479

・ダンロツプ夫人　426

・チグリーン オー・エイ 103
・デビス 359
・デビツトソン アール・ワイ 291
・デビツドソン 8 125
・ナツクス ジヨージ・ウイリアム 4 62 69 70 169 171 188 200 205 223 224 225 227 266 286
・ノツクス 197 227
・ナツクス ジヨウジ・ウイリアム 104 225 463
・ノツクス 105 167 176 179
・パイパー 124
・ハナフオード 476 499
・バツクストン 353
・バラ アール・エフ 204 352 371
・バラ 512
・バラ エー・ビー 190 204
・バラ ジヨン シー 3 4 52 57 61 62 64 67 103 104 105 106 138 147 166 167 184 193 194 202 204 264 291 318 359 429 431
・バラ ジエームス 6 21 22 28 59 60 115 127 150 155 291 354 430-431
・バラ ゼームス 318 431 432
・ハリス ハワルド 4 150 187 200 204 291
・ハワルス ビー・シー 318
・ピーク夫人 426 469
・ピヤソン（ジヨージ） 441 463
・フアイソン 125
・フオルズ ヘンリー 57 62
・ブカナン ウヰルリアム・シー 318
・ブース イー・エス 318
・プライス エチ・ビー 318
・ブラウン サムエル ロビンス 5 6 13 14 15-38 39 49 51 87 91 93 95 97 103 115 124 191 193 194 385 412
・ブラウン エス・アール（ヴアベツク夫人） 112
・ブラウン ハテイ 28 29

・ブラウン エス・アー 32
・ブラウン ナータン 32 124
・ブルツクハート 441
・フルベツキ 69 70
・ペントン オーリー・エス・ペントン 62 138
・ヘボン ジエームス カーチス 5 6 7 14 17 21 23 31 32 39 51 53 76-106 95 200 204 224 225 286 328 377-387 412 484
・ヘボン夫人 102 124 125 194
・ベーヤルド アンナ シー（ワイコフ夫人） 133
・ヘール 363
・マコーズランド夫人 426 427
・マクネア 512
・マクネヤ（チー・エム） 7 167 188 204 206 213 318
・マクラレン エヌ・ジー 9 10 12 159 200 252
・マコウレイ ジエイムス・エム 4 61 62 67 69 71 138 147 150 155 167
・マコウレイ夫人 150 155 190
・マニヨン マリア 115
・マツクレー 32 124
・マンヨン 17
・ミラー（イ・アー） 30 159 162 221
・ミラー イー・ロセイ 205
・ミラー 251 308 373 413
・ミリケン 479
・ミロル ロゼイ 189 200
・モーレイ 486 487
・ライニンガ 505
・ライシヤワル 373 430 470 474 475 480 496 499
・ライシヤワ 482
・ライシヤワル夫人 426
・ライク デイ・シー 399
・ライト 124
・ラマート 476
・ラマツト 504

・ラモット　499
・ランヂス　265 330 429 512
・ランヂス ヘンリー・エム　463
・ランヂス夫人　464
・ランデス　429 462
・ランデス夫人　351
・ランデス パウラ　352 371
・ワデル ヒユー　5 70 124 167 186 205
・ワイコフ エム・エヌ　4 128-135 136 138 147 150 167 174 179 185 197 204 206 213 215 278 280 291 296 297 313 354 359 361 362 363 412 512
・ルーミス　103

『明治学院八十年史』宣教師人名索引

・アメルマン ジェムス・エル　45 51 55 56
・インブリー ウイリアム　45 47 53 55 72 74 82 94
・ヴアーベツク ギドー エフ　1 7 18 26 28 29 30 31 39-41 46 47 51 53 55 56
・ヴアベツク夫人　31
・オルトマンス　51 82 86 90 95 96 97
・カラゾルス　47 48
・キダー（ミス）　22 31
・グリーン デー・シー　23 28
・シモンズ　17 19 20 40
・タムソン　47
・ノツクス　23 46 51 53 55 56
・バラ ジエームス　18 21 23 25 35 40 47 48 83
・バラ ジヨン シー　23 45 48 49 53 55 74 82 83
・ハリス ハワルド　46 55
・フアイソン　28
・ブラウン サムエル ロビンス　17 18 19 20 21 23 24 25 26 28 30-32 40 47
・ヘボン ジエームス カーチス　18 19 20 21 22 25 26 28 29 30 31 32-39 47 51 54 55 56 57 76
・ヘボン夫人（クララ夫人）　18 23
・ホキエ　51
・マクネヤ（チー・エム）　55
・マクラレン エス・ジー　56
・マコウレイ ジエイムス・エム　45 55
・マンヨン マリヤ　17 31 40
・ミラー　56
・モーレイ　90
・ライク デイ・シー　50
・ライシヤワ　50 97
・ランヂス ヘンリー・エム　85
・ランデス　82 91

・ランデス夫人　92
・ルーミス　23　78
・ワイコフ エム・エヌ　41-43　46　49　53　55　72　74
・ワデル ヒユー　46　55

『明治学院九十年史』宣教師人名索引

・アドリアンス　37
・アメルマン ジエイムス・エル　40 53 54 74 78 81 82 86 89 102 112
・アレキサンダー（トマス）　56 57 62
・アンドリウス夫人　157 159
・インブリー ウイリアム　53 54 56 58 62 81 86 102 112 123 124 127 142 148 150 156 159 168
・インブリー夫人　56
・ウオルサー テー・デー　201 226
・ウイン　40
・オルチン　158
・オルトマンス アルバート　112 113 117 168 171 172 173 189 192 193 198 201 211 212 213 214 229
・オルトマンス ミセス　229
・カイパー　エッチ　201
・カクラン　96
・カラゾルス　55 60 61
・カンミング シー・ケー　119
・キダー メリー　30 37
・クラーク イー・エム　200
・グリーン　O・H　53 56
・シェーファー エル・ゼー　201
・シモンズ　25 26 37 38 41
・シモンズ夫人　25 26
・スカッダ エフ・エス　119
・スタウト ヘンリー　45
・ステゲマン エッチ・ヴィ・キー　201
・ステゲマン　198
・スミス ジョン　229
・タボーグ　229
・タムソン（デビッド）　34 51 53 54 58 107
・ダロー　207
・ダンロップ ジエー　200

・デビス 124
・デビス夫人 124
・デビス 89
・デビソン（アール・ワイ） 51 53 107
・デマーク 229
・ネビウス 26
・ネビウス夫人 26
・ノックス（ジョージ・ダブリュ） 56 58 63 74 75 78 81 86 88 102 112 167
・ノツクス 89
・バラ ジェームス（H） 26 28 31 34 38 39 40 50 53 57 81 93 103 107 119 158
・バラ夫人 28 56 81 129
・バラ夫妻（ジェームス） 38
・バラ ジョン シー 159
・バラ夫人 97
・バラ エー・ビー（ジョン・バラの妹） 72 81 86
・バラ アール・エフ 86
・ハリス ハワルド 71 79 81 86 107
・ハワルス ビー・シー 119
・ハナホード（エイチ・ディ） 173 175 189 214 216 226
・ハナフォード夫妻 229
・ファイソン 47
・フォールズ ヘンリイ 63
・フォールズ（ヘンリー） 51 53 62
・ブラウンサムエル ロビンス 21 24 25 26 27 28 29 30 31 32 34 35 36-41 43 50 52 77 98 104 134 145
・ブラウン夫人 25 28
・ブラウン ハリエット 40
・フルベッキ G・F 25 35 37 41-47 51 52 54 74 77 79 86 87 96 105 107 134
・（バーベック） 42
・フルベッキ夫人（マリー・マンヨン） 37
・フルトン 109 110 124

・ブース イー・エス　119
・プライス エチ・ビー　119
・ブカナン ウキルリアム・シー　119 124
・ヘボン ジエームス カーチス　22 23 25 26 27 28 29 31 32 34 40 53 55 57 58 62 77 78 86 88 89 93 95 96 97 98 105 117 128 132-136 145
・リート クララ（ヘボン夫人）　22 24
・ヘボン夫人　28 29 30 31 62 117 136 161
・ヘボン夫妻　37 38 62 134
・ヘルム　229
・ヘール夫人（ワイコフの娘）　229
・ベントン オーリー・エヌ（オルリー）　63 65 70
・ホキエ　207 215 216 218-221 223 229
・ホフソンマー　144
・ボーベンカーク　229
・マカルピン アール・エー　124
・マクネヤ（チー・エム）　74 81 86 87 95 112 119 144
・マクラレン S・G　51 53 54
・マコーレー（ジエイムス・エム）　56 62 63 65 69 81 86 145
・マコーレー（ジェネー）　63 71
・マコーレー夫人　56 81
・ミラー ローゼイ　40 53 86 109 145 147
・ミラル　123
・ミロル　156
・ムーレー　171
・モリー デー・エー　158
・モーレー　168
・ヤングメン　60
・ライク　143 156
・ライシャワー A・K　95 112 145 152-155 159 176 189 198 229
・ライシャール　156
・ラマート（ウキリス）　189 201 221 229
・ランディス（ヘンリー・エム）　95 112 114 115 157 159 164 165-167
・ルーベン　229

・ルーミス 62
・ローガン シー・エム 124
・ワイコ(ウ)フ マーチン・N 64 65 69 74 75 81 82 86 95 96 98 107 112 114 115 117 124 130 145 229
・ワイコフ夫妻 64
・ワデル ヒュー 51 53 74 81 86 101 102

2018年３月31日印刷・発行

明治学院歴史資料館資料集【第13集】

編集代表　播本　秀史
発 行 者　小暮　修也
発 行 所　明治学院歴史資料館
東京都港区白金台１－２－37
電話　(03) 5421－5170
印 刷 所　有限会社 ボンズ企画
東京都千代田区富士見２－４－７
247ビル３階
電話　(03) 5215－2170